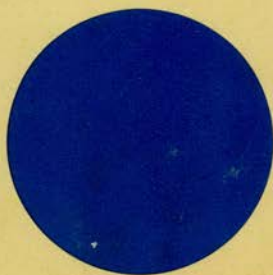


日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第14集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編

日本への回帰（第十四集）

—第二十三回学生青年合宿教室（阿蘇）の記録より—

昨年度の日本をめぐる国際情勢は、終始中国を軸にして展開されたといふ感が深い。八月十二日、永年の懸案であった日中平和条約が締結され、十月二十三日批准書交換により発効の運びに至ったが、懸念されてゐたいくつかの事項は未解決のまま残されてしまった。露骨な対日軍事同盟である中ソ友好同盟条約は、一九八〇年まで有効であるが、その廃棄については、遂に政府レベルでの公式確認はなされなかった。尖閣列島領有権の問題は、昨年四月の中国武装漁船団の領海侵犯の事実も不可解きはまることであつたが、賢明な次の時代の人民の決定に待たうといふ鄧小平発言によつて、巧みに棚上げされてしまった。日本側は連絡用ヘリコプター発着場の建設によつて、実効支配をもくろんでゐるが、そんなことで簡単に断念する相手とは思はれない。最後まで両国の合意をさまたげた焦点の「覇権条項」は、特定の国の覇権主義を指すものでないといふ了解のもとに条文の表現こそやゝ薄められたが、中国のいふ「覇権」がソビエトの国家意志と同義である以上、日本は否応なく対ソ包囲網に組みこまれてしまったのだ。締結後二ヶ月も経過せぬ中にソ越友好協力条約が成立したのは、間髪を容れぬソビエト側の対抗措置であつた。また、国後、択捉両島への兵力投入と軍事基地設営は、戦争末期の混乱期に強奪した北方領土の領有権を永久化しようとする意図の、傍若無人の表はれでなくて何で

あらう。日本が行った一つの「選択」は、かくのごとく国際場裡でその責任をきびしく問はれることになった。

壁新聞による毛沢東批判といふ、数年前には信じられなかった路線の大転換を図りながら、中国はもう一つ、世界の耳目をそばだたせる大きな賭けをやつてのけた。それは、本年の一月一日付で米中両国が国交正常化を行ふといふ宣言である。この一月末に、中国要人として始めて訪米した鄧小平は、俊敏果敢な行動によつて、一連の政府間協定の調印に成功した。高エネルギー物理学研究用の五百億電子ボルト加速器の購入、通信衛星の導入など、直ちに軍事科学に転用され、対ソ戦力の強化につながつてゆくであらう。「世界大戦の脅威はソビエトから」といふ彼のキャンペーンが、アメリカの世論形成にどんな影響力をもつか、刮目して注視すべきであらう。

鄧小平訪日によつて、日本人の主体性のなさが浮彫りにされたのは、まことに皮肉である。彼は、日米安保は必要であり、自衛隊は侵略に備へて、もっと戦力を増強すべきだと、極めて、自然に言つてのけた。数年前の「日本軍国主義は日中共同の敵」といふ言辞は、弊履のやうに捨て去られた。教条的な革新派の受けた衝撃ととまどひは大きかった。これが現実の政治なのだといふことが、彼らにはまだ充分に納得がゆかぬらしい。現在の自衛隊法は法的に不備であり、有事に備へての法的整備が必要であるといふ発言によつて、栗栖統幕議長は更迭された。

日本の思想も政治も、まことに不思議で不可解といふしかない。「有事立法」と「元号法制化」の問題は、子孫に対する責任において、明確な結着がつけられるべきであり、その努力を惜んではなるまい。

時代の危機は内攻し、深化してゐるといふべきであらう。青少年はきびしく鍛へられることのはかりに、「競争は悪だ」といふ固定観念によつて教育されてゐる。人間進歩の健康な原動力である競争原理を、教育全体の中にいかに位置づけるか。そのことがなされない限り、国家の活力は次第に衰弱してゆく外はないであらう。学問といふものが、ひたすら自己の栄達の手段にすぎないといふ現状から、いかに脱却してゆくか。そのことが真剣に考へられ行はれない限り、目標喪失に起因する停迷から若者たちは永久に立ち上れないのではなからうか。

合宿教室も二十三回を重ねた。連続御出講の木内先生、五回目の御出講の小林先生、いづれも詳細に手を加へられた上、校正の筆までおとりいただいた玉稿を掲載することができた。心から深い感謝の念を捧げ、御礼申し上げる次第である。

昭和五十四年三月

目次

はしがき	1
一、祖国・学問・人生	
精神の自立と再生のために——自虐史観からの脱却	
福岡教育大学教授	山田輝彦
5	
輪読導入講義「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」	
亜細亜大学教授	夜久正雄
25	
境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し——獄中における吉田松陰——	
東急建設技師	奥富修一
47	
短歌創作のために	
高千穂商科大学教授	高木尚一
69	
天皇のお歌と日本の国から——八月十五日を中心に	
福岡県立修猷館高校教諭	小柳陽太郎
91	
「しきしまのみち」といふ学問の任務	
国民文化研究会理事長	小田村寅二郎
119	
一、講義・講話	
明治の学生	熊本大学名誉教授
松本唯一	143
現代の経済学と当来 <small>（こころ）</small> の経済学	世界経済調査会理事長
木内信胤	155

感想——本居宣長をめぐって——……………文芸評論家 小林秀雄……………187

一、青年研究発表

友情の世界……………三井三池製作所勤務 坂本精児……………215

心のつながりを求めて……………鹿兒島県小瀬田中学校講師 大久保民子……………225

御製から学んだ事……………(株)住友電気工業勤務 布瀬雅義……………235

一、慰霊祭の前に

慰霊祭の体験……………九州大学法学部三年 加藤多夏詩……………247

国民に注がれる皇室のみどころ……………海上自衛隊勤務 鎧信弘……………255

「いのちささげて」発刊にあたって……………(横浜市)舞岡八幡宮宮司 関正臣……………265

第二十三回「合宿教室」のあらまし

大阪大学文学部四年 絹田洋一……………275
九州大学医学部三年 長澤一成……………275

(附)合宿詠草……………317

あとがき……………336

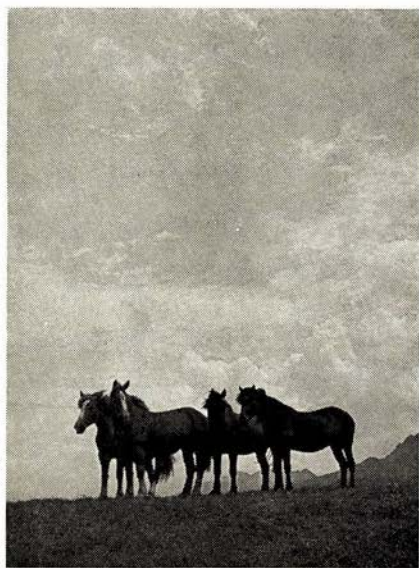
△国民文化研究会図書目録▽

■ 祖国・学問・人生

精神の自立と再生のために

— 自虐史観からの脱却 —

福岡教育大学教授 山田輝彦



高原の牧馬 1

戦後の価値体系

現代思想の形成過程

人間と歴史の復権

たゞ今から「精神の自立と再生のために」、副題として「自虐史観からの脱却」といふ題でお話をいたします。自虐史観といふのは聞きなれぬ言葉でせうが、例へば唯物史観、皇国史観、合理主義史観といふやうな呼称に対して、余りにも過度の罪悪感で自国の歴史を切りぎざむ戦後の風潮に対して、ある歴史家が命名したものを借用したものです。また、主題を「精神の自立と再生のために」といたしましたのは、現代は心が死にやすい時代であるといふ認識の上に立ってをります。三島由紀夫さんが自刃される直前に書かれた『革命の哲学としての陽明学』の中で、大塩平八郎の「身の死するを恨まず、心の死するを恨む」といふ言葉を引かれて、現代人は肉体の死については戦戦兢兢としてゐるけれども、精神の死については無痛覚になつてゐるのではないか。しかし、ひたすら肉体の死を怖れて精神の死を自覚しない人たちが日本が充満した時、国家はその革新の活力を失ひ、国際競争の中で自滅して行くのではないかと言つてをられました。私も果して精神的に死んではゐないのだらうか。自分の心が常に生きて働いてゐると断言できる人は少ないのではないかと感じます。先般の青少年の意識調査を揶揄して、「朝日」のコラム欄に「師なく、友なく、夢なき世代。ドッチらけの世代」と書いてありましたが、現代はまさにさういふ精神の風化の時代と思ひます。つい一月ほど前、厚生省から簡易生命表といふのが発表されましたが、それによりますと男の平均寿命が七二・六九才、女の平均寿命が七七・九五才で、世界一の長寿国になりました。しかし、さきほど申し

たやうに、若い人に老人の経験を継承しようとする決意もなく、いはば精神的な棄老がいたる所で行はれてゐる状態の中での世界一の長寿国といふのは、めでたいことなのか、悲惨なことなのか考へさせられた問題でした。

戦後の価値体系

本論に入つて行きたいと思ひますが、本日の話を大体三つの段階に区切つて話したいと思ひます。まづ、戦後の価値体系、簡単に戦後思想と言つてもいいのですが、その問題点はどういふところにあるのだらうかといふことです。次に戦後思想をもふくめて、近代人の物の考へ方は、明治以後どういふ経過を辿つて現代に至つたかといふことです。最後にその現代人の思想が一つの隘路にさしかかつてゐる。美しい言葉としては、人間性を尊重するとか、個人の尊厳とかいふことが言はれながら、實質的には人間が空洞化されて來てゐる。さういふ中で、人間と歴史の復権を求める方向はないのかといふことです。

まづ最初の、戦後の価値体系の問題ですが、戦後の公的な価値は言ふまでもなく日本国憲法の成立によつて決つたと思ひます。ところが、それは残念ながら日本民族の伝統に則つた自主的な決定ではなかつた。アメリカ帝国主義といふやうなことを言ふ進歩陣營の人々が、それこ



そ「アメリカ帝国主義」の最大の成果の一つである日本国憲法の制定過程については触れない。それに触れることは、自分たちの理論体系の崩壊につながるから触れないのです。残念ながら日本国憲法は、銃剣を突きつけられて軍事占領といふ苛酷な状況の中で、他律的、強圧的に作られたものである。これは感情抜き的事实ですから、事実を事実として認識することから始めなければなりません。最近外務省が重要な外交文書を逐次発表してありますが、その中で終戦連絡事務局次長であった白州次郎氏の手記があります。敗戦直後の昭和二十一年二月十三日の項に日本政府案についての総司令部の見解を示す次のやうな字句があります。（）筆者注。

（日本政府案（松本国務相案）ハ全然「アクセプタブル」（容認できる）ノモノデナイ

司令部ニテ案（マッカーサー草案）ヲ作成シタリ 本案ハ連合諸国ニモ司令部ニモ「アクセプトブル」ノモノナリ

これは憲法草案がマッカーサーによって作成されたことを示してゐます。それから三日後の二月十六日付で、当時憲法問題で最も連合国側の実権を握つてゐたワイトニー民政局長が、白州次郎氏の書簡に対する返書を書いてゐます。十ヶ条くらゐ列挙してありますが、その六、と九は極めて重要です。

△六、改革案ノ字句ノ修正ハ認ムルモソノ原則、根本様式ニ対シテハ絶対ニ讓歩ノ余地ナシ
九、日本政府ガ実行シナイノナラ司令部デ独自ノ行動ニ出ル

かういふ脅迫めいた空気の中で、憲法草案についての日本側の最終閣議の議決が行はれたのが三月五日、国の基本を定める大法は二十日足らずできめられてしまつたのです。白州さんの手記の最後は△スノ如クシテコノ敗戦最露出ノ憲法案ハ生ル「今に見ている」ト云フ氣持押へ切レズ ヒソカニ涙ス」と書かれてゐます。一介の自由主義者であり、むしろ戦争に批判的であつたとさへ思はれる白州次郎さんさへ、ひそかに暗涙にむせぶやうなものが日本国憲法であつたといふ事實をはっきり認識していただきたいと思ふのです。戦後思想の一つの原理は、まさにアメリカの押しつけた新憲法であつたと思ひます。アメリカは同時に日本に教育使節団といふのを送り込んで、二十一年四月七日に出たその報告書の中で、教育改革の指針を示しまし

た。それらを踏まへて教育基本法に共通してゐるものは、民主、自由、正義、真理、国際協調といった美しい言葉の羅列である。かういふ最大限の美辞麗句の底にある意図、論理よりもむしろ心理なのですが、それは日本といふ国を、個々の個人に分断することであつた。国家といふものは一つの有機的生命体であり、その力の凄じさを一番強く肌身で感じたのはアメリカでした。日本を半永続的に支配するためには、それは力学的な必然でもあつたのです。極端に言ふならば、憲法や基本法の美辞麗句の陰に隠れてゐるものは、戦時中に抑圧されてゐた日本人のエゴイズムを、ほとんど無制限に解放するといふ意図でした。どこの国でも、国家といふ一つの秩序を維持する最低限の義務、国への忠誠の義務とか、国を防衛する義務とかいふものは全く書かれてをりません。非常に抽象的な美しい作文の中に、「私」が最終の価値であるといふ卑しい思想がかくされてゐます。戦後の知識人たちがエゴイズムを正当化するために、これらをフルに活用したことは周知の通りです。

戦後、この個人主義とだき合はせに出て来たのがマルクス主義です。なぜあれだけ強い力でマルクス主義が風靡したか、その余燼は現在もくすぶつてゐるし、内向して爆発を待つてゐるといつてもよいのですが、その原因は治安維持法に対する復讐の心理ではないかと指摘したのは清水幾太郎氏です。「戦後を疑う」——中央公論昭五三・五（御承知のやうに、治安維持法は大正十四年四月二十二日に発効し、終戦後の昭和二十年十月十五日に廃止された）国体ヲ変

革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スル」行為に對して、死刑をふくむ罰則を制定した法律です。思想を法律で規制するといふのは限度がありますし、その犠牲者の立場に立てば稀代の悪法といふことにもなりません。しかし、物事を考へるときには、相対化して見る必要があります。治安維持法成立の六年前、大正八年にコミンテルンといふ組織ができました。これはソビエトの国家権力を背景に、尨大な資金と政治工作員を他国に送り込んで、その国々を共產化するといふ、国際共產主義の運動です。さういふ体制破壊の運動に對して、国家が自衛の措置を構ずるのは当然だらうと思ひます。ともあれ、戦後この法規のかせがはづされた時、進歩的知識人と称せられた人々は、一斉に天皇制打倒と社会主義革命実現をその行動の原理としました。戦後思想の根底にある心理は、先ほど申しましたエゴイズムの容認と共產主義に對するシンパシーと概括できようかと思ひます。さういふ戦後の何とない治安維持法への怨念が、最も典型的に現はれてゐる文章が日教組の「教師の倫理綱領」なのです。

その冒頭は「これまでの日本の教師は、半封建的な超国家主義体制のもとで、屈従の倫理を強いられて来た」といふ言葉で始ります。これは、戦前と戦後といふやうに、歴史を切斷してしまふのです。明治以後、多くの無名の教師たちが、日本の近代化のために、身命を捧げて来た。さういふ人たちを一括して「屈従の倫理」と決めつける。誠に僭越の沙汰ではないかと思ひます。続いて「日本の社会体制」を「まったく違った観点」から再建しなければならぬとい

ふのです。この観点が共産主義を意味することは明白です。更に「倫理はたんに普遍的な永遠的なものではなく、具体的な、特定の時代と民族にあたえられた歴史的課題をかちとるためたゞかいを通じてつかみとらねばならぬ」といふとき、彼らの言ふ倫理は、階級闘争の中でつかみとる「革命の倫理」でなければならぬと言ふわけです。戦後、歴史はかういふイデオロギーによって選別され、若い人々はかういふイデオロギーによって教育されて来ました。圧倒的な占領軍権力に便乗した進歩的な人々の果たした役割は、今こそ冷静に裁かれなければならぬと思はれます。

現代思想の形成過程

キリシタンが弾圧されて改宗することを「転ぶ」と申しますが、長い伝統と文化に培はれた日本人が、どうしてたった一度の敗戦で、かうもあへなく転んでしまったのか。当然かういふ疑問が起つて来るだらうと思はれます。それはやはり、エゴを無制限に肯定する思想とか、マルキシズムに対する何とないシンパシーとかいふものが、戦前から潜在的にあったからだと思ひます。私は、近代の思想史を理解する枠組みとして、百二十年近い近代史を三つに区分して考へると便利だと思ひます。私の試案ですが、第一期は明治四十年ごろまで。これは新国家創

造の時代とでも言ふべきでせうか。第二期は、明治四十年ごろから、大正期をはさんで終戦までの四十年間です。これはいはば大日本帝国の時代で、日本の版図が最も拡大され、国際的に大きな発言力を持った時代です。しかし、思想的には右から左に、あるひは左から右に、大きく揺れ動いた時代です。現代思想の雛型、現代人の思想の枠組みの出来るのは、大体明治末から大正初にかけてであらうと思ひます。第三期は戦後といふことになります。戦後三十三年と言ひますと、三分の一世紀といふことになると思ひます。

そこで、日露戦争をはさんだ前後で、如何に大きな思想的変動が行はれたかの例を、国木田独歩と石川啄木について比較して見たいと思ひます。独歩は明治二十七年、日清戦争に従軍して『愛弟通信』といふのを書いてゐます。日清戦争は侵略戦争であつたといふやうな言説は相変わらずありますが、これを読んでみると日清戦争はまさに義戦であつたことがよく分ります。多感な青年が、戦争の悲惨さと同時に、日本の軍隊のすばらしさを、讚嘆の念を持って弟に伝へてゐます。そして、ジャーナリズムの寵児となつて帰つて来て結婚をしますが、間もなく悲劇的な別離となります。その悲しみの中で、日本で最初のユニークな自然描写といはれる『武蔵野』が書かれます。『忘れ得ぬ人々』は独歩が二十七歳の時、明治三十一年に書かれた、彼の人生観や人間観の原型を示す名作です。その筋は、ある若い文学者と画家が田舎の旅籠屋に偶然泊り合はせて、人生を語り合ふといふ形式です。若い文学者は、世の中には忘れて叶ふま

じき人、つまり忘れてはならない人は沢山ある。さういふ人は別として、何の義理も因縁もない人で、しかも忘れ得ない人がゐると言つて、瀬戸内海を船で通つた時、ある小島のほとりの浜で、すなだりをしてゐた漁師、阿蘇登山の帰途、月明の中を悲しい馬子歌を歌つて消えて行つた青年、四国の三津ヶ浜の雑沓の中で歌つてゐた琵琶法師の三人の点描をして次のやうにしめくくつてゐます。「我れと他と何の相違があるか、皆な是れ此生を天の一方、地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰るものではないか」と。これは、人生はめぐり合ひであり、人間はみな死すべき宿命を担つて、はかないこの世を生きてゐるといふ痛感です。この痛感こそ、われわれのいふ国民同胞感の基底だと思ふのです。

日本の近代文学で大きな仕事をした啄木は、明治四十三年八月、彼が二十五歳の時、『時代閉塞の現状』といふ著名な評論を書きました。この二ヶ月前に起つた、幸徳秋水らの大逆事件に触発されて書いたものです。これは日本の文学者で、われわれの選択として、社会主義が思想的に正しいのだと主張した最初の文献といふべきでせう。彼はまづ、われわれ日本の青年は、未だかつて「強権」―国家権力―と対決したことがないと述べ、次のやうに続けます。「我々は一斉に起つて先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察―我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである」。この「組織的考察」が社会主義を意味してゐることは明白です。

この時期を境として、彼は自分が社会主義者であることを宣言し、社会を呪詛するやうな沢山の歌を残して夭折してしまひます。

この社会主義の考へ方と、人間は所詮は本能に従属するといふ欲望自然主義と、家族や国家より人類が優先するといふ白樺的な人類主義、この三つが現代思想の原型（ウル・タイプ）だと思ひます。われわれはかういふ思想にいかん執拗に捕へられてゐるか、自ら省みれば明白だと思ひます。そして、この三つの型の思想のもう一つ根底にあるものは「自我主義」とでも言うべきものでせう。つまり、自我こそ一切の価値基準であるといふ考へ方です。さういふ時代の風潮を最も敏感に感じてゐたのが漱石です。彼は『文芸と道德』（明治四四・八）の中で次のやうに言つてゐます。

△従つて吾々の道德も自然、個人を本位として組み立てられるやうになつてゐる。即ち自我からして道德律を割り出さうと試みるやうになつてゐる。▽

道德律の基本は自我である。自我がすべての価値の基準であるといふ指摘です。これが先ほど申した自然主義にも社会主義にも人類主義にも作用してゐる共通項であるといふ認識です。漱石がこの自我の拘束と死力を尽して戦つたのは周知の通りです。

ともあれ、明治末から大正初期にかけて、現代思想の原型的なものが成立したことは分つて頂けたと思ひますが、戦争中はまた極端な反動が来るのです。私は一人の青年として戦争をく

ぐり抜けましたし、明治大正的な思想も、オヤジなどの言動を通じてその片鱗に触れることが出来ましたので、かなり客観的に見る事ができます。その経験から申しますと、戦争中の戦争指導理論——黙々と戦った庶民は別として——は、先ほどの三つのタイプの思想の極端な裏返しのやうに考へられます。まづ極端な道徳主義、それも形式道徳をふりまはす硬化した姿勢ばかりが目立ちましたが、それは、人間は醜い動物に過ぎないといふ思想の裏返しではなかったか。また極端に排外的な国家主義とか民族主義とかいふものは、白樺的な人類主義や啄木が心酔した社会主義の反動ではなかったかと思はれます。だから、滅私奉公とか、一億玉砕とかいふ最大級の言葉が増幅されたポリウムで絶叫されたけれども、本当にしみじみと天皇の心を偲ぶといふやうな、日本民族の深層の意識の外側で、指導理論といふやうなものだけが空転したのではないかと考へざるを得ない。日本は思想的にも破れるべくして破れたといふ気がしてならないのです。さういふ謙虚な反省と、自国の歴史を祖先の罪悪史のやうに取り扱ふ偏執狂的な態度とは全く別物です。われわれは何よりも、戦前戦後を分断する史観に抗して、連続した有機的生命体としての歴史を回復する努力を迫られてゐるのです。

人間と歴史の復権

現在、人間性といふ言葉は到るところに氾濫してゐるのに、その内実が今日ほど曖昧に、稀薄になつた時代はないのではないか。美しい言葉ばかりが空転して、人間性そのものは、空洞化の傾向を深めてゐるのではないか。さういふ末期症状に歯止めをかけるためにも、素直に古人の業績を偲ぶといふことが、今日ほど要請されてゐる時代はないと思ひます。さういふ精神の矮小化をもたらした原因の一つは、歴史の図式化、特に唯物史観の跳梁であり、その二つは、暴露主義とか、のぞき見とかいはれる姿勢だらうと思ひます。

まづ歴史の図式化の弊害について、私はいつも小林秀雄先生の『歴史と文学』に教へられます。昭和十六年の四月に書かれたこの文章の中で、先生は「本来史観といふものは、実物の歴史に推参するための手段であり道具である筈のものだが、この手段や道具が精緻になり万能になると、手段や道具が、当の歴史のやうな顔をし出す。」と重要な指摘をしてをられます。先生は「暖い眼」で古人の経験を追体験する必要を述べてをられるのだと思ひます。私は歴史といふものは本質的に人物史であると思ひます。有限な生命を歴史的限界の中で精一杯生きた人に対する愛情と敬意がなければ、所詮歴史を勉強する面白味はないわけです。自分の図式を作つて、生きてゐる現代人が、その図式に都合のいいものだけを選別して論理の筋を通すといふことは誰にもたやすく出来るでせう。しかし、自分の史観に都合の悪いことでも、事實は事實として尊重するといふ態度がなければ、それこそ「歴史に推参する」ことなどできないでせ

う。その場合も「暖い眼」——古人に対する共感が前提になることはもちろんです。さういふ努力がなければ、崩壊に瀕してゐる人間の復権といふやうなこともあり得ない。歴史を生きた人たちの自己犠牲の行為、それは事実でせう。さういふ事実に触れて感動する経験といふものがなければ、人間に対する本当の確信は生れて来ないと思ふのです。

現代人の通弊と思はれるもう一つのもは、三島由紀夫さんが自刃の一年ほど前に書かれた『日本文学小史』の第一章の冒頭の次のやうな指摘です。

△奥底にあるものをつかみ出す。

さういふ思考方法に、われわれ二十世紀の人間は馴れすぎてゐる。その奥底にあるものは、唯物弁証法の教へるものでもよい、精神分析学や民俗学の示唆するものでもよい、何か形のあるものの、形の表面を剥ぎ取ってみなければ納まらぬ。▽

これは、分析癖、懷疑主義、暴露主義、のぞき見といふやうに言ひかへることもできませんが、要するに現代のインテリに特有の、すべてのものに対する根深い不信感の指摘であり、さういふ態度を捨てて、あるがままの形を信じなければ、物の真実に迫り得ないといふのが、三島さんの晩年の思想であつたやうです。私は小林先生の『本居宣長』の終りの方を読んで、奇しくもこの三島さんの考へ方と通ふもの、あるがままのものを、あるがままに信ずる美しさといふものに深く打たれました。古人が信じたやうに信ずるといふことがなくて、何で古

事記など読む必要があるのかといふのが、小林先生の一貫した確信であると思はれます。

△宣長からすれば、秋成の眼は「理学」の眼とは言へやうが、「古学の眼」とは言へないものだ。「上ツ代の伝説」^{ツタヘゴト}が語る神々の物語を、ありのままに素直に受取るなら、明らかに、それは「神たちの御しわざ」であり、読む人が眼のあたりにするその姿は、「神のみこゝろ」の現れに他なるまい。それで何が不足であらうか。歴史は、「神たちの御しわざ」について、どんなに古い頃からか、誰が言ひ出したこともない伝へ言で始つた、と「記紀」は言ふ。わが国の正史をものした人々にも、これを読んだ人々にも、歴史はさういふ風に見えてゐた。この基本的な事実を疑つてかゝる理由など全くない、と宣長ははつきり考へてゐた。歴史を考古学から始めることの間違を、かつて小林先生ははつきり指摘されましたが、日本の古い歴史が神話から始まつてゐるのはごく自然のことであり、まことに正しいことだと断言してをられるのです。また「神話」といふ言葉ではなく「伝説」^{ツタヘゴト}といふ言葉が使つてゐるのは、古人が肉声によつて語りつたへたもの、それをそのまま文字に写したものが古事記だといふ前提があるからです。もし諸君の中に、古代人は幼稚な思想しか持たなかつたから、神話の中には幼児的発想しかないと考へてをられるなら、それはまことに僭越の沙汰です。人生の基本的な経験において、古事記を創つた時代の人々が諸君より幼稚で素朴だったなどと考へてゐたら、それは祖先に対する侮辱といふべきでせう。古伝説を創り、育て、信じて来た古人の心

を熟知しなければ、わが国の歴史を解くことはできないと宣長は信じてゐた。そこから宣長の仕事が始まったのだと先生は仰言るのです。

『本居宣長』の最終章は生死の問題が論じられてゐます。火の神を生んで死んだ伊邪那美命と、夫の伊邪那岐命が、地獄と現世の境の黄泉比良坂で、千引石を中に置いて問答する場面が古事記の上巻にあります。その部分に忘れがたい言及がありますので引用します。

△死者は去るのではない。還つて来ないのだ。と言ふのは、死者は生者に烈しい悲しみを遺さなければ、この世を去る事が出来ない。それは、死といふ言葉と一緒に生れて来たと言つてもよいほど、この上なく尋常な死の意味である。▽

死者は還らないといふことを、古代人は身にしみる経験として知つてゐた。それが「神話」の形として記録されたといふことでせう。古事記を創つた時代の人々は、生を超えた次元、死といふ視座を定めなければ、生の意味も分らないことを、鋭い直覚によつてはつきり認識してゐたといふことになりませう。

動物にとつて、死とは生命体の終りに過ぎないのですが、人間にとつて、死とはその全生涯を意味づけるものである。さういふ死の中で最も高貴なものは自己犠牲の死である。自己の生命が最終の価値だといふところからは、文化の進歩といふものはあり得なかつたと思ひます。かけがへのない個体の生命を、それを超える価値のために献げることによつて、人間の文化が

創られて来たといふ事実に眼を開くべきでせう。私どもが生死の問題を考へる時、過ぐる大東亜戦争で死んで行つた友人たちのことを忘れることができません。私どもが今度『いのちさゝげて』といふ遺稿集を編んだのも、その追慕の念からに外ならないのです。こゝにあげる和多山儀平君は、満二十歳で戦死した方です。諸君は先入観やイデオロギーのやうなものを除いて、どうか無私の気持で遺書を読んでみて下さい。

△ 遺書

帝国興亡之秋しつきに当り陛下の御召に依り、海軍予備学生として土浦海軍航空隊参著を命ぜらる。欣喜極りなし。生きて神洲の防人となり、死して護国の鬼とならん。身は南海の空に桜花と散るとも魂は永遠に国土に留め祖国を護らん。

天皇陛下萬歳

大日本帝国萬歳

現下国家情勢逆睹ぎやくとを許さざるものあるも、神洲不滅は吾等の確信。帝国の興隆は国体の威厳と国民の忠誠とに存す。今、日本学生の先陣を承り出陣するに当り、想ふ事、神洲の興隆のみ。誓つて四夷よを撻伐たつぱつせん。祖宗の遺訓を身にしめ決して人に後れざる様奮闘せん。

畏みこきや命みことかゞふり夷よらを打攘なふべきときはきにけり

君のためののち死すともしきしまのやまとしまねをとほに護らん

みくにいまたゞならぬときつはものと召され出でゆく何ぞうれしき

吾死なば後につゞきてとこしへに御国護れよ四方の人々

昭和十八年九月八日 出発

伯父上様

「天皇陛下萬歳」とは、小さな個体の生命が、国家といふ大きな生命に帰一してゆくときの絶叫ですし、「神州不滅」とは、神州をして不滅たらしめたいといふ念願であり、確信です。よく軍閥にだまされたといふやうな批判がありますが、私も戦中派の名誉にかけて申します。が、われわれは軍閥にだまされるほど愚劣ではなかったと信じてゐます。遺書は、再び還らざる者から、生き残ったわれわれへの負托の言葉です。戦死者の志を継承することは、八月十五日を以て歴史を切斷する思想に抗して、そこに歴史の連続性を確認することにつながります。かうして、自立した精神が青年の胸に奪回されてこそ、国の独立と平和は初めて全うされるのです。松陰先生は、国家の重大問題を日常茶飯事のやうに冗談めかして談ずることの軽薄さを、深く戒めてをられますが、どうか渾身の力を傾けて、祖国の当面する課題にとり組んでほしいと思ひます。

輪読導入講義

『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』

亜細亜大学教授・教養部長
夜久正雄



根子岳暮色

聖徳太子と黒上正一郎先生

輪読の意義

東西文明の融合

大乘仏教と日本文化

神々の世界

聖徳太子と黒上正一郎先生

本日のテキストになってをります『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ書物や、その著者である黒上正一郎といふ方については、皆さまあまり御存知ないと思ひますので、輪読にはいります前に、簡単にご説明申し上げておきませう。

昭和のはじめ、東京大学に山上御殿といふ教員の会合室がございまして、ここでは第一級の学者が講義をするのがならはしでした。本書の著者黒上正一郎先生は、その学歴は徳島商業ご出身といふことだけで、それ以上の学歴を持ってをられない方でしたが、昭和四年、三十歳の若さでこの山上御殿で聖徳太子がお著はしになった『三経義疏』の講義をなさったのです。

講義の内容に就きましては、その当時日本の国語・国文学界で最高の権威を持っていた（東京大学の）『国語と国文学』といふ雑誌に、その論文が掲載されました。従って聖徳太子の研究といふ点では、世俗的な意味でも黒上先生は、第一級の学者であったわけでございます。

しかし黒上先生の『三経義疏』、聖徳太子のお言葉に対する研究は、現在の国文学や国史学の主流をなしてゐる歴史的事実の真偽に就いての調査研究だとか、『三経義疏』の成立ちを調

べる文献学的な研究ではありません。聖徳太子のお述べになった言葉をそのまま、自分の経験の中で味ってみる、そしてその教へにしたがってこの世を生きてゆかうとする、さういふ研究でございます。

私どもは若い時分から黒上先生のご本を読んでまゐりまして、そこに聖徳太子のご精神を仰ぐといふ研究を続けて来てをります。聖徳太子に就いて黒上正一郎先生のご本を読むといふ事の意味の一端はさういふことなのです。

ところで黒上先生は三十歳そこそこでお亡くなりになったので、いはゆる世間の広く深い体験が欠けてゐるのではなからうかといふお考へもおありかも知れません。けれども精神生活に就いての問題はさういふ風にはいかない。精神を集中するところに本当の精神の働きは現はれるのであって、だからだと長い生涯を送ったからといって人生といふものがわかるものではない



(夜久正雄先生・班別討論の折に)

いのです。

昔の人は「酔生夢死」と言ひましたが、何十年生きてゐても精神は一向に本物を掴んでゐない、精神の本当の働きを現はす事が出来ない、といふ事もあるわけです。私どもも六十歳を過ぎてゐてもお若い時代の黒上先生のご本を読んで、そこに人生の指標を見出しますが、それは黒上先生の年齢とは関係がない、たゞそこには集中し緊張した、しかも豊かな精神によって捉へられた聖徳太子のお姿があるのです。

輪読の意義

最近小田村先生の御著書『昭和史に刻むわれらが道統』が刊行されましたが、その中に旧制第一高等学校の昭信会の輪読の様子が書かれてをります。この昭信会は、昭和四年頃黒上先生が始められて以来ずっと戦争の終る頃まで継続したもので、現在発展しつつある国民文化研究会の源流をなすものです。

私どもが一高に入学した時はすでに黒上先生はお亡くなりになってゐましたので、黒上先生の遺されたご本が先生の思想を辿る唯一の文献で、これを一所懸命読んだわけです。

この文献は、黒上先生に直接学ばれた新井兼吉といふ先輩が主になって最初に編集なされた

ものでございます。内容は先程お話しましたやうに『国語と国文学』に発表されたものです。騰写刷りの二百数十頁のものだったと思ひます。その後何度も版を改め今日われわれが見ることが出来る立派なものになつてゐるわけです。われわれとしては、この騰写刷りのご本を輪読する事が黒上先生の教へを受けるといふ事だったので。

これを読む際、間違つて読むと必ず氣のついた者が正したと小田村先生は書いてをられますが、これは忘れてならない事です。人が読み違つたらすぐ指摘してあげる。指摘してこちらが間違つてゐる場合があるかも知れませんが、正しいと思つたことはやはり言つてやらなければならぬ。さうでないと、腹の中では間違つてゐるなど思ひながら、それを指摘しないのがお互ひのつきあひだと決めてしまふことになりかねません。つきあひといふのはさういふものではない。お互ひに過ちを諫め交すところから本当の友情の世界は開かれてゆくのだと思ふのです。

輪読に就いてもう少し私の最近の体験からお話しておきます。最近といひましても、もう十年近くになりますが、小田村先生他数名とともに『勝鬘経義疏』の輪読を続けてをります。月に一度集まりまして朝から夜にかけてやつてをります。わからないところはお互ひにことん話し合ひますから、だんだん読みが深くなつてゆくんです。当然わかつてゐるやうな箇所でも本当に納得ゆくまで問題を出し合つたり聞き合つたりします。私は、輪読の一番いいところはさ

ういふことぢやないかと思ひます。

輪読に就いてあまり解説的なことは差し控へますが、小柳先生が以前の合宿記録にお書きになつてをられる様に、輪読といふのは皆んな輪になつて、そして本を読むのです。輪になつて、そこに書かれてゐることをありのままに受け取らうと皆んな一所懸命読むわけなのです。そして、自分のわからないところ、あるひはこの言葉を自分がかう感ずるといふことを述べて、他の人の意見を聴いてゆく。だから輪読の場といふのは、自分の解釈、感想を述べるところであつて、自分がそれまで持つてゐた考へを披瀝するところではない。あくまでも対象とする文章の意味を見つめ、眺め、その言葉の響きを聴きとる。書かれた人の肉声が聞こえてくるやうな読み方をするものなのです。ことに難しい文献ですとひとりではなかなか読めませんし、わからないところがいくらでも出て来て了ふ。だからこそお互ひの力を傾け合ふ努力が要るのです。そして、さういふ努力の結果、あゝさうか、さういふ意味なのか、とわかつた時に著者の心持がありありと感じられてくる。

かういふことも、お互ひに忌憚なく努めなければなかなか出来ないことなのです。

聖徳太子がお書きになつた憲法十七条の第一条に、

「上和らぎ、下睦びて、事を論あげつらふに諧かなひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

といふ非常に強いお言葉があります。この「上和ぎ、下睦びて、事を論ふに諧ふ」といふ経験は、輪読によってよく味はれることなのです。みんなで文章を正しく理解しようとする努力があれば、その理解は本当のものが出てくるのです。だれかひとりの解釈が正しいといふのではない。みんなで力をあはせて正しい本当の解釈に到達するのでなければ輪読の価値はないわけです。もちろん一人ひとり一所懸命やるのですよ。その結果みんなで解ってゆく。さういふ経験が「事を論ふに諧ふ」といふ経験だと思ふのです。

もう一つお話ををきます。『三経義疏』は維摩経・法華経・勝鬘経といふ三つの大乘仏教の聖典を聖徳太子自ら講義なさったものですが、一体どんな風に講義なさったんだらう、どういふ言葉で講義なさったのか、といふ事を『三経義疏』を読み続け乍ら考へることがございます。なかなか難しいのですが、多分、かうだらうと思ひます。この合宿の様にみんなが集まってる、もっと小さい輪読の場でもいい。みんなが經典を手に持って、そしてそれに就いて聖徳太子が先づ概略をお話になる。それから、第一章は序説で、かくかくのことであるといふ説明をなさる。『勝鬘経』の場合であれば、序説に入る前に「勝鬘師子吼一乘方便方廣経」といふ勝鬘経の正式の名前がありますから、その名前をみんなにお示しになる。そして、「勝鬘」「師子吼」「一乘」「方便方廣」といふ言葉の意味をそれぞれご説明されるわけです。

さうするうちに、いろいろと質問が出て来る。あるひは太子と異った解釈が出される場合も

ありませう。それを丹念に、この解釈はここはいいがこれがおかしいといふ風に辿ってゆかれる。さういふ場合に、「私の釈は云々」とか、「私の思ひは曰く」といふ様にお述べになって書きしるされたりするのです。ですから『三経義疏』の背景には、さういふ聖徳太子を中心とする研究会のやうなもの、つまり今日われわれが言ってる輪読風の研究会があったのだらう、と私は考へてをります。

なほここでひと言お話し上げておきますが、今上天皇さまは聖徳太子につきましては、深いご関心がありになるといふ事が黒板勝美博士のことばとして残ってをります。黒板さんは今上天皇さまにご講義をなさった国史学者です。ですから青年研究発表で、布瀬さんが聖徳太子のお言葉と今上天皇の終戦直後の御製との関連を論じられました、その事は、まさにさうあるべきものであったと思ひます。

また、『三経義疏』の中で、聖徳太子ご自身がお書きになったと今日信じられてをります『法華義疏』の原本は、明治の初年に法隆寺から皇室にお買ひ上げを願ったもので、爾来皇室に保管されて来てをります。現在も皇室のご所蔵になってゐるわけでございます。この原本は永らく明治天皇の居間に置かれてゐたといふ事が、大正時代になってあきらかになりまして、大正時代と昭和時代とに複製本が出されてゐます。明治天皇さまは『古事記』などはご愛読なさっていらっしやるのですけれども、『三経義疏』はお読みになっていらっしやったのかどうかは

わかりません。しかしお居間にあったといふのですから、なにかの折には『三経義疏』を通じて聖徳太子のことをお考へになられたであらうし、また手にお取りになってご覧になられたことだらう、といふ事は確かな事だと思はれます。

この事は、太子のご精神が、日本の皇室のご精神の裡うちにしっかりと伝へられてゐるといふことの具体的な証左でございます。

東西文明の融合

黒上先生のご本の中で、太子のご思想がよく読みとれる箇所は、大陸諸師と聖徳太子の解釈が比較されて説かれてゐるところです。比較してみると、殊に太子のご精神が明らかになる。比較なぞしなくてもわかる人はいい。太子のお言葉を解釈して、それを自分の心に照らしてみても、「あゝ、さうだな」と味読出来るならそれでいゝのですが、比べてみるとわかりやすいのです。もちろん比較してどちらがいゝとか悪いとか言ふんぢやないですよ。性質が大分違ふといふ事を感じるので。さういふ意味で聖徳太子のご精神がよくわかる箇所が『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』にはあるんです。

かういふ研究は、比較文学、比較思想とか比較文化と言はれる学問として最近盛んに行はれ

てゐる。それを黒上先生はすでに昭和四年頃おやりになった。『国訳大藏経』といふ膨大なお経の解釈書の中にある「勝鬘経の解釈書」をご覧になって太子のご表現と比べてをられるわけです。それは大変な作業でして、あの研究で命を縮められたのではないかとも思はれます。

と言つても、さういふ箇所はこの場であつかふのにちよつと難しいものですから、また分析的にやるより全体として文章を味ひ感受する、さういふ働きを大事にしたいと考へますので、けふは太子のご思想の掘つて出て来た背景になるところをやらうと思ひます。

『東洋文化の伝統及び理想を正しく現実に把持するものは我が日本である。大乘仏教及び儒教の如き東亜大陸の代表的文化は、すでにその本国に於いて衰頽せるに拘らず、共に我が国土に朝宗して国民生活の体験に融化せられ、その生命を持続開展せしめられて居る。日本文化とは実に東洋文化の総合としてのそれであつて、それは西洋文化と対照補足せらるべき世界文化の重大要素であり、この文化を把持する我が国民は更に東西文化融合の世界的使命を負ふものである。』（序説・一頁）

けふの御講義で木内信胤先生が、日本文化あるひは日本の経済そのものが不思議な発展をして来て、今後も新しく開展してゆく事が出来るのは、東西文明を日本文明に融合したのだとい

ふお話がありました。そのお話を思ひ合せてこの文章を読んで欲しいと思ふのです。

国家興亡の歴史を見ると、外国文明と交流しない国は滅びる。これは個人でも同じ事です。自分一人に閉ぢこもつてゐればその人は発展しない。人間の生命の原則なんです。何事にも関心を示さないのは自閉症なのであって、交流がなければ精神は発展しないものだ。聖徳太子は大陸文明を導入されたのは、かういふ生命の法則によるわけせう。

日本の歴史の上で、外国文明と接触して新たに日本の文明を発展させてゆくことになった時期が二つあります。一つは言ふ迄もなく聖徳太子の生きてをられた推古天皇の御代であり、もう一つは明治時代です。推古朝では、太子を中心にして大陸文明を排除するか摂取するかの重大な転機に立ったわけです。この事の重大さは幕末開国時の事を考へてもおわかりでせうし、また今日の日本の事態を見れば、察しがつくこととせう。これまでずいぶん日本人は苦勞を重ねて来てゐるのです。われわれの精神はたゞ伝統の生活に浸つて外国の文明に目をふさいでゐると、国を滅ぼすことにもなりかねないんですね。従つてそこでは一体われわれはどうするかといふ正確な判断が下されねばならないのです。

ともあれ漢字で翻訳された仏教經典と儒教の經典は早く日本に受容されたわけで、これを聖徳太子が日本文明の中に取り入れられて東西文化を融合なされたのです。

そこで、太子は「この文化を把持する我が国民は更に東西文化融合の世界的使命を負ふもの

である。」と仰言つてをられるわけです。つまり、東西文化を融合するといふ世界人類に対しての貢献、さういふ使命を我が国民は担つてゐるといふことなのです。では、どういふ風に融合なさったかに就いて百三十二頁をご覧下さい。

大乘仏教と日本文化

『東亜億兆の宗教心を代表する大乘仏教を国民生活の体験に統一して、世界的宗教理想に現実的内容を充たしめ給ひし太子の御精神は、我が日本の文化史的使命を表現あらせられたのである。われらはこの御精神の現はれ出づべき源を辿たどって再び古事記の歌謡と神話とに示されし神神祖先の情意に遡さかのぼり、御心と等しく通ふ国民精神の開展を万葉歌人の歌に見んとするのである。』（第二編・一三二頁）

太子は「東亜億兆の人々」と仰言つてゐるのです。日本以外に中国も韓国等もありますから、かう言はれたのでせう。この東亜億兆の人々の宗教心を代表するのが大乘仏教といふわけなんです。その大乘仏教を「国民生活の体験に統一して」国民生活の体験の中にとり入れて一つのものとなし、そして「世界的宗教理想」、仏教は世界宗教ですからその世界の人類すべて

に与へられた、さういふ理想に「現実的内容を」宗教理想そのものを生活の中で生かすといふ内容を「充たしめ給ひし」つまり充たされた、「太子の御精神は」東亜の文明、さらに西洋の文明を融合し世界人類に寄与することが出来る、さういふ「我が日本の文化史的使命」を表現なさったわけです。

大乘仏教とは、自己一身の救ひを求め小乗仏教と違って、みんなが救はれてゆく道なんです。心の本当の安らぎをみんなが味はふことができるやうな、さういふ道を求めるのが大乘仏教だと、太子は繰返し言つてをられる。

小乗仏教といふのは、自分が救はれたがために修養をする。修養して悟りが得られると極楽に行つてしまふわけです。これでは行き放しになる。自分の欲望をすべてなくして極楽へ行くのですから、もうこの世には帰つて来ない。だから菩薩にはなり得ない。極楽に行き放しなんです。大乘仏教はさうぢやない。いったん極楽に行つても必ずこの世に戻つて来なければならぬのです。要するにこの世の人すべてが救はれなければ自分も救はれない。結局この世に於いて、人々と共なる生を味はふ、そしてみんなと一緒に道を開かうとするのが大乘仏教だと思つていたゞければよいでせう。太子のお言葉からすると、さういふことになるのです。

自分が自分がいふのは間違つてゐるのだ。それでは人生は渡れないといふことを教へるのがこの大乘仏教であり、聖徳太子の『三経義疏』です。

かうした信念のもとに太子は、仏教、儒教を日本の国民生活に取り入れられ、日本人の心の中に味はれ、そこに日本文化をご創業なさってゆかれたのです。

この太子ご一代のご事業を黒上先生はこの箇所では概括なさってゐるのです。概括と言っても客観的に概括してゐるのではなく、太子のご事業に対する讃嘆の感情がこめられてゐますから、生きた文章になってをります。

それでは太子のご精神は、どのやうな源を辿って生まれて来たのだらうか。黒上先生は神々祖先の情意の中に太子のご精神が生まれてくる源があるとご説明になるのです。また太子の御心と通ひ合ふ国民精神の開展を万葉歌人の歌に見ようとなさるのです。

飛鳥を中心として、前には神話伝説の表現があり、後には万葉歌人の歌がある。そこに神話伝説から、太子のご事業、さらに万葉集の歌人たちの間につながる日本の国民精神の開展と歴史があると洞察されてゐるのであります。

そこで聖徳太子のご精神の源泉である神神祖先の情意の世界を黒上先生の記事によって味はってみようと思ふのです。

神々の世界

「我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隠遁超脱の聖者ではなく、動乱の生に随順せし情意の人格である。速須佐之男命は『よさしたまへる国を治らさずして』妣の国根之堅州国に罷らんとおもふが故に『青山を枯山なす泣き枯らし、海河は悉に泣き乾しき』といふ悲劇的運命を荷はせ給ふ荒神にましましたのであるが、又出雲の肥の河上に八俣遠呂智を退治して乙女を救はせ給ひ、現実の地上に降り立たして出雲八重垣の歌に家庭の歓喜と愛情をうたはせ給ふたのである。神武天皇の久米の御歌に『みつみつし久米の子らが』とうたはし、同胞愛とまた『うちてしやまむ』といふ征服の雄たけびは、又御兄君五瀬命が登美毘古が矢に当り給ひて『賤奴が手を負ひてやいのちすぎなむ』とをたけびて神あがりましぬる御最期と共に動乱の生のかなしき緊張を示すものである。倭建命の御生涯が英雄的人格の悲壯の運命をつたへることはいふまでもないが、『さねさしさがむの小野に』の御歌をのこして命に代りて海に入りまし、后弟橘比売命の御最期、又命が神あがりまして后たちみ子たちかもろもろ下り来たまひ、その地の那豆岐田にはらばひもとほりて哭泣し給ひつゝ、『なづきの 田の稻幹に 稻幹に 這ひもとほろふ ところづら』とうたはせたまひ、又命のみたまが白鳥となつて飛びいますのを追ひては小竹の苅杖に御足切り破れども痛きを忘れて哭く、追ひ出でましきといふ悲壯の物語は、また仲哀天皇が熊曾の国をうち給はんとして筑紫の訶志比宮にいまし神明の怒にふれて崩御したまはんとせし時『やゝその御琴をとりて、なまゝに弾きましけるに、いくだもあらずて、御

琴のねきこえずなりぬ。かれ火をあげて見まつれば、はや崩りましにき』といふ如き表現と共に生死問題の冥想の余裕もなき急迫緊張の生命を示すのである。古事記に現はるゝ我が民族の生は外なる戦と内なる睦びの錯綜する明暗の交代である。太子が『国家の事業を煩となす』と現生の悲哀に徹したまひ、而も之を同じく群生に察して大悲息むなしと告白したまひ、同胞憶念の永久苦闘に随順して、其の切実体験に大陸の学説教義を生命化したまひし総合的御精神は、この民族生活の劇的生命を辿ってはじめて理解し得るのである。概念理論に内容をあたへ、抽象教義を生命化せるものは常に現実人生の波瀾に生くる若き民族の情意であった。」（第二編・一三六頁）

「神々」とは伊耶那岐命、伊耶那美命とか須佐之男命、天照大神を指し、神武天皇、倭建命が「英雄」の代表的人格でせう。

私はこの「動乱の生に随順せし情意的人格」といふ言葉に若い時分非常な衝撃を受けました。古事記の神々は隠遁超脱の聖者ではない。どういふ運命が待ち受けてゐるかわからない。しかしわからない運命に出会った時、そのまま受け入れてその中で奮闘してゆく。「動乱の生」といふ言葉は、人生そのものの姿、はかることの出来ない姿といふものをわれわれの心に暗示する言葉です。しかもその「生に随順する」といふのです。人生の苦しみを回避しないで、喜

び、悲しみ、怒り、燃え、そして生きてゆくところの人格。神々の姿をさう黒上先生は仰言るのです。

一、速須佐之男命

須佐之男命は、伊耶那岐命から「お前は海原を治らせ」といふご命令をお受けになる。これは実に苦しい運命であった。須佐之男命は暴風神なのですが、海原を治らす事は大変な事であったのです。そこでご命令の海原をお治めにならず、亡き母君の国である「根之堅州国」に行かうとしてお泣きになる。その泣く様は山々を枯らしてしまひ、海河を泣き干す程の号泣であった。「悲劇的運命を荷はせ給ふ荒神にましましたのである」と黒上先生は言つてをられますが、まことに荒々しい神なのです。しかし、やがて出雲の国に降つて家庭の喜びを得られることになる。

八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を

恋の成就の喜びを本当に心の底からうたひあげたやうな歌です。この日本最古の歌は、須賀といふ地で作られたのですが、この須賀へお出でになつて、命は「吾此地に来て、我が御心清すが

「浄し」と仰言つてゐる。よろこびの歌とこの言葉は結びついてゐます。われわれが自分のくぐもる思ひをことばにうたひはらした時はなんと清々しい。この心の清々しさがここに表はされてゐると思はれます。清々しきといふ感情は後の日本の倫理思想の基本になります。人間は欲から離れた時に清々しい気持になるものなのです。ともあれ須佐之男命は非常な苦闘彷徨のご生涯を送られたのです。

二、久米の御歌

「神武天皇の久米の御歌に『みつみつし久米の子らが』とうたはし、同胞愛」と『うちてしやまむ』といふ征服の雄たけび』は対になってをります。

ここにまた「動乱の生のかなしき緊張」といふ言葉が使はれてゐます。

神武天皇の「みつみつし久米の子らが垣もとに植ゑし山椒、口ひびく吾は忘れじ。撃ちてしやまむ。」とうたひあげられた同胞愛と征服の雄たけびは、御兄君の五瀬命が登美毘古の矢に当たつて、「賤奴が手を負ひてやいのちすぎなむ」——つまらない敵に痛手を負つてここで死んでゆくのかと大きく叫んでお亡くなりになられた御最期とともに、時々刻々直面する問題に生を回避せず最後まで奮闘の生活を送られる緊張を示してゐると言つてをられるわけです。「かなしき緊張」と表現なさつてゐますが、「かなしき」といふ形容詞には、緊張といふものに

寄せる黒上先生の深い思ひが含まれてゐると言つてよいでせう。

最後の最後まで奮闘してゆく生活。それは単に悲哀を催すといふものではない。感情が迫つてゆくやうな、そんな氣持がこめられてゐる。なつかしくもかなしい、と言つたらよいのかも知れない。このやうな緊張が神武天皇のご生涯を流れてゐるのです。

三、倭建命と弟橘比売命

次に弟橘比売命の辞世。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中ほなかに立ちて問ひし君はも

これは自分の死とか悲しみを詠んでゐるのではない。倭建命に対して「あなたが私の安否を問ふてくれた。私をお助けになつた。そのあなたよ。」と呼びかけられた歌なのです。

本当に美しいお歌でありご最期です。人としてこれ程美しいものはないと思はれるやうなご最期をお示しになつて弟橘比売命は亡くなつてゆかれるわけです。

また倭建命の御最期、仲哀天皇崩御の折のご表現。これらに通じるものを黒上先生は、「生死問題の冥想の余裕もなき急迫緊張の生命」と述べられてゐるのです。

そしてこのあとに、もう一度古事記に就いてご説明なさってゐる。

「古事記に現はるゝ我が民族の生は外なる戦と内なる睦びの錯綜する明暗の交代である。太子が『国家の事業を煩となす』と現世の悲哀に徹したまひ、而も之を同じく群生に察して大悲息むなしと告白したまひ、同胞憶念の永久苦闘に随順して、其の切実体験に大陸の学説教義を生命化したまひし総合的御精神はこの民族生活の劇的生命を辿ってはじめて理解し得るのである。概念理論に内容を与へ、抽象教義を生命化せるものは常に現実人生の波瀾に生くる若き民族の情意であつた。」

かういふ文章を読みますと、『古事記』は天皇の權威をたかめるために書かれたものだといふ意見が、実にくだらないつまらないものだといふ事がおわかりになるでせう。

聖徳太子のご精神、かつこのご精神の源泉である『古事記』は、古代日本民族の情意を余すなく表現したものであつて、これを読み味はふことによつて私どもは永しとこへに日本の国の発展に寄与してゆけるであらう、と信じてをります。

境順なる者は怠り易く境逆なる者は励み易し

—— 獄中における吉田松陰 ——

東急建設㈱技師

奥

富

修

一



氷の花

はじめに

吉田松陰の生涯

獄中の松陰

講孟餘話

求道

境順なる者は怠り易く
境逆なる者は励み易し

はじめに

今日は吉田松陰といふ方についてお話をするのですが、只今の御紹介にありましたやうに私は九年間以上建設現場で仕事をして参りました、所謂現場監督でして、今でも連日東京でマンションの工事に従事してをります。そのやうな男がなぜ松陰についてのお話をするのか、その契機についてまづ述べさせていたゞきます。入社直後の事でしたが、建設現場に配属をうけました私は、学生時代に描いてゐた職場に対する理想像と現実の職務との間に大きな食ひ違ひを感じ仕事の壁に直面致しました。毎日のやうに職人の方達と衝突もし、又直接従事する自分の業務は「ビル建設」のほんの一部分の些細な事にすぎないのではないかと、と悩みもしました。一見世の中から隔絶されたやうな現場生活の中では、自分が本当に小さな歯車の如く思はれて参りました。かうした時に私は学生時代に読んだ松陰の著書を再び手にしたのですが、そこで多くの示唆を得ることになったのです。

吉田松陰の生涯

それではここで吉田松陰の生涯を簡単に説明しておきます。松陰は今から約百五十年前、幕末期に生まれました。当時の世界は英・米・仏・露などの列強が次々とアジアに進出し虎視眈眈とその植民地化をねらってをりました。松陰の少年時代には清国でアヘン戦争が起り、又二十八歳の時にはインドが遂に植民地化されるに至りました。幕府は当時鎖国政策を採ってをりましたが、嘉永六年のペリーの黒船の来航に象徴されますやうに、列強からはその軍事力を背景に門戸の開放を次々と迫られました。しかし弱体化した幕藩体制には、列強の要求をはねつけるだけの力も気力も失はれんとしてをりました。松陰はこのやうに揺れ動く時代の中で長州藩の萩に育ち、山鹿流兵学を学び、諸国遊歴の旅にでかけ、各地の学者や志士との交はりをもちながら迫り来る時代の転機と、日本の直面してゐる危機状態を身をもって感じとっていたのでありました。やがて松陰は欧米の文明・文化を吸収しようとし、自ら国禁を犯して黒船乗り込みを敢行しましたが、ペリーの容れるところとならず、失敗のうちに自首して獄に繋がることになりました(下田踏海事件・安政元年三月)。幕府は松陰を国元に送り返し蟄居謹慎を命じます。かうして萩の長州藩牢「野山獄」での獄中生活が始まりますが、そこで松陰は猛烈な勉学を展開します。記録によりますと松陰が積み重ねた読書量は数の上からだけみましても年間五百冊を超えてをります。又一方では同囚の人達に呼びかけまして獄中での勉強会を開き、俳句の会を催し、書道の会を作り、孟子の講義などを起してをります。当時在獄してゐた囚人は松陰より



も皆年齢は遙かに上であつたのですが、獄中の頹廢的な空気も次第に活気を帯びてゆきました。約一年間の獄中生活のあと出獄して父の実家に帰り幽囚の身となります。この後しばらくは肉身親族の暖かい情愛に見守られながら勉学を続けてゐますが、やがて伯父久保五郎左衛門の私塾であつた松下村塾を継承致しました。この松下村塾で学んだ人達の中には高杉晋作、久坂玄瑞、入江杉蔵、伊藤利輔(後の伊藤博文)、山県有朋など幕末から維新にかけて長州藩の指導的立場となつた幾多の志士が輩出してをります。かうして松下村塾が最も隆盛であつた時、あたかも符節を合せる如く時代は急を告げて参りました。即ち安政五年井伊直弼が大老となるや、朝廷の勅許を得ない儘に不平等条約として名高い日米通商条約に調印をしまひます。これに対し世論は沸騰し、とり分け尊王派の志士達の怒りは頂点に達しました。井伊大老は京都に老中間部詮

勝を派遣し志士達への容赦ない弾圧を開始しました。これが所謂安政の大獄となるわけです。自ら勤王の先駆けをもって任じてゐた松陰は、各地の志士の動きに呼応すべく老中間部詮勝の要撃を計画し準備にとりかかりましたが、事が露見して毛利藩主の容れるところとならず、再び野山獄に投ぜられました。この頃の松陰はその思想が愈々先鋭化して来てをり、信頼してゐた門人からもむしろ敬遠されるやうになつてしまひ、時世に対する憤激の思ひにもだへつつも月日を重ねてゆきました。同じ頃投獄されてゐた門人の入江杉藏・野村和作兄弟と死生の問題を真剣に討究し合つたのもこの時期でした。そして安政六年五月、井伊大老は松陰を江戸に送るやう命じたのです。この時松陰が即座に思つた事は幕府の役人に対面した際に、平素の持論を詳しく述べて幕府の政策を転換させようといふことでした。江戸に送られた松陰は事実この初志を貫徹するのですが、幾度かの取調べの後に幕府は松陰の言に耳をかすこともなく、遂に十月二十七日斬首の刑を執行してしまひます。江戸に送られてから処刑に至るまでの詳しいいきさつについては、昨年の今林氏の御講義録（「日本への回帰」第十三集二十九頁）に述べられてをりますので御一読下さい。松陰はたとへ相手が幕府であつても誠意をつくして接するなら決して解り合へない筈はないと信じてをりました。松陰は孟子の「至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり」といふ言葉に身を以て応へようとし、自ら至誠の道を実践し、ついにはこの至誠の道に殉じていきました。

私が建設現場で再び松陰の著書を手にし、松陰のこのやうな人生や思想に触れていきました時、無量の感動を覚えると同時に、それまでの自分が余りにも恥かしくなりました。小さな歯車の一つでしかないと思つてゐた自分、個我の殻に閉ぢこもらうとしてゐた自分は間違つてゐた。たとへ小さな歯車であつてもそれがなければ大きい歯車も回らないのだ、歯車は小さいながらも一人の日本人として国に尽せる道を見出すべく努力を重ねていくこと、日々の生活に全力を投入していくことの中から、建物の基礎も築かれていくやうに、国の礎も築かれてゆくのではないかといふことに思ひ至りました。私はこれまで現場での生活を送りながら、その間、松陰に多くのことを教へられて参りました。なかでも獄中といふ大変な悪条件のもとでそれを克服しながら同囚の人々と共に勉学に励んでいった松陰の姿に強烈な感銘をうけたのです。さういふ意味で今日は古典の講義といふよりも、一社会人として、松陰を学ぶことに志を立ててゐるその一人として、皆様と一緒に松陰の遺文に直接触れてゆきたいと思つて壇上に立った次第です。

獄中の松陰

安政元年十月に野山獄に入獄してからの松陰の勉学の様子は、翌年正月に実兄杉梅太郎に宛

てた書簡によく描かれてゐます。

『正月早々から多忙多忙、外史も讀まねばならず、詩も作りたし、信玄全集も借つたし、遺言も覆讀し懸けた。入蜀記一讀甚だ面白し、今一讀と思ひ候。中庸も初めの方二三枚讀懸けあり、大學は一讀、詩も吟詠したし。扱て夫れに又どうも唐土の歴史が讀みたい。喜ぶべきは春永く。』

外史とは頼山陽の『日本外史』、遺言とは浅見綱齋けいさいの『靖献遺言』の事です。この書簡には松陰が獄中で勉強をしてゆく有様がよく表はれてをります。冒頭の「正月早々から多忙多忙」といふところなど、あれもこれも読みたい、他にもしておきたい事がたくさんあるのだが、とても時間が足りないのだといふ活き活きした気持が伺へます。又最後の「喜ぶべきは春永く」の言葉。この時には冬至を過ぎてゐますので日中の時間がわづかではあるが延びてゆく、当時は獄中での灯火の使用は許されてをりませんでしたし、日が永くなることは読書の時間が増えてゆくことになるので大変喜ばしい、そのあふれるやうな心情がよく表はれてゐます。

松陰は勉学を重ねる一方同囚の人々に心を向けました。この野山獄は土分の者が投獄されてゐたところで当時松陰の他に十一人がをりました。その多くは家族、親戚から借牢といふ形で

軟禁状態におかれてゐました。中には「行年七十六、在獄四十九年」（野山獄囚名録敘論）の人もゐましたが殆どが三十代後半以上の人々ばかりで、松陰はこの時二十五歳です。刑期をとめれば出獄するのが普通ですが、自分の親族から疎んぜられてゐるので家族からの免獄の申請を期待することができず、永久に出獄の見込みがたない人が多かったです。獄舎の雰囲気はいきほひ絶望的で頹廢感に満たされてしまつてゐた。松陰はこの同囚の人達の身の上を知り大変嘆き悲しみます。人々は口々に「我が徒終にまさここに死すべきのみ」（前出・同）と言つて永久に獄から出られないと観念してしまひ絶望の淵に沈んでしまつてゐる。松陰は深い嘆きの余り自分が同じ境遇におかれてゐることを省りみる余裕すら失つてしまひます。

やがて松陰の方が先に出獄することになりましたが松陰はどうしても自分だけが再び太陽の日射しを仰ぐことに耐へられない。「食を得ては即ち懐ひ、衣を得ては即ち懐ひ、寒夜爐に當りては即ち懐ひ、晴日庭を歩しては即ち懐ふ」（前出・同）といふやうに、事ある毎に同囚の人々の身の上を偲んでは心が結ばれてしまひ一日として心の晴れることがなかった。この松陰の痛切な気持はやがて親族や門人達を説きふせてその力によって運動を起し次々と同囚の人達の免獄に成功してゆくこととなります。このやうな同囚の人達との固い心の結びつきは獄中に於て育まれてゐたのでした。それは先程申し上げましたやうに同囚の中でも特技のある人を先生として迎へ勉強会を開始したことにあらはれてゐます。俳句の得意な人を中心に句会を催

し、書の達人には文字を習ひます。そして松陰自身は同囚の人達と共に「孟子」の論講の会を作りました。いま御手もとに配ってゐる「講孟餘話」はその時の記録をもとに出来たもので松陰の代表的な著作となりましたが今日はまづその「序」から読みたいと思ひます。

講 孟 餘 話

『道は則ち高し、美し。約なり、近なり。人徒らに其の高く且つ美しきを見て以て及ぶべからずと為し、而も其の約にして且つ近く、甚だ親しむべきを知らざるなり。富貴貧賤、安樂艱難、千百前に變ずるも、而も我れは之れを待つこと一の如く、之れに居ること忘れたるが如し。豈に約にして且つ近きに非ざらんや。』

ここでまづ区切ります。「道」とは孟子が説く道の事で人として踏み行ふべき道とでも申しませうか。その道は大変高遠であり非常に美しくもある。しかしその反面決して生活からかけ離れたところにあるのではなく、むしろ簡明にして身近にあるものなのだ。ところが世の人々は道のもつ一側面——高く且つ美しい面——だけを見て自分には手が届かないのだと思ひこんでしまひ、もう一つの側面——約にして且つ近い面——のあることを知らない儘である。富貴貧賤、安

樂艱難といったやうにその人の境遇は次々に変転するものだが、道をふんできへるればどのやうな境遇の変転にも常に變らぬ同じ態度で接することが出来るし、たとへどのやうな境遇にあつても道を行つてゐればすべてを忘れてしまつてゐるやうな心持ちになることができるのだ。さう考へてみると道なるものは実に簡明でしかも身近にあるものではないか。

『然るに天下の人方且に富貴にみだ淫れ貧賤に移り、安樂に耽り艱難に苦しみ、以て其の素を失ひて、而も自ら抜く能はず。宜なるかな、其の道を見て以て高く且つ美しくして及ぶべからずと爲すや。（中略）然るに富貴安樂は順境なり。貧賤艱難は逆境なり。境順なる者は怠り易く、境逆なる者は勵み易し。怠れば則ち失ひ勵めば則ち得るは、是れ人の常なり。吾れ罪を獲て獄に下り、吉村五明・河野子忠・富永有隣の三子を得て相共に書を讀み道を講じ、往復益々喜びて曰く、「吾れ諸君と與に其の境逆なり、以て勵みて得ることあるべきなり」と。遂に孟子の書を抱き、講究磨磨して以て其の所謂道なるものを求めんと欲す。』

ところが世の中の人々はそのおかれた境遇にとつぷりとつかつてしまつてゐて、富や高い地位におごつてゐるかと思ふと、貧しさのために忽ち心をとらみだしてしまひ、安逸に耽つてゐるかと思ふと今度は艱難の中であくせくとして苦しんでゐる——かうして人として大切にすべ

き基本の心構へを見失ってそこから抜け出すことができないうる。それだから道などといふのは「高く且つ美しい」ものでとても自分の及ぶところでない判断してしまふのももつともなことであらう。——松陰はこのやうに人はともすると「富貴貧賤、安樂艱難」といった境遇に目を奪はれてしまつて大切な道を求める視点を失つてしまひがちである、と指摘します。松陰はこゝで肝心な事は境遇の変化をどううけとめるか、そこに人間として一番大切なものが問はれるといふのです。「富貴安樂は順境なり」たしかに豊かな富をもつ安逸な境遇は順風に乘つたやうなものです。それとは対照的に「貧賤艱難は逆境なり」、貧賤艱難の境遇にゐる者はいふまでもなく逆風に立ち向つてゆくやうな苦しい立場にゐる。ところが人といふのは順境にゐればつい怠けてしまつて大切なものを失つてしまひがちであり、反対に逆境にゐれば、その艱難を克服しようとして、従つてその努力に應じて得るものも多いものだ、これが人の世の変らぬ眞実なのだ。

「境順なる者は怠り易く、境逆なる者は勵み易し、怠れば則ち失ひ、勵めば則ち得るは、是れ人の常なり。」この言葉に是非着目して戴きたい。松陰はこの言葉を通じて同囚の人々に情熱的に語りかけます。野山獄といふ「逆境」に自分達はおかれてゐるのだが、そのことは決して不幸なことではない。むしろ「境逆なる者は勵み易い」のであつて「勵めば則ち得る」のが世の眞実なのだ。これからは大いに切磋しあひ、道を求めるべく精進を重ねていかうではない

か。この気魄に満ち、かつきはやかな印象を与へる言葉。此の一言は必ずや同囚の人達の心を奮ひ起したにちがひない。一人の青年が、十歳も二十歳も年齢の上の人を相手にして人としての道を求め、共に「孟子」の勉強をしませんか、と呼びかけてゐる姿を想像してみても下さうい。後に松陰が松下村塾を主宰する様になった時には松陰の人物を伝へ聞いた多くの若者が弟子入りして来たのですが、そのやうな松陰の魅力の一端、言ひ換へれば教育者としての資質が既にこの野山獄中に於ていき／＼と働いてゐたと言つてもいいと思ひます。

かうして同囚の人達への呼びかけを続け乍ら「孟子」を学んでゆく松陰は次第に蓄積された信念を吐露してゆくやうになります。なかでも学問の本来あるべき姿についての言及は愈々明確なものになります。次は講孟餘話「梁惠王上首章」の一節です。

『今且く諸君と獄中に在りて學を講ずるの意を論ぜん。俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る、復た人界に接し天日を拝するの望みあることなし、講學切勵して成就する所ありと雖も何の功效かあらんと云々。是れ所謂利の説なり。仁義の説に至りては然らず。人心の固有する所、事理の當然なる所、一として爲さざる所なし。』

もし俗っぽい見方をするなら、我々のやうに再び外に出ることの望みのない囚はれの身であ

り乍ら「講学切斷」——互に學問に勵んでそれを成就させたとしても一体何の「功效」——効果や利益があらうか、そんなことは全く役に立ちもしない、といふことになるであらう。だがこのやうな見方こそは目先の事ばかり考へる「利の説」なのであって「仁義の説」とは全く別なのである。人々の心に本来そなはってゐるもの、人の世の道理や筋道になつてゐる事柄であれば、それが何の効果や利益につながるものでなくとも直ちに実行にうつしてゆく、それが仁義の説なのだ。このやうに人としての道を大切にしそれを求めていかうとする立場にたつならば獄中で勉強をすることが無駄だなどといふ結論はどこからもでてくるはずはない。むしろそのやうな功利的な見方こそ誤りだ、と松陰は言ふのです。更に続けて

『人と生れて人の道を知らず、臣と生れて臣の道を知らず、子と生れて子の道を知らず、士と生れて士の道を知らず、豈に恥づべきの至りならずや。若し是を恥づる心あらば、書を讀み道を學ぶの外術あることなし。已に其の數箇の道を知るに至らば、我が心に於て豈に悦ばしからざらんや。「朝に道を聞きて夕に死すとも可なり」と云ふは是なり。亦何ぞ更に功效を論ずるに足らんや。諸君若し茲に志あらば、初めて孟子の徒たることを得ん。』

人が人として歩むべき道を知らずにゐる、これ程恥づかしいことはあるまい。それに又人間

は常に対人関係の中に生きてゐるのであって、君主に対しては臣下であり、親に対しては子であり、更に武士としての立場にあれば武士としての道を行くことを求められてゐるはずだ。だがそのやうに臣下として、子として、あるひは武士として生きるべき道にもしも気づかないでゐるとするならば、これほど恥づかしいことはあるまい。もしこれに気がついて自分はまだまだ未熟であると思ふなら、先人の書物を読み、道を学んでゆく以外に方法はあるまい。そしてその努力の結果、わづかでも人間として生きるべき道を体得することができるならこれほど喜ばしいことはない。論語に「朝に道を聞きて夕に死すとも可なり」と言つてゐるのも以上の消息を示してゐるのであって、そのやうな心境に達するならば「功效」などといふことにかかわらずはることは全くないではないか。同囚の皆さん方も「利の説」などにとらはれずにとたへ獄中であつても人としてのあるべき姿を学ぶ事に志を立てるならば初めて孟子の弟子となることのできるのです——。

松陰は獄にゐながらも全力を傾注して学問の本質を求め続け、又同囚の人達にも単に勉強会に誘ふのではなく、孟子を学ぶ事を通して一人／＼に立志を要請し、ひいては松陰の生涯をかけた友人として、又同志としてつき合つてゆかうとするのです。

求 道

さてこのやうにして松陰は同囚の人達と勉学を続けていくのですがその学問の根底には常に「道」が据ゑられてゐました。

『水を得ざれば掘ること深しと云へども、井とするに足らず。道を得ざれば講ずること勤むと云へども、學とするに足らず。因つて知る、井は水の多少に在りて、掘るの浅深に在らず。學は道の得否に在りて、勤むるの厚薄に在らざることを。』(盡心上篇第二十九章)

たとへどれほど深く掘つたといつても水が出てこなければそれは井戸とは言へない。学問もこれと同じやうにどれほど苦心して勵んでもその人自身が道を体得するのでなければそれは学問をしたとは言へない。このやうに松陰は道を求めることを中心として学問がなによりも大切だと指摘します。それではここで言ふ道とは具体的に何を指してゐるのか。それはその人自身が現実存在し、生をうけてゐるその原点に思索をめぐらし焦点を据ゑるところから学問をスタートさせようといふことです。例へば「子と生れて子の道を知らず」と松陰は言ふ。自分は親に対しては子であり、子として親の深い愛情にどのやうに応へてゆけばよいのか。それには自分が子であることを真底自覚しなければその解答は見出せない筈だ。「人と生れて人の道

を知らず」といふこともさうです。松陰にとって「人の道」とは具体的につきつめてゆけば「日本人としての道」といふことです。一人の日本人としてどのやうに生きてゆけばよいのか、日本人の本質とはどのやうなものなのか。この根本の自覚に達するところから今自分はどの日本に於て何を為すべきかといふこともでてくるのです。

松陰は野山獄を出てから後に松下村塾を主宰するやうになる訳ですがその村塾を始めるに際して塾運営の基本方針とも言ふべきものを「松下村塾記」の中に書いてをりますが、そこではこの日本人としてふみ行ふべき道について更に明確に言及してゐます。

『そもそも人の最も重しとするところのものは君臣の義なり。國の最も大なりとするところのものは、華夷の辨なり。今天下はいかなる時ぞや。君臣の義、講ぜざること六百餘年、近時に至りて、華夷の辨を合せてまたこれを失ふ。然り而して天下の人、方且まさに安然として計を得たりとなす。神州の地に生れ、皇室の恩を蒙り、内は君臣の義を失ひ、外は華夷の辨を遺わするれば、すなはち學の學たるゆゑん、人の人たるゆゑん、それいづくにありや。』

「そもそも人の最も重しとするところのものは君臣の義なり」、この場合の「君臣の義」の「君」は後の文からしても明らかやうに藩主などの意味ではなく、明らかに天皇を意味してを

り臣は国民のことです。この一節は松陰が日本の国がらの本質を明らかにしてゐるところです。日本の国は歴代の天皇方が常に国民を慈しんでこられたのであり、又国民も天皇方をお慕ひ申し上げて来た。そのやうなつながりの中に自然に育まれてきた筋道が「君臣の義」なのです。さらに「國の最も大なりとするところは華夷の辨なり」、「華」とは誇りある我が國、即ち日本のことであり「夷」とは外国を意味します。その自國と他國との弁明を明確にすること、即ち外国に対して常に日本の自主独立の姿勢を堅持してゆくこと、それが國家として最も大切にすべきことだといふのです。そして以上のやうなことを踏まへてみると「今天下はいかなる時ぞや」、今の日本は一体どのやうな状況になつてゐるのか。「君臣の義、講ぜざる」と六百餘年、君臣の義を明らかにしない儘で六百餘年を経過してしまつてゐるではないか。「六百餘年」といふのは源頼朝の鎌倉幕府創設以来、即ち武家政治が始まつて以来、といふことです。その間、形式的には幕府は皇室を尊敬することにしているが、その實質は敬して遠ざけてゐるにすぎなかつた。心から皇室を敬慕してきたのではない。このやうに「君臣の義」は全くすたれてしまつてゐるではないか。「近時に至りて、華夷の辨を合せてまたこれを失ふ」、更に悪い事には近年幕府はアメリカやロシアの來航以來、いたづらに列強の前に腰を低くして迎合するやうな外交政策に終始してゐる。そこでは明らかに華夷の区別までが失はれてゐるではないか。かうして我が國の自主独立の氣概は全く失はれてしまつてゐる。「然り而して天下

の人、方且に安然として計を得たりとなす」、このやうな最悪の状態に立ち至つてゐるといふのに世の中の人はのんびりとしてゐてこれであまくいつてゐるのだといふ。「神州の地に生れ、皇室の恩を蒙り」、この日本といふ永い伝統と豊かな文化を蓄積した国に日本人として生れ、その上歴代の天皇方から限らない慈しみを賜はつて来てゐるのに、そのことに心を馳せることを忘れて「内は君臣の義を失ひ、外は華夷の辨を遺るれば」、国の内部に於ては全く君臣の義の筋道を失つてしまひ、更に外交政策も自国と他国の分別さへつかない状況に至つてしまふといふことになれば物事の筋道を明らかにすべき学問は一体どうなつてしまつてゐるのか。「すなはち學の學たるゆゑん」、人の人たるゆゑん」、それは一体どこにいつてしまつたのか。まことに蔽しい言葉かもしれませんが松陰の心の底からの声をきくやうです。しかもここで松陰の言はんとするところは現代にもそのまゝあてはまるやうに思ふのです。

かくして、松陰が歩み続けた道は、野山獄で同囚の人達の一人一人に心を傾けていったやうに常に隣人に心をつくし、自分の触れ合ふ人々全てに心の通ひ合ひを求め、心のつながりを大切に生じた生涯でありました。

境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し

終りに一言つけ加へたいと思ひます。皆さんの中の多くの方は大学生ですが、その最高学府に学ぶ諸君はまさしく順境にあるといふべきでせう。たった十一人しかつき合ふ人のゐない牢獄の中で、あらゆる自由も制限され、灯火さへも許されない、さういふ限られた世界の中で真剣に学問を展開した松陰からみるなら、皆さんはまさに順境にゐる。皆さんには多くの友人もあることでせうし、大学に帰れば図書館でいくらでも本が手に入る。その上この合宿教室を例にとらせて戴くなら、世の一流といはれる先生方の御講義が用意されてをり、更に班に帰ればとことんまで自分の話を聞いてくれる友がゐる。これほど勉強をするのに整った環境は又とないのではないかと思はれます。

先ほどの講孟餘話の一節をもう一度思ひ起してみて下さい。「境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し。怠れば則ち失ひ励めば則ち得るは是れ人の常なり」といふこの言葉。何も皆さんに進んで逆境に入って下さいなどと言ふつもりはありませんが、しかし今の大学生活の儘で本当によいのか。今の儘では大切なものを日々失ひつつあるのではないか。山田輝彦先生は朝日新聞のコラムを引用されてそこでは今の青年、学生は「師なく、友なく、夢なき世代」と評されてゐると言はれました。このやうな批判を受けても何も感じない、何も思はない、それでいいのか。たとへそのやうに言はれる時代であっても私たちは自分を見失はずに価値あるものをしっかりとかこの手につかんでいかねばならない筈です。獄中からのこの松陰の呼びか

けを皆さん自身の心の耳では非聞きとって欲しいと思ひます。昨日の班別討論の折に、この合宿教室はすばらしいが大学に帰ってこの話をして誰もまともに聞いてくれさうにない、といふ人がゐました。確かにさうかも知れません。しかし吉田松陰は今の大学の現状からは想像すべくもない遙かに頹廢的な牢獄の中で、人の言ふことなど全くうけつけようともしない囚人の一人一人に心をこめて語りかけていったのではなかったか。大きなことを考へる必要はない。たゞ、自分の友人や隣人に、自分の大切に思ふことを誠意を尽して語ってゆけば必ず心のつながりが求められる筈だ。是非さう信じて戴きたいと思ひます。どうか皆さん、勇気をふるって吉田松陰先生の心の中に飛びこんでいって下さい。

短歌創作のために

高千穂商科大学教授

高木尚

一



ユウスゲの咲くころ

はじめに

短歌の創り方

短歌創作の姿勢

短歌の鑑賞―防人の歌と黒上先生の歌

最後に

はじめに

合宿の日程を見ますと、本日の午後は、レクリエーションといふことになってをりますが、同時にこの時間は短歌創作の時間にもなつてをります。そこで皆さんは、何かズッシリと重いものを背負つてゐるやうな感じを抱かれてゐることとせう。これから皆さまがつくられる短歌は、五七五七七と形が決まった定型詩です。その決まった形の中に自己の思ひを込めて発表しなければならぬ。それは、もちろん自分自身の創作でなければならぬし、自分自身の気持ちを率直に表はすものでなければならぬ。自分の思ひを率直に言葉にするといふだけでも難しいのに、それを定型の中に、五七五七七と指折り数へて詠み込まなければならぬ。気が重くなるのは、当然と言へませう。ところが、考へてみますと、この合宿の最初から今まで随分短歌が出て来ました。今日の朝の集ひでは、次の二首の短歌が詠みあげられました。これは、いづれも明治天皇の御製で、日露戦争の最中にお詠みになった御歌です。

かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のこころは（明治三十七年）

おのづから仇のこころも靡くまで誠の道をふめや国民（明治三十八年）

日露戦争の時代にお創りになった御製は、かなり多いのですが、その中でも心に関する御製が非常に多いといふことは、着目すべき点です。己れの心を尽くして、まことの道^{ミチ}を開いていかうといふ御考へが、戦時に於ても中心的な御意志となつてゐたことが偲ばれますが、この事實は私共が、永久に語り伝へるべきことだと思ひます。このことは、日本の皇室の中に連綿として継承されてきた根本精神であり、先の大東亜戦争中にもそれが現はれたのでした。たとへば、ナチスドイツと軍事同盟を結んでゐながら、ユダヤ人排撃は、日本の国是に沿はないものであるとして同調しなかつた。これは、皇室のご精神でもあるといふことを思ひます時に、日本人が古来短歌を、人生の修業の一つの手だて^テとして、創作し続けてきたといふ事實が重要な意味を持つてゐるといふことがわかつてくる訳です。従つて、われわれが、これから短歌を創るといふことも、実は極めて重要な意味を持つてゐるといふことになるのです。

短歌の創り方

それでは、これから特に、生れて初めて短歌を創られる方の為に少しお話をしてみたいと思ひます。皆様もおもちであらうと思ひますが、国民文化研究会から夜久正雄先生、山田輝彦先



生が書かれた『短歌のすすめ』といふ、本当に良く出来た短歌の入門書が出版されてをりますので、これに則ってお話を進めてみたいと思ひます。

この合宿教室では、短歌を創作するだけではなく、そのあとで相互批評といふことを行ひます。これは、批評者が心を込めて一つ一つの短歌について懇切丁寧に批評しあふと同時に、もう一つお互ひの心が不思議にも通ひ合ひ、広やかな共感の世界を体験することができるといふ意味を持つてゐるのです。ですから、これから行はれる短歌の創作はそのあとの鑑賞、相互批評と、互ひに大切なつながりを持つてゐるのだといふことを考へながら、短歌を創つて戴きたいと思ひます。

それでは、まづ『短歌のすすめ』の一〇六頁を開いて下さい。そこに載つてゐる歌をよんでみませう。第一首目の歌ですが、これは今から十二年前に皆さんの

先輩の一人が創った歌です。

山の中ゆひとすじの煙ほのぼのと青空のもとのぼりゆくなり

「ひとすじ」の「じ」は間違ひで「ぢ」が正しいかなづかひです。この歌に詠まれた情景は、朝起きてみると、山の谷間のやうなところから、朝餉けの仕度をする煙が一筋立ち上つてゐるといったところでせう。対象のつかみ方としては良いし、歌としても一応まとまつてゐる。ただ、この書物の中で著者が注意してゐるのは、三句目の「ほのぼのと」といふ言葉です。「ほのぼの」といふ言葉は、ほのかにかとか、かすかにといふ形容に使ふ。ですから、ほのぼのと霞む春霞といふやうには使ふが、はっきりと見える一筋の煙には、「ほのぼの」とは言はない。ここは、「真直ぐに」と素直に詠めば良いと著者は言つてをられます。「真直ぐに」といふことで、気持も真直ぐになるし、煙も鮮明に見える。そこで、次のやうに直されてゐます。

山の中ゆひとすぢの煙真直ぐに青空をさしてのぼりゆくなり

強ひて朝といふ時間を表はさうとすれば、

山の中ゆひとすちの煙真直ぐに立ちのほりゆく朝あしたの空に

と直せば良いと思ひます。さらに、作者の立つてゐる位置や季節、その時の心境を歌にしたいとなれば、連作にしていくこととなります。短歌は、一つの対象をつかまへて、それを一首に詠みこむのが原則です。これを一首一文と言ひます。俳句のやうに、上の句と下の句と、全く違ふ対象を詠んで、それを対比させるといふやうなことはありません。御歌会始めの詠進歌の中に、人の創った歌を上下うまく組み合はせて出したものがあつて、それがたまたま入選してしまつたといふ事例があるさうですが、さういふことをしても決して名譽なことではありませぬ。短歌は、あくまで自分自身の体験を「真直ぐに」つまり率直に詠むことが基本なのです。皆さんも、詠まうといふ情景をつかんだら、実景に即して、率直に克明に表現してみるといふことを心がけて下さい。朝餉あさごの仕度をしてゐるのだらうかとか、山の中に住んでゐる人がゐるんだとか、情景を見つつ、さらに沸き上つてくる思ひがあれば、二首三首と具体的に詠みこんで連作にしていけば良いのです。

明治天皇の御製に、

ともしびのたかき處にみゆるかなかの山邊にも人はすむらむ（明治四十一年）

といふ御歌があります。歴代の天皇方の御製には、この御歌のやうに、自然を詠まれながら、そこに人生を深く考へられてゐるといふ御歌が多い。われわれも、自然を鑑賞し、描写しながら、その中に人生といふものを深く考へていくといふ姿勢を失はないやうにしていきたいと思ひます。次に一〇七頁を開いて下さい。

はるかなる想ひをこめて雲仙の宿に今我はせ着きにけり

「はるかなる想ひをこめて」といふ表現は、気持はわからないでもないが、極めて抽象的でムードに酔った表現です。遠くの人に呼びかけるとか、便りを書く場合には、かういふ表現を使ふこともあります。ここでは遠い雲仙の地で行はれる合宿のことを想ひつつ、今その雲仙にやってきたといふことです。適切ではありません。著者は、「はるかにも想ひてゐたる雲仙の」と詠むべきであると言つてをられます。さらに「宿に今我はせ着きにけり」といふ表現は確かに少しオーバーです。「はせ着きにけり」といふのは息せき切つて走つてやってきたといふことです。飛脚が汗だくになつてやつと着いたとか、伝令が戦線の急を告げるために息

を切らしてやって来たといふやうな場合に使ふ表現です。ここは素直に「たどりつきけり」と言へば良い。

はるかにも想ひてゐたる雲仙の宿に今我たどりつきたり

正確な表現は、誇張がないから、かへって人の心を打つものです。一七三頁を開いて下さい。期せずして、今日司会をして下さってゐる沢部寿孫さんの歌が載つてゐます。これは沢部さんが長崎大学に在学中（昭和三十八年）に創られた連作です。

はるばると疲れも見せず集ひ来ぬ彦根の友も熊本の友も

はるばると来し友どちの顔みるにいつしか気持和みゆくなり

ひたすらに真まことの道を求めむとする友達はここにあるなり

過ぎし日の苦しきことも今はただ集ひしことのうれしきに消ゆ

天地の生れし様を思はする空あり海あり山もありけり

ここには天地が躍動するやうな嬉しさが表現されてゐますがかういふおもひは到底一首に詠

み込めるものではありません。この歌の場合も、やはり連作にするのが良いと思ひます。友らが集ふ雲仙の宿に今やって来た、そして、宿の玄関に入ると友らのなつかしい顔が見えたとか、横断幕に力強い言葉が書いてあったとか、具体的に三首、四首と連作にしていくと、生々とした歌が生れてくる筈です。出会ひの時とか、別れの時とか、今までの状況に変化が起る時に起きた気持ちを適確につかんで詠むと、良い歌が出来ることが多いのです。

それでは、次の歌にいきませう。一〇九頁です。

暗緑の大雲仙の山あひに朝日上りて足音しげし

「暗緑の」は、暗いほどに木が繁つてゐるといふ意味でせうが、明瞭な言葉ではありません。又、「足音しげし」といふ言葉が唐突です。山あひに上る朝日^あが、この歌の主題かと思へば、突然足音が入って来てしまつて何かつながりのない歌になつてしまつてゐます。やはり正確さを欠く歌です。著書が直されてゐるやうに、

暗かりし雲仙岳の山あひも朝日上りて人の声する

とすれば、少しは意味がはっきりしてきます。しかし、足音を生かすならば、やはり連作にする必要があります。明治時代に短歌革新を行った正岡子規が、当時「明星」といふ雑誌を主宰してゐた有名な歌人落合直文の歌を批評してをります。

煩へる鶴の鳥屋とやみて我立てば小雨降り来ぬ梅香る朝

これも、今の歌のやうに、対象がいくつかあり、作者が詠まうとしてゐる対象が大きく変化してゐます。まづ「煩へる鶴」が、どこにゐるのかわからない。子規はかう言つてゐます。「それは此歌は如何なる場所の飼鶴を詠みしかといふ事、即ち動物園かはた個人の庭かといふ事なり。」次に、この歌は、何に焦点をおいて詠んでゐるのかが、はっきりしません。梅の香りといふのは、ほんのかすかにしか匂はないもので、それを嗅がうと思つたら、一所懸命鼻の神経をとがらせてゐなければならぬ。それを強調するなら、「煩へる鶴」や「小雨」はかすんでしまふといふ訳です。結局、対象がいくつもあるので、歌全体が漠然としてしまふのです。詠む対象を明確につかみ、一つに絞るといふことが、歌を創る際に非常に重要であると思ひます。

では、次に一一三頁を開いて下さい。

あどけなく笑ふひとみも清かりし旅の乙女に心ひかれぬ

この歌に対する著者の評は、まことに辛辣です。「『清いひとみ』があり、『旅』があり、『乙女』があると流行歌ができるのです。例へば少女雑誌などのさし絵か何かを思ひ出させるやうなイメージを喚び起されますが、そこに本当に生きた、生命のある年頃の娘さんの姿は浮かんで来ません。」この歌は、何となくすらりと詠まれてゐて、確かに切実さが無い。切実な感情を言葉にするのが歌の基本です。前掲の二首の歌は、ここをかう直せば、良くなるという性質のもですが、この歌は黙って没にされても仕方のない歌です。俳句で言ひますと、かういふ場合には月並調といふ言葉をよく使ひます。どういふのが、月並調なのかを一言でいふのは難しいのですが、正岡子規は、次のやうなことを言つてゐます。

「山吹や何がさはって散りはじめ

といふ句がある。これは別に月並みではないが、『山吹や』が『夕桜』となると月並みになつてしまふ。」と。本当に紙一重の違いで月並みか否かといふことになる訳です。俳句でいふ

月並調とは、一口で言ふと凜然とした表現に欠けてゐるといふことでせう。「心ひかれぬ」程度の感情だったら、それを全部忘れて修行に邁進する位でなければいけない。この歌の作者は、既に歌の作り方は頭に入つてゐるやうですが、もっと切実な思ひを詠むことを心がけるべきなのです。さうすれば、この作者が持つてゐる一種の固定的な概念、歌に対する先入観を打破して、真実の表現を獲得することが出来る筈です。

以上、いくつかの歌を例に上げて、批評を行つてきたわけですが今度は皆さんが実際にお創りになつた歌について、明日の夜、長内俊平さんが批評されるわけです。その時には、ひとつ今までの批評の内容を思ひ出しながら、しっかり噛みしめて聞いて戴きたいと思ひます。

短歌創作の姿勢

それでは、かつてこの「合宿教室」の運営に当たつた国民文化研究会の会員の方の短歌をご紹介しますことにせう。

はげましつはげまされつつ道を求め求めつづけし十まり一とせ
年ごとに若きいのちのあらたなる友のまなざしかがやきて見ゆ

これは、徳永正己さんといふ方の歌です。それから、次は、明日和歌全体相互批評をして下さる長内俊平さんの歌

山の端に陽の落ちしよりひぐらしのなく音のいたもしげくなりゆく
はかなかる命のゆゑか息をつくとまなきがに鳴きつづくるも
病める友集ひえぬ友のねむごろにたのむとのりしことばうかびく

これらは、多年歌を詠み続けてをられる先輩の歌ですが、ひたむきに真実を求めていかうとされてゐるお姿をきつと皆さんも感じとつてをられることでせう。皆さんも、拙くてもいいから、真剣に真実を心をこめて歌ふやう、心がけて下さい。短歌創作といふのは非常な意志力を要するものです。これからの時間はレクリエーションといふことになってをりますが、講義を聴講してゐる時と同様、張り切つて、短歌創作に立ち向つて戴きたいと思ひます。明治天皇の御製の中に、次の様な御歌があります。

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしかな

「天地をうごかすばかり」といふ言葉が使はれてゐますが、歌を詠む時には、かういふ強い精神が必要だと思ひます。又、歌の本質を御実感として、次のやうに歌ひ上げられてゐます。

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

短歌の鑑賞 — 防人の歌と黒上先生の歌

それでは、次に持って来て戴きました『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の二一八頁を開いて下さい。ここに万葉集の防人の歌が何首か載って居りますので詠んでみることにしませう。

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

父母がかしらかきなで幸くあれていひし言葉ぞわすれかねつる

わが母の袖もちなでてわがからに泣きしところを忘れぬかも

三首目の「わがからに」とは「私のために」といふ意味です。いづれも両親との別離に際しての痛切な哀しみを率直に歌ひ上げた歌です。

蘆垣あしがきの隈所くまどにたちて吾妹子わぎもこが袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

「蘆垣の隈所」といふのは「葦を結って作った垣根の曲り角」といふ意味です。「吾妹子」とは「愛人」のこととせう。「しほほ」はぐっしよりといふ意味で、防人として任地に赴く男を送る女の痛切な情愛が、この言葉に凝縮されてゐるやうな気がします。

松の木けの並みたるみれば家人いはびとのわれを見おくと立たりし如もころ

この歌は、「松の木が並び立ってゐるのを見ると自分の家族が自分を見送って立ち並んでゐるやうに見える」といふ意味です。非常に生々しい表現です。

この書物の著者黒上正一郎先生は、この後に次のやうな文章を書かれてゐます。

「彼等は歌をよむがための歌人ではなかった。しかしその内心のまことが自ら表現せられて歌となるとき、悠久に人の心に徹する言の葉をとどめたのである。そこに目にうかぶものはあるがままの人生に戦ひ生くる悲喜の情意である。その巧まぬすなほなる表現に、遠海はるかに親を思ひ家を思ふ痛切の心の、既に切実恩愛のまことのうちに没せられてあるを見るのである。」

私は十八歳の時、この黒上正一郎先生を中心とした研究グループ「一高昭信会」に入りました。昨日夜久正雄先生のお話の中に出てきました新井兼吉先輩が、この会の例会で防人の歌の研究発表をされたわけです。先程詠みました歌の中で、

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

といふ歌がありました。「せ」といふのは、サ行変格活用 of 動詞で忘るといふのを強調した「忘れず」の未然形です。私はこの歌を聞いて、大変な感動をうけましたが、私は、昭信会に入ったのはこの一首の歌のおかげだと言っても過言ではありません。この歌が私の運命を決定づけたやうなものです。それ位、この防人の歌は、人の心を動かす力を持つてゐる訳です。この歌に感銘を受けてから、自分の心の中に歌といふものが湧いてきたやうな気がするのです。

それでは、私の生涯の師である黒上正一郎先生の歌を味はってみることにしませう。先述の書物「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の二六七頁に載つてをります。又、「短歌のすずめ」にも引用されてゐます。

手紙のはしに

(大正九年六月二十七日—十九才)

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつなかりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび
こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこちするかも
ああ一信海われもつながらむと求むるころそのころにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

黒上正一郎先生は、いはゆる歌人ではありません。が、たくさんの歌を創られました。そして、その歌は、友らへの便りの後に書かれたものが多く、友への篤信の情を歌にしたものばかりです。この五首の歌は、十九歳の時の作ですが、これらの歌の調べは、先述の書物の文章の中にこもつてゐる調べと一つのものなのです。そのことをしっかり感じとっていただきたいの

です。かうした高い調べを心の中で、繰り返しながら、自分の歌の創作に取り組んでいくことが肝要でせう。正岡子規の歌論の中にかういふ話が載つてゐます。江戸時代の末期の国学者に平賀元義といふ人がゐます。古学を学び短歌を好くした人ですが、この人の所に知人が歌を教へて貰ひたいと言つてきた時に、彼は黙つて柿本人麿の歌を繰り返し朗誦した。歌といふものは、何回も朗誦してゐれば、わかつてくるものだと言つたといふことです。五七五七七と指折り数へて苦吟するよりも、調べに心を委ねていくことの方が大切なのです。調べといふものをつかめれば、歌を詠む時に自然にその調べが出て来る。さうすると、調べの高い歌が出来るといふことになります。又、短歌のすすめの中にも書いてありますが、良い歌は自分で暗誦できる位に、何回も詠んで、とにかく自分のものにしてしまふことが大切です。

小林秀雄先生が言つてをられるやうに、感じとる、といふ氣持がなければ、短歌は自分のものにはならない。同様に、日本文化などといふものも、いくら勉強して知識を殖しても、感じとる、といふ氣持がなければ、その真髄はつかめないと思ひます。私共国文研の運動も、ともすれば一重の差で概念的なものになつてしまふので、真実に触れ合ふといふ機会を失つたまま上すべりしていくと何の為の運動かわからなくなると思ひます。

明治天皇の御製に、

いそのかみふるごとぶみは萬代もさかゆく國のたからなりけり

といふ御歌があります。「いそのかみふるごとぶみ」とは、古事記のことです。明治天皇は『古事記』を座右に置かれ、折に触れて、何回となく読まれたと聞きます。天皇と祖先の神々が一体になって居られるといふ事実をこの御歌から拝察することができます。かうした事実を、現実的不可思議と私共は言ひます。今夜は慰霊祭がございました。阿蘇の嶺嶺につままれた夜のしじまの中で厳肅にとり行はれることになってゐます。私は、この慰霊祭に例年参加してをりますが、そこでは自己の心が自然に統一されていき、本当に祖先、先輩達の御霊につながつていけるやうな気持になります。かうした私の体験も、現実的不可思議であると言へませう。逆に我々が日常生活の中で「これが現実である」と考へてゐたものが、極めて表層的な事象であつたと気づくこともあります。だからこそ、歌を詠んだ後に、互ひに批評し合つて、叩き合ふことが必要になる訳です。作者の気持を推察しつつ、歌を直していくうちに、不可思議に心が通ひ合ひ、そしてさらに互ひの心が開展していくといふ体験——これも、現実的不可思議の体験と言へませうが——を是非味はつて戴きたいと思ひます。

さて、最後に、もう一度歌を詠む際の心の姿勢についてお話しておきませう。私が強調したいことは、とにかく歌を創りましたといふやうな程度のもではなくて、真実の思ひを詠み上げるといふ気持で取り組んで戴きたいといふことです。さうした気持で取り組めば、本当に自分の至らなさがわかってくる。そして、自分はまだまだだといふことがわかれば、素直な気持にたち帰ることが出来る。すると、大学とか学年、男女の別を超えて、一人の国民として、一信海——一つのまごころの世界——につながる道が開けてくると思ふのです。短歌創作が信行の一つであるといはれるのも、かうした理由によるのです。要領の良い、スマートな歌を詠まうなどといふ考へは一切捨てて、ゴツゴツした、荒削りの表現でも良いから、飾らない歌を詠んで戴きたい。それが真実の思ひを詠んだのならば、必ずや人の心を打つでせう。そこで初めて人の心といふものがどういふものが少しわかってくる筈です。真実の思ひを伝える言葉の威力を、実感として、自分自身の体で感じとれるやう、良い歌を味はったり、創作したりして戴きたいと思ひます。

天皇のお歌と日本の国から

—八月十五日を中心に—

福岡県立修猷館高校教諭

小 柳 陽太郎



残雪と噴煙

戦前は悪、戦後は善？

日本降伏の条件

終戦の日

終戦の折の陛下の御製

「新日本建設に関する詔書」

天皇の御歌——天皇政治の本質

戦前は悪・戦後は善？

最近特に感じますことは現代の日本人には「日本の国がら」といふものが本當にわからなくなつてしまつてゐることです。その原因はいふまでもなく敗戦によるものでせうが、日本といふ国の中に戦前の世界と戦後の世界と二つのものが、統一を与へられないままに同居してゐる、さう言つてもいいやうな状況が終戦後三十数年の間つゞいて現在に至つてゐます。そのため戦前と戦後を一貫して流れるもの、それは必ずあるはずですが、それが全く見えなくなつてしまつた。そのため「国がら」といふものが人々の意識からすっかり遠ざかつてしまつたのでせう。

戦前と戦後、人々はその二つをはつきりわけて考へる、しかも戦前は悪、戦後は善、さういふはつきりと明暗をわけた考へ方は、例へば山田先生が第一目に引用された日教組の倫理綱領などに最も明らかにうかゞはれますが、ここではその典型的な例として、日高六郎氏の「戦後思想の出發」(筑摩書房「戦後日本思想大系」)といふ文の一節を読んでみませう。

「そのころ(戦後しばらくのころ)から、△歴史の必然性▽という言葉が多くの人になじまれるようになる。資本主義社会は恐慌と戦争をまねきよせ、それは崩壊し、やがて社会主義社

会に席をゆずる。それが歴史の必然性である。そして八月十五日は、その法則が一挙に実現した瞬間であった」

人間の意志とはかゝはりなく、歴史そのものももってゐる論理、それがあらはな形でこの世に登場して、否応なしにその力を見せつけてくれたすばらしい日、それが八月十五日であった。日高氏はさういふのです。だが、その素晴らしい歴史の姿を見ることの出来た人は獄中にあった共産黨員か、戦時下の苦しい時代を耐へてきた一部のインテリ達だけだった。国民の大多数はそれが見えなかった。

「こうして敗戦直後の日本における精神の構図は、一方に△歴史の必然性▽の『見える人たち』の少数の一群があり、他方に東久邇首相をふくめ、いわゆる△虚脱▽に落ちいった民衆をふくめ、八月十五日の意味が戦後二ヶ月たつてもほとんど『見えない人たち』が大量に存在していたという形になる。この△認識▽と△虚脱▽とのあざやかな対照は、戦後日本思想の出発点の特徴であった。」

戦前は悪、戦後は善、それはその時代が、人間の意志をこえた「歴史の必然性」にめざめた時代であったか否かによってきまるのだ。「歴史の必然性」に目ざめ、それに身を委ねた戦後の時代が「悪」であらう筈はない。問題は戦前と戦後のいづれが正しいかではなく、あきらかに「善」である戦後に目ざめるか否か、それが問はれてゐるのだ——。日高氏の論法はまことに明快で



すが、その考へ方の前提には大変な独断があることは、一寸考へれば誰にもわかることとせう。しかし人々は誰もそれを問題にしようとはせず、むしろそれを当然の常識のやうにうけとめてしまつてきたのです。戦後になつてすばらしい時代が来た。この平和と民主主義を高くかゝげた時代が悪からうはずはない。そのすばらしい歴史の進歩、それは万人の認めるところであつて、それを疑ひの目をもつて見ることすらすでに罪悪ではないか。戦後を軽視して、戦前を賞讃するやうな態度は歴史の何たるかを知らざるものとして直ちに糾弾されなければならぬ――。

日高氏と同工異曲のこのやうな考へは現代の教育界、言論界一般に疑ふべからざるものとして定着してゐるやうです。

ではなぜこのやうになつてしまったのか、それにはさまざまの要因がからみ合つてゐると思ひます

が、その一つに、変化してゆく時代の相違点にばかり心を奪はれ、時代を貫いて流れてゐるものをおろそかにするといふ、歴史に接する態度の根本的な誤りがこのやうな結果を招いたと思ふのです。戦後を強調したい人々は戦前と戦後の断絶を声大にして叫びます。勿論戦前と戦後の違ひは大きい。しかしそれを簡単に「断絶」といふ言葉で呼ぶのは軽率ではないか。国といふのが一つの生命体である以上、断絶といふ言葉は比喩として用ひるのはかまひませんが、文字通り断絶が行はれてしまへばいふまでもなく国は国としての体をなさなくなる。だが国が国として生きてゐる以上、そこには一貫して流れてゐるものがある筈だ。その一貫したものの、生命の中核たるべきものは何か、そこに改めて心をとゞめなければいけないと思ふのです。けふはその問題を、八月十五日を中心にした文献をたどりながら皆さまと一緒に考へてみたいと思ひます。

日本降伏の条件

まづ、この問題を考へる大切な鍵として、日本は八月十五日に無条件降伏をしたと一般に言はれてをりますが果してさうか、その問題を最初にとりあげてみたいと思ひます。無条件の降伏であれば、そこで戦前と戦後の断絶といふことがあり得るかもしれない、しかし事實はさうで

はなかった。日本の降伏はあきらかに「条件付きの降伏」だったので。八月十日、日本国政府はポツダム宣言を受諾したのですが、その際政府から出された回答書の中には「天皇の国家統治の大権を変更するといふ要求をふくんでゐないことを了解して、帝國政府はこれを受諾する」といふ重要な一節がふくまれてゐたのです。それに対して連合国側は八月十三日回答を寄せるのですが「その通り」といふ明確な返答はしなかった。しかしその回答の第四項にある「日本国政府の最終的なたちは、ポツダム宣言にしたがひ、日本国民の自由に表明する意志によつて決定される」といふ文面からして、連合国側はあからさまではないにしても、日本国政府の要求を呑んだと判断、遂に終戦を迎へるのです。勿論これに対して、陸軍側はさういふ判断は甘い、もっと明確な返答を得るまでは降伏はできないといふ強硬な態度をもつて反対にまはつたことはよく知られてゐますし、その間にさまざまの曲折はあつたにせよ、日本国政府は最終的にはその条件は了解されたものとして降伏した。すなはち明らかに条件付きで降伏にふみきつたのです。

一方連合国の側から見ても、日本を無条件降伏に追ひこむ意志はなかつたし、その力もなかつた。日本が提示してきた条件を頭ごなしに否定したとすればどうなるか、日本はそれこそ文字通り最後の一兵まで戦ふであらう。もしさうなれば、連合国側もさらに膨大な物量と兵員を犠牲にしなければならぬ。たしかに彼らも二年前のカイロ宣言では「日本国の無条件降伏を

もたらずのに必要な云々」といふ言葉を用ひてをり、その時点では日本に無条件降伏を要求する肚だったのでせうが、ポツダム宣言では明らかに態度を変へてゐる。しかも「降伏」といふ言葉すら避けてその第一条には「日本国に対して、こんどの戦争を終結する機会を与へる」といふ実に遠まわりの表現をしてゐるのです。

もつともポツダム宣言の中で「無条件降伏といふ言葉を用ひてゐるところが一ヶ所ある。それは「日本国政府がたゞちに日本国軍隊の無条件降伏を宣言し……」と述べてゐる個所です。すなはち連合国が無条件降伏を要求したのは日本国軍隊であり、日本国政府ではなかった。しかも政府に対しては降伏といふ言葉さへ遠慮勝ちに使つたといふ事実を心をとめていたゞきたいのです。

日本民族は文字通り死をもつて日本の国がらを守らうとしてゐる、その氣迫に押されたといふのか、ポツダム宣言では遂にその点にふれようとはしなかつたし、先に述べた日本国政府の回答に対する返書にも、天皇の地位についての明らかな断定は避けた。その連合国側の心の配り方の中に、無条件降伏要求とは全く違った動きを正確に読みとらなければならぬ。そのきびしい外交のやりとりの中に、天皇を中心とした国がらが守られてゆく厳肅な歴史の姿があるのです。その歴史のいはゞ「急所」とでもいふべきところを外して、日本は無条件降伏をしたのだといふ粗雑なとらへ方に甘んじてしまふなら、歴史の姿は何一つ見えてこないし、さう

いふ見方は、もしも天皇を否定するなら最後の一兵まで戦はうといふ決意をかためてゐた当時の国民に対する、冒瀆であるといはなければなりません。当時の人々は本当に老いも若きも、男も女も、さういふ気持で生きてゐた。さういふ気持は今の時代の人々には理解しにくいかも知れませんが、いかに理解しにくいことであらうと、その時代の人の心に迫って、そのおもひを蘇らせることが歴史の第一歩であることはいふまでもありません。さういふ意味からしても「無条件降伏」とか「断絶」とかいふ言葉で、終戦前後の息づまるやうなドラマを概括しないでいたゞきたいのです。

終戦の日

かうしていよいよ終戦の日を迎へるのですが、その直前八月十四日、最後の御前会議のあと、最後までポツダム宣言を受諾すべきではないと強硬に主張してゐた阿南陸相が、お立ちになる陛下にとりすがつて慟哭するのです。その時、陛下はやさしく

「阿南、阿南、お前の気持はよくわかつてゐる。しかし私には国体を護れる自信がある」とおっしゃつたと伝へられてゐます。これは当時の侍従長藤田尚徳氏の伝へるところですが、それ迄反対の意見を主張しつゞけてゐた陸相が、事終つた今は陛下にとりすがるやうにし

て慟哭する。それに対して陛下がやさしく言葉をおかけになる、その情況をお慰みすれば、日本における君臣のつながりの最も感動的な姿に胸迫るおもひがいたしますが、さらにここで仰せられた「私には国体を護る自信がある」といふ言葉には、終戦の際のすべての歴史の重みがこめられてゐると思はれてならないのです。ここでお述べになつた国体とは、憲法がどうかとかといふ以前の、天皇と国民が心を一つにして生きてゆく世界、国民のすべてが天皇のお心を常にお慰み申し上げながら、そして天皇はいつも国民のことを思つていたゞきながら、生きてゆく世界、さういふ世界だけは、今後いかに日本が占領下のきびしい時代を迎へようとも絶対に護ることが出来る。その君臣の情以外に日本といふ国はないのだし、その情さへ守りぬくならば日本は絶対に滅びることはない——終戦に際しての陛下のお心がこの一語に凝縮されてゐると思ふのです。

阿南陸相はその翌朝八月十五日未明、「神洲の不滅を信じつゝ一死以て大罪を謝し奉る」といふ遺書を残し、最後に

大君の深き恵に会ひし身は言ひのこすべき片言もなし

といふ一首の歌を書きとゞめて割腹、その生涯を閉ぢるのですが、「神洲の不滅を信じつゝ」と書きとゞめた時、阿南陸相の心には陛下の最後の御言葉が必ずや強く響きわたつてゐたに違ひありません。

かくて終戦の詔書が發布されるのですが、その最後のところの「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ
 忠良ナル爾臣民ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ」といふ一節には、「私には国体を護れる自信
 がある」といふ言葉がそのままに映し出されてゐるやうに思はれてならないのです。この終
 戦の詔勅は次のことばで終つてゐます。

「宜シク挙国一家、子孫相伝へ、確ク神州ノ不滅ヲ信シ、任重クシテ道遠キヲ念ヒ、総力ヲ
 将来ノ建設ニ傾ケ、道義ヲ篤クシ、志操ヲ鞏クシ、誓ツテ国体ノ精華ヲ発揚シ、世界ノ進運ニ
 後レサランコトヲ期スヘシ。爾臣民其レ克ク朕カ朕力意ヲ体セヨ」

終戦の詔勅——それは戦後の日本の出版を記念する一番大切な文献です。戦後はこの詔勅か
 らはじまった。ところが現在は誰一人この詔勅を読まうとはしない。それは最初から申し上げ
 てゐるやうに戦前は悪、戦後は善といふ固定観念が出来上つてゐるため、人々は戦前の考へ方、
 戦前に属する一切のものに目をむけようとはしないからでせう。そんなものは読まなくてもわ
 かつてゐる。さう考へてしまふのです。しかしこのやうな態度はいやしくも歴史を学ぶ者のと
 るべき態度ではありません。歴史を学ぶためにはそのやうな考への枠組みをはなれ、虚心に
 その文献の意味するところに心を傾けなければなりません。例へばこの詔勅にある「神州ノ不滅
 ヲ信ジ」とか「国体ノ精華ヲ発揚シ」とかいふ言葉を、かねて自分の中に用意してゐるイデオ
 ロギッシュな解釈で置きかへてしまふやうなことはやめて、この言葉の中にどのやうなおもひ

がこめられてゐるか、それを具体的に解釈し、憶念する。さういふことのつみ重ねの中に、歴史のあるがまゝの姿を読みとつてゆかなければならないのです。さういふ努力なしに、「戦前は悪」といふ枠組みの中にこの詔勅を入れてしまへば歴史は何一つ見えてこないし、歴史に対するさういふ接し方を続けてゆけば、たとへ万巻の書物を読まうとも、決して歴史は自らの姿を表はさうとはしないのです。

このやうなことは当然次の文にもあてはまります。これは八月十六日、終戦の詔勅が發布された翌日、朝日新聞に掲載された論説の一節です。

「戦において敗れたりとはいへ、そして見えざる鉄鎖がひし／＼と迫りつゝあるとはいへ、いやしくもわれに自由なる魂ある以上、いかなる敵も我々を奴隷とすることはできないのだ。国体を護持し得るか否かは、片々たる敵の保障にかゝるのではなく、実に日本国民の魂の持ち方如何にかゝる。……日本国民が果していつの日にか再生し得るかは、一に日本国民の魂がこの試験によつていかに鍛へられるかによつて決まるのである。」

かういふ文章も例へば日高六郎氏流に言へば、「歴史の見えない人たち」のひかれ者の小唄としか映らないかもしれない。現代の人々はこのやうな文献には見向きもしないし、このやうな数々の言葉は歴史の底深く沈んだまゝになつてゐるのです。しかしさういふ枠組みを外して、改めてこの一文を見れば、そこにはいかに重大な予見がひそんでゐるか、読むほどに心うた

れるものがあるのです。まさしくこの文章の通り、戦後「見えざる鉄鎖」が「ひし／＼と迫ってきた。」しかもその鉄鎖は戦後三十三年を経た現在なほ私たちの心を縛り上げたまゝではないか。さらに「いやしくもわれに自由なる魂ある以上、いかなる敵も我々を奴隷とすることはできない」と断言してゐますが、現代を生きる我々日本人には、果してかゝる「自由なる魂」があるかどうか。遺憾ながら、戦後三十三年、経済的にこそ復興したとはいへ、精神的には全く自由を失ひ、占領軍のいふがまゝにその奴隷になり下ってしまつてゐるではないか。終戦の日、当時の人々は占領軍の見えざる鉄鎖が人々の心を縛り上げることを当然憂慮した。しかし日本人としての自由な魂がある以上、まさかその鉄鎖の中に屈し去るとは思はなかつた。何時かはその鉄鎖を断ち切る日があることを信じてゐたのです。それは単に一新聞の論説だけではなかつた。あの日の日本人はすべてそのことを心に誓ひ、そして信じたのです。それを思へば私たちは本当に胸につきささるやうな痛みを感じないではをられません。終戦の歴史をふりかへるときの貴重な文献として、この一文を是非皆さまの心にとゞめていたゞきたいと思ふです。

終戦の折の御製

次に終戦の折、陛下がおよみになった三首の御歌についてふれさせていただきます。この御歌は陛下のお側に長い間侍従次長としてお仕へになった木下道雄といふ方の「宮中見聞録」といふ御著書の中に記録されてをります。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとめけりたふれゆく民をおもひて

国がらをたゞ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

この三首の御歌を拝誦してゆけば、日本の歴史未曾有の難関にあたられた陛下の沈痛なみところが切々と伝はってまゐります。歌の調べからしても第一首は五七五七七となるべきところを、五八六七九といふ非常な字あまりのお歌になってゐる。この字あまりによつて定型の中にどうしても収めきれない、あふれるやうなおもひが表現されてゐると思はれます。さらに一首目の下の句は倒置法になってをり、その最後におかれた「身はいかならむとも」といふお言葉の中に、万感迫る捨身のおもひをこめていらつしやるのが偲ばれます。その「身はいかならむとも」といふお言葉を、息もつがないやうに直ちに繰り返して、「身はいかになるとも」といふお言葉で二首目ははじまります。かういふお歌は連作と申しますが、一首一首を単独に味

はふのではなく、二首を通じて高鳴る作者のおもひを、その波うつやうなお言葉のまゝにお偲びすべきでせう。特にこの二首目では下の句の「たぐたふれゆくたみをおもひて」といふ「た」の音の連続によって表現されてゐる、切迫した陛下の御心が激しく私たちの心をうつつです。

最後のお歌にある「国がら」といふお言葉には先程申し上げました「私には国体を護れる自信がある」といふ阿南陸相に対するお言葉とか、終戦の詔書の「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ」といふお言葉などが直接にひびきあつてゐることはいふまでもありますまい。なほこの合宿で一昨日御講義いただいた夜久正雄先生は、その御著書「歌人今上天皇」の中で、この御歌の「国がら」とは、「最初の二首でお詠みになつたお心を、天皇さまがつらぬかれたこと、それこそが三首目の歌に詠まれた『国がら』である」と述べられ、さらに「天皇さまは『国がら』を守りぬかれたのである。この天皇さまのお心に感応して、天皇さまのお心にしたがふことが、国民の側からの『国がら』である。天皇さまが国民のうへをお思ひくださるお心をあふいで感奮する、その心の中に、日本の国の国がらはあるのである」と記してをられます。日本の国がらとは、かくかくしかじかのものである。それを護るのだといふやうなものではありませんまい。本当に夜久先生がおっしゃるやうに国がらは天皇さまのお心にすべく感応する、その生きた心の中にあるのです。

終戦の折の天皇のお心、それはこの三首の御歌にあますところなく表現されてゐますが、このお歌の「身はいかならむとも」といふお言葉にこもるお心が、外ならぬ敵将マッカーサーの心をゆり動かした、そのエピソードは皆さま御存知とは思ひますが、一言ふれておきませう。

陛下がマッカーサーのところにお出ましになったのが九月二十七日、終戦より四十日ほど経ったころです。マッカーサーは天皇がお出でになるとは言っても命乞ひに來られると思つたのか、我が身の安全を保障してくれとおっしゃると思つたのか、傲慢な態度で出迎へさへしなかつたさうです。ところが陛下は「私は日本の戦争遂行に伴ふいかなることにも全責任をとる、自分の運命について貴下の判断がどのやうなものであらうとそれは自分には問題ではない。私は全責任を負ひます」とおっしゃつたのです。これを聞いたマッカーサーは今までの傲慢な態度を捨てて襟を正すのです。その時のことをマッカーサーは自らの回想録に次のやうに書きとどめてゐます。

「私は大きい感動にゆさぶられた。死をもともなうほどの責任、それも私の知り尽している諸事実に照らして明らかに天皇に帰すべきではない責任を引受けようとする」

マッカーサーは天皇に責任があるとは思つてゐない、それなのに天皇は死を賭して、その責任を自分で負はうとしてをられるといふのです。

「この勇氣に満ちた態度は、私の骨の髄までもゆり動かした。私はその瞬間、私の前にいる

天皇が、個人の資格においても、日本の最高の紳士であることを感じとったのである。」

「その勇氣に満ちた態度は、私の骨の髄までもゆり動かしした」といふ言葉に偽りはありませんまい。真心といふものがいかに人の心を動かすものか、陛下は身を以てそれをお示しになったし「身はいかになるとも」といふ終戦の日のおうたにおよみになったみ言葉をさながらに実践されたと思ふのです、

「新日本建設に関する詔書」

かくして年が明けて昭和二十一年元旦、天皇は「新日本建設に関する詔書」をお下しになりました。これが一般に「天皇の人間宣言」といはれる詔書です。天皇はそれまで自分は神であると言ってきたが、ここでそれを打ち消して人間であることを宣言された、人々はさう申します。

どの教科書にも、どの年表にもさう書いてある。だから誰もその内容を読まうともしないし、さういふことが書いてあるのだらうといふ程度にうけとめてしまつてゐます。ところが実際に読んでみると、「人間宣言」などといふ言葉では到底概括出来ない、実に大切な内容が述べられてゐることに気付くのです。まづその冒頭の一文は次の通りです。

「茲ニ新年ヲ迎フ、顧ミレバ明治天皇、明治ノ初、国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク

一、広ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ」

以下五ヶ条の御誓文の全文が記されて、そのあとに

「敕旨公明正大、又何ヲカ加ヘン、朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス」

といふ言葉で結ばれてゐるのです。昨年八月那須の御用邸で記者会見をなさった陛下がこの問題におふれになり、この詔書の冒頭に五ヶ条の御誓文を置いたのは御自分のお考へであったことを明らかにさいましたが、このことのもつ重大な意義はどんなに強調してもし足りないほど大切なことだと思ふのです。そのあと、さらにお言葉は続くのですが、特に先程のおことばの最後の「又何ヲカ加ヘン」といふ一節は重大です。これ以上つけ加へることはない、といふことは、新日本建設の原理はすべて五ヶ条の御誓文に述べつくされてゐるといふことでせう。これから占領下の苦しい毎日が続くに違ひない、しかしいかなる時代が訪れようとも明治天皇がお定めになったこの道以外に日本人の生きる道が一体どこにあらう。「朕ハ誓ヲ新ニシテ」とおっしゃる「誓」とはいふまでもなく「御誓文」をうけつがうとなさる「誓」です。その明治天皇の御誓ひをうけつぎ、さらに新たな決意でもって「国運ヲ開」かうと思ふ、陛下はそのお言葉の中になみ／＼ならぬ決意をお示しになつてゐるのです。

このあとの詔書については、その原案は当時の幣原首相が英文で起草したと伝へられてゐますが、或ひはさうかもしれない。その点占領下といふ全く特殊な状況のもとで発布された詔書だけに一般の御詔勅とは異つたものがあると思はれますが、たゞこの冒頭だけは陛下が直接に国民にお示しになつたお言葉であるといふことを銘記しなければなりません。さう考へれば、これ以後戦歿者の慰霊祭などにおける陛下の短いお言葉などはございますが、このやうな形で日本のあるべき姿をお示しになつた御言葉はこれが最後ではないかと思はれるのです。さういふ意味からも、この詔書の冒頭の一節は日本の歴史にとって実に重大ですし、さう考へてゆけばこの詔書は、正確には「五箇条御誓文再確認の詔書」と言ふべきものかと思はれるのです。ところが人々はそのことをほとんど問題にしようとはしない、そしてこの詔書を「天皇の間宣言」といふ言葉で呼ぶだけです。それでは詔書のあとの方でさういふ言葉が出てくるかといへばそれも実は違ふのです。たしかにそれらしい意味の表現はある。しかしそんなあからさまな人間宣言などといふ言葉は、どこを探しても記されてゐないのです。では一体何と書かれてゐるか、その部分は次の通りです。

「朕ハ爾等国民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚キユウセキ（よろこびとかなしみ）ヲ別タント欲ス。朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯チユウタイハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、単ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神アキツミカミトシ、且日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セ

ル民族ニシテ延^ヒテ世界ヲ支配スヘキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニ非ズ」

詳しく申し上げる時間はございませんが、この文章をたどっていただければ、ここで陛下がおっしゃってゐることは自分と国民とのつながりは遠い昔から一貫して「相互の信頼と敬愛」といふ具体的な体験によつて結ばれてゐるのであつて、神話、伝説や架空につくり上げられた或種の觀念に基づくものではないといふことでせう。その觀念の説明の中に「天皇ヲ以テ現御神トシ」といふ一節が含まれてをり、それが問題の個所なのですが、これにしても私はこの「現御神」は本来の用ひ方ではなく、西洋流のゴッドといふ意味に使はれてゐるので、「過去には天皇をもつて全智全能のゴッドのごときものといふ誤つた觀念をふりかざす者がゐるたが、さういふ考へによつて天皇と国民との關係が結ばれてきたのではない」といふ至極当り前なことが述べられてゐるにすぎないのではないかと思ふのです。もっともこの「現御神」の解釈次第では相当大きな問題が残るとも考へられますが、それにしても、およそ「天皇の人間宣言」などといふ言葉でセンセイショナルに呼ぶべきことではないといふことは誰しも御理解いただけると思ふのです。歴史はえてして勝手な恣意によつてゆがめられてゆくのですが、先の五ヶ条の御誓文についての無関心といひ、この人間宣言といふ軽薄な表現といひ、この詔書に関するうけとめ方ほどそれが如実に示されてゐる例は他にないのではないでせうか。

さらにこの昭和二十一年、新年の御歌会始におよみになったのが次のお歌ですが、このお歌

を拝見しても、五箇条の御誓文と詔書の冒頭におのべになった、たゞならぬ陛下のお心が偲ばれるのです。

松上雪

ふりつもるみ雪に耐へていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

天皇の御歌 — 天皇政治の本質

あと残された時間で、その後にお詠みになった陛下のお歌を数首だけ御紹介申し上げませう。次のお歌は昭和二十一年二月陛下は戦災地の視察にお出かけになるのですが、その折のお歌です。

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちてきぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

一首目、「いでたちてきぬ」といふさりげない言葉で歌が終ってゐますが、実際自分で歌を

よんでみますと、このやうな止め方は実に難しい。何か仏様が軽やかにスツと立っていらっしやるやうな、えもいはれぬお姿がこの結句の中に偲ばれます。

普通の国なら敗戦の国の国王は宮殿の扉を固く閉して身の危険を避けるのが通例でせう。だが陛下は全くそれとは逆に、国民のたゞ中におはいりになって国民の営みを励まされるのです。戦後の日本の復興のめざましさの原因は数々あるでせうが、その中の一番大きなものとして、私は躊躇なく、陛下の御巡幸をあげたいと思ふ。この御巡幸がいかに国民の心を鼓舞したか、それは逆に御巡幸がなく、天皇が宮中奥深くおはいりになって国民の前に姿をお見せにならないかといふ場合を想像すれば思ひ半ばにすぎると思ふのです。この時の状況を甘露寺侍従長は「背広の天皇」といふ著書の中で次のやうに書いてをられます。

「千葉では列車を宿舎代りになさったこともあった。大阪では熱狂して押し寄せた群集にお足を何度もお踏まれになったことさへあった。それもこれも意に介されなかつた。初めに都内巡幸からお帰りになったとき、陛下のおぐしは乱れ、お服の衿もとから肩にかけては土埃がうっすらと積つてゐた。お出迎へになつた皇后さまが思はずそれをおっしゃると、陛下は

『もうこんな時代ですよ』

とうれしさうにおっしゃつてをられた。赤旗のうち振られる中にも、ズン／＼入つておいでになつた。しかし、その赤旗もいつしか下げられ、インターナショナルの歌声も次第に君が代に

変り、ついで怒濤のやうな大斉唱になってしまった。」

この怒濤のやうな君が代の大斉唱の中から、戦後の日本の復興が始まったのです。

次は福岡の和白といふところにある孤児を収容する施設、「青松園」でおよみになった歌、「よるべなき」とは戦争に両親を失ったといふ意味でせう。

よるべなき幼子どももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木このまに

次は香川県の大島療養所といふ癩患者を収容した施設をお訪ねになった時の歌です。

あな悲し病忘れて旗をふる人の心のいかにも思へば

幼児のたのしげな声がすぐそばに聞えてくるやうな、そしてまた癩といふ不治の病に苦しむ人々の悲しみが切々と伝はってくるやうな、かういふお歌を拝誦してゐると「朕、常ニ爾臣民ト共ニアリ」といふ最終戦の詔書の一節が、文字通り生きた言葉として迫ってくるのをおぼえます。

引揚者に

外国とつくににつらさしのびて帰りこし人をむかへむまごころをもて
国民くにたみとともに心をいためつゝ帰りこぬ人をたゞ待ちに待つ

ともしび

港まつり光りかゞやく夜の舟にこたへてわれもともしびをふる

これらのお歌に見える天皇と国民との心のふれあひ、そこには世上一般に言はれる支配者と被支配者との関係とは全く異なる、肉親の愛情に通ふやうな切実さがしのばれます。

天皇制といふことについてもいろいろ議論がある。しかしこれも理論で片付くことではなく、このやうな天皇と国民との心のむすびつきが厳然として存在してゐる、そのむすびつきの上に営まれる政治体制、それが天皇制であるといふ以外に説明のしようがないのです。しかもその心のありやうは、君臣の情は父子の情と同じだといふ概念付説明ではだめなので、やはりこのやうなお歌をよまなければわからないのです。このお歌に示されてゐるものは概念ではない、明らかな精神的事実です。その事実にふれなければ「天皇制」といふ政治形態のもつ意味は理解出来ないのです。

昭和四十六年、陛下が七十歳におなりになったときおよみになった歌が三首ございます。

ななそち

七十の祝をうけてかへりみればたゞおもはゆく思ほゆるのみ

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはたゞに国のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち

最後のお歌の「いまはななそち」の「いまは」といふお言葉にこめられたおもひを偲べば胸迫るものがございます。日本の歴史始つて以来の激動波瀾の七十年、その間陛下はたゞひたすら国民とよろこびとかなしみを共にしながら、国の平和を祈りつゞけてこられたのです。だが一体国民は陛下の喜びと悲しみを自分のものとして生きてきただらうか。

天皇の問題をどう考へたらいいか、さういふ議論は数多く見られます。天皇観はどうあるべきか、さういふことについて書かれた本も沢山ある。しかし逆に天皇が国民をどう見てをられるか、そのことについては誰も考へようとはしない。これは一体どういふことでせうか。

しかし人々がそのことにふれようとふれまいと、天皇陛下は常にこれほどまでに心をくだいて国民のことを思つて下さつてゐるのです。その陛下のみ心、それが疑ひやうのない現実であ

る限り、今私たちに問はれてゐるもの、それはその陛下のみ心にどのやうにお応へすることが出来るか、さういふ人間としての情感のあり方そのものではないでせうか。本居宣長は「ものゝあはれ論」の中で「感ずべき時にあたりて、感ずべき心を知りて感ずるをものゝあはれを知る」といふ」と述べてゐますが、国民を思はれる天皇の切実なお心を私たち自身がどのやうにうけとめて行けばいいか、それこそが日本人として生きてゆく私達が、いま考へるべき一番大切なポイントだと思はれてなりません。

戦前は悪、戦後は善、従つていはゞ戦前の価値体系の中に位置するものは天皇の存在であらうと何であらうと最初から疑ひの目をもつて接するといふやうな固定観念がいかにつまらないことなのか、さういふ観念を今こそ大きな力で洗い流してしまはなければならぬ。さうすれば古来から日本民族が大切にしてきた豊かな生命がそれこそ堰を切ったやうにあふれてくるはずです。さういふ民族の生命を目に見えない扉で締め切ったまゝで、今の世の中には生き甲斐があるとかないと議論をしても一体何の意味があるか、その扉が閉ざされてゐる間は我々には絶対に生きてゆく力はめぐまれないのです。歴史のないところに本当の力がめぐまられるはずはないのですから。しかも戦前と戦後といふやうに分裂した人格の中にどうして喜びがあるか。その扉を取り除いたときにはじめて溢れるやうな力が私たちの心の中にみなぎってくる、日本全体にさうした力が蘇ってくるやうな道をどうにかして切り開かなければいけない、その

ためには八月十五日を中心にした歴史のあゆみを、
一切の観念にとらはれることなく、もう一
度自分の目でたしかめる以外に道はないのです。

「しきしまのみち」といふ

学問の任務

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授

小田村 寅二郎



大観峰より

学問に対する姿勢

概念的思考の誤り

「しきしまのみち」とは何か

恐るべき学問の類廃

——東大、小林教授の所論



学問に対する姿勢

今日のお話にはいっていきます前に、この合宿に対する心構へ、学問に対する基本的な姿勢について若干お話しておきます。このことは昨年の合宿室でも申し上げましたが、皆さんはこれまで長い学生生活を通じて、営々として勉学を積み重ねてこられたし、それにふさわしい知識を身につけてをられることとせう。しかしそのやうな知的な認識の前には、当然あなたがた一人々々の生命があり、「こゝろ」がある。その「こゝろ」の上に、知的な認識が積み重ねられてきたといふことを考へていただきたいのです。そしてこの合宿教室で壇に立たれた先生方は、実はその皆さんの「こゝろ」にむかって声をかけてこられたのです。ところが皆さんはその先生

方がなげかけられた問題を、はたして自分たちの「こゝろ」で受けとっていたかどうか。さうではなく単なる知識といふ層でうけとめて、それに賛成したり、反撥したりしてきたのではないか、そのことが気にかゝるのです。例へて言ひますと、先生方は、いま皆さんが着てゐる着物はあなたの身体にあつてゐませんよと言つてをられるのに、着物のことを批判されると、何か自分自身が馬鹿にされたやうに感じて、そこに「構へ」をつくつてしまつてゐるのではなからうか。もしさうであれば本当につまらないことなので、このやうな「構へ」は一刻も早くとり除いていただきたいと思ふのです。

同じやうなことです。自分はかねがねこの合宿教室で言はれてゐる趣旨と同じやうな活動をしてゐる。だからここで先生方が言はれることはすべてよくわかるといふうけとめ方をする諸君がとき／＼をられます。しかし、これも上に着た着物だけを問題にして、それだけで人々の考へ方を分類して安心してしまふといふ点で、前の人とよく似た発想だと言へませう。たしかに一見、考へが同じやうに見えるかもしれない。しかし実際はそれから先が学問であり、それから先が人間の本当の値打ちなのです。（この点については、『日本への回帰』第十三集の一三二頁以下をよく読んでいただきたいと思ひます）

それと関連しますが、この合宿が世の中で言ふイデオロギーを重視するやうな合宿ではないといふこと、例へば右寄りならいいので左寄りはだめだといふやうなイデオロギー的な基準で

區別してゆく、さういふレベルの低い所を問題にするやうな合宿ではないといふことを知っていたゞきたいのです。

過日、小林秀雄先生と御一緒にお話をした時に伺ったことですが、先生は、「自分は学生時代から今日に至るまで、イデオロギーといふものとは全く関係がないんですよ」と繰り返しくお話になりました。そのお話を聞きながら、柔軟に心を働かせる態度で生きてゐる時には、イデオロギーをふりかざす余裕など全くないのだ。そのやうな固定した考へ方に自分の精神を委ねたり、自分の進んでゐる方向はこれでいいのだといふやうに、自分自身に安心する暇など全くないはずだ。先生はそれほど深くくものを考へ、ものごとに取り組んでこられた、それが小林先生といふ方なのだとしみじみ感じたことでした。

このことは単にこの合宿だけのことではなく、今後日本の国を守らうとする志をもった人々の輪が広がっていかなければならない時に、お互ひに注意し合ひたい大切な点だといふ意味で、最初にお話いたしました。

概念的思考の誤り

午前中の御話の中で小柳先生は「戦前は駄目、戦後はいいのだ」といふ簡単な割り振りの前

提が立てられてしまつて、そのレールの上で、三十年の間日本の言論界、思想界は歩んできた、それはまことにつまらないことだと指摘されました。戦前と戦後といふ人為的な区分けなど何の役にも立たない、戦前もなければ戦後もない、その間を一貫して生きてきた、日本人としての、いはば「人格」があるはずだ。その「人格」を信じ、それを大切にすることからすべての思想問題はスタートしなければならぬ。さういうことをおっしゃいましたが、このやうに生きた人間から出発しようとはしないで、勝手につくられた概念からものごとを考へようとするのが、戦後の思想傾向の大きな特徴だと思ふのです。

たとへば「戦争」と「平和」といふ二つの概念をならべてそのどちらがいいかと言ふのです。さう聞かれれば誰だって「平和」がいいといふにきまつてゐます。しかし一つの国が生きてゆく上で、戦争の経験をもたないといふことは全くあり得ないことです。そして又戦争の経験をもつてゐるからといって、平和的な精神が欠如してゐるなどは絶対に言へないことである。例へば戦争が始まらうとする時には、さまざまの討議が行はれる、敵が攻めてくる、それをうけて立つか否かといふ態度の決定を迫られる、その時には、戦争か平和かそのいづれを選択するかなどといふことなど全く問題にならない。どうしたら勝てるのか、どうしたら生きのびることができるのか、その具体的な手だてだけが問題になる、それが現実の人間社会のありのまゝの姿なのです。

また「差別」と「平等」といふ言葉があります。この場合も、誰だって差別が悪い、平等がいいといふにきまっております。だからそれは差別的行為だとか、差別的発言だとか言つて相手を責め、相手を悪玉に仕立てあげる、ここでもまた形容詞と形容詞の勝負になるだけで実態はどこかに行つてしまつてゐるのが常なのです。例へば長い日本の歴史の中で、好ましくない社会慣習が行はれてきたとすれば、それをどう改めて行くかといふことを互ひに話し合ひ、対策を立ててゆくのは勿論大切でせう。しかしこれまで人間社会を動かしてきた人々をはじめから善玉、悪玉にわけてしまへば、人間のありのまゝの姿は見失はれてしまふ。善玉悪玉の戦ひといふ修羅場だけしか人々の目には映らないやうになる。すべてのものをこのやうに見てきたのが戦後思想の大きな特色だと言つていいと思ひます。

同じことは戦前のすべての戦争に侵略戦争といふレッテルを貼りつけることにもうかがはれます。先ほど松本唯一先生も、どうして日露戦争を侵略戦争と言へるだらうかと痛憤をこめておっしゃいましたが、例へば昨日慰霊祭の折に私が拝誦させていたゞきました明治三十七年、日露戦争の折に、明治天皇が「述懐」と題しておよみになつた歌、

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな

といふ御歌一首をよんでも、そのやうな臆測がいかに大きな誤りであるかがわかると思ふのです。もし侵略のための謀議が行はれ、天皇がその中心に立つてをられたとするならどうしてこんなお歌をおよみになるでせう。朝鮮半島がもしもロシアの支配下にはいつてしまへば、日本の国土の安寧は大変脅かされる。さうならないために、ロシアの東亜侵略の意図を粉碎するために、日本は立ち上った。それが日露戦争だったのです。さらに

国をおもふみちにふたつはなかりけり軍いくさにはの場にたつもたたぬも

といふお歌もあります。この戦場に戦つてゐる人も、銃後で国を守つてゐる人も、心を一つにして祖国の将来を念じてゐる姿、そのどこに侵略戦争の姿があるでせう。

夏の夜もねざめがちにてあかしけるよのためおもふことおほくして
いくさいかなる野べにあかすらむ蚊のこゑしげくなれるこの夜を

小林秀雄先生の御言葉にもございましたが、書いたものを読む時には、それを書いた人の心の底を読む努力をつみ重ねなければならぬ、それが学問である。それは大変むづかしいこと

だし、そのためにはそれなりの修業をつまなければいけないとおっしゃいました。私も僭越ながら私なりの努力を重ねてゐるつもりですが私にはこれらの明治天皇の御歌の奥底には、どう考へても侵略戦争といふ色どりを感ずることは出来ないのです。

ついでに慰霊祭の折に拝誦した御歌を終りまで読んでおきませう。同じ年に「夢」と題しておよみになった御製三首

軍人いくさびとすすむ山路をまのあたり見しは仮寝のゆめにぞありける

いくさ人まもるところに行きたりとみしは夢にてありけるものを
さ夜ふかくゆめをさましてさらにまた軍のうへをおもひつゞけぬ

どんなにか戦場の兵士の上に心をはせてゐらっしゃるか、これらの御歌の中には誰しも、血の通ふ肉親を思ふやうな温かな情愛を感じると思ふのです。

同じ年「をりにふれたる」と題してお詠みになった御製八首

おのが身のいたでおへるもしらずしてすゝみも行くかわが軍人いくさびと
寝ざめてまづこそ思へつはものたむろの寒さいかがあらむと

くのためにたふれし人をおもひつつねたるその夜のゆめにみしかな
国のため身をかへりみぬますらををあまたえにけりこの時にして
はからずも夜をふかしけりくのためにため身をすてたりし人をかぞへて
かぎりなき世にのこさむと国のためたふれし人の名をぞとゞむる

戦のにはにたふれしますらをの魂たまはいくきをなほ守るらむ
世とともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

後で味はっていたゞきたいと思ひますが、戦争か平和かとか、侵略かさうでないかといふや
うな論理の世界、観念の世界でなく、現実そのもの、具体的な人の心そのものにふれる学問を
是非深めていたゞきたいのです。その学問の道、それが今日、題にかゝげた「しきしまのみ
ち」といふことにつながってゆくのです。では「しきしまのみち」とは何か。

「しきしまのみち」とは何か

実は明治天皇は「敷島の道」といふおことばをしばく御製の中にお詠みになってをられま
すので、そのいくつかを読んでみませう。

最初は明治三十九年の御製「道」

ひろくなり狭くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道

敷島の道、それは日本人が遠い昔から守り育ててきた和歌の道ですが、やはり時によって隆々と栄えた時もあったし、細々として僅かな命脈を保ってゐるやうな時もあった。しかしさういふ状態の中でもつひに消えることなく、神代から綿々とつゞいてきたのが、この敷島の道であつた。

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

少しでも暇があればふみわけてごらんさい。きっと歩けますよ、遠い神代の昔からそのまま今の世に伝へられた敷島の道、それは日本人であれば誰しもが歩くことが出来る道なのだ、さうおっしゃってゐるのでせう。

寄道述懐

ふむことのなかたからむ早くより神のひらきし敷島の道

「神代ながら」とか「神のひらきし」といふ言葉は、日本人の遠い祖先の時から、遠い祖先がお開きになったといふ意味にとつていいでせう。祖先を神として祭つてゐるのが日本人ですから。その御祖先がお開きになったものが、敷島の道、敷島といふのは日本の古い呼び方です。だから日本人の歩むべき道、日本人にふさわしい道、それを敷島の道と呼んできたのです。さらに日本人は誰でもうたをよむ、皆よむことが出来る、日本人にとって和歌といふのはまさしく普遍妥当性のある道なので、歌をよむこともふくめて敷島の道と呼ぶやうになつたのでせう。

皆さま御存知の通り、万葉集は地位の高い天皇様や皇室の方々から、田舎の名もない農夫たちまで、あらゆる階層の人々の歌が一つの歌集の中に集められてゐる。地位や貧富や能力などの一切の差別をとりはらつて一つの歌集を編集するといふ、私達の祖先が心の中にたゞへてゐた人間平等観といふものは、いかに見事な根底をもつてゐるか。それは本当に日本人の誇りだと思ふのです。所謂進歩的文化人や学者たちは、過去の日本人が平等の意識に目覚めなかつたとか、過去の日本は差別に満ちてゐるやうなことを盛んに口にしますが、とんでもないことな

ので、天皇から庶民までこんな豊かな同胞感で結ばれてゐる国は他に例がないと思ひます。その平等観のあかしとして遠い昔から伝へられたもの、それが和歌、しきしまの道なのです。その「早くより神のひらきし」しきしまの道であればこそ「ふむことなどかたからむ」と明治天皇はおっしゃるのです。たしかにその道は「ひろくなり」或ひは「狭くなり」さまざまの過程を経てきた。しかしそれは今に、たえることなくつゞいてゐるのです。また明治天皇は「歌」といふ題で次のやうに詠んでをられます。

まごころを限りなき世にとゞむるもやまと詞のいさをなりけり

日本語があればこそ、しかもその日本語を用ひて三十一文字に綴る和歌の道があればこそ、私達のまごころを無限の世にとゞめることができるのです。私たちのいのちをこえて、ことばは無限に生きるのです。

すなほにてををしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり

「すなほにてををしき」それが日本人が古から大切に育て守ってきた心のすがたでした。し

たがってそのところがことばとなって表はれるとき、そのすがたもまた「すなほにてをゝしい」のです。ここに日本人すべてが共感しあふことの出来る世界がある。その世界にふれることができれば、そこには神代の道も実感できるのです。

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな

「ひと筋」の道とはいふまでもなく、「神代ながらの敷島の道」でせう。その一筋の道をふんで行けば、千早振る神代の道、大昔の日本人が生きてゐた。非常に簡素で素朴で、雄々しい、そして素直な人間生活の体験を深めることが出来る。神代と今日のつながりをしみじみと味はふことが出来る、さうおっしゃってゐるのです。さらに天皇には明治四十五年、お亡くなりになる年には次のお歌があります。

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ

このお歌の前半の「開くべき道はひらきて」の個所は、進歩的文化人と自ら名乗ってゐる人も同感し、納得するかもしれない。しかしそのためには、彼らは「かみつ代の国の姿」を忘れな

ければいけないと言ふのです。いつまでも「神代」のことなどにかゝはつてゐれば、進歩がない。さう言ふのです。しかしもしさうすればその時点で国家生活はきれいに二分されてしまふのです。それではいけない。私たちはいかに時代は変らうとも、神のすがたを忘れるべきではない。いかに西欧的な考へ方を取りいれようとも事ある毎に神の世界に還るのが、日本人の本来の生き方ではないか。

この神の世界に還るとき、人々は自分の心の奥底に真心を確めることが出来るのです。そのまごころを大切にする伝統、それが敷島の道と言つてもいい。相手の人の真心を求めながら、自分の心の乾きを癒していく、さうしてお互ひの共同生活を築いてゆくのが敷島の道といふ学問なのです。

恐るべき学問の頽廢——東大、小林教授の所論

さてここに日本評論社刊の「法律時報」といふ雑誌がございますが、これは法律の方では非常に古い権威のある雑誌なのです。この中に「現代天皇制論序説」といふ、東大の小林直樹教授の文章がある。これは「ジュリスト」といふ同じ法律雑誌五四二号に書かれた「天皇制についての覚書」といふの続篇として書かれたものです。

ところがこの文の中で小林教授は、天皇がアメリカを御訪問になったあと行はれた記者会見の席上、原爆のことや、天皇の戦争責任についての質問にお答へになった御言葉を聞いて、「思はず耳を掩いたい気持がした」と言ひ、さらに次のやうに述べてゐます。

「天皇が人間としての痛みや責任を少しも感じないほど人非人間Vであるとは、考へていなかった。だからこそ、裕仁天皇がテレビ会見で、戦争責任の問題を、文学上のアヤ」という次元で回避したときには、アゼンとせざるをえなかったのである。」

記者団は天皇に戦争責任がある、さういふ前提で何とか天皇御自身からさういふお言葉を引き出さうとしているんな角度から質問をもつてゆくのです。それに対して天皇はいくつかのお言葉をお答へになつてをられますが、その中には「胸の痛みを感じる」といふ言葉もありました。陛下はいろいろな場所で、繰り返し、この「胸の痛みを感じる」といふ言葉をお使ひになります、そこには陛下の御体験の中らにじみ出るやうな苦しいおもひがたゝへられてゐる。それをこの小林教授は理解出来ない。そして「内面の痛みや責任を少しも感じない人非人間V」ときめつけるのです。小林氏は天皇のお言葉に耳を傾けようとはしない。たゞかねて自分が天皇について用意してゐる一つの物差をふりまはしてゐるだけです。さらに記者達が戦争責任の問題に直接ふれる無礼な質問をあへてしたときに、陛下は「さういふ言葉のアヤについ

ては、私はさういふ文学方面はあまり研究してゐないので云々」とお答へになつたことをとりあげて、「文学上のアヤという次元で回避した」と言つてゐるのですが、その折の陛下の御苦衷をお僂びしない、まことに粗雑な読みとり方といはなければなりません。小林氏はさらに次のやうに続けます。

「これについてある知人は私に、こういうふうと言つた。天皇がどんなにボケていたにしても、あれほど馬鹿げた取り違いをするはずがない。あの答は計算ずみのおトボケであつて、彼の頭の良さとずるさを立証するものだ」というコメントをしてくれた。」

友人がとは言つてゐますが、その名前も書いていない以上、これは小林氏自身の心境の表現だといつていい。さらに小林氏は最後のところであう書いてゐる。

「天皇の戦争責任は、個人＝倫理的にも、政治的にも、まだ本格的な答えはなされてない。ロッキード事件などよりはずっとスケールの大きなこの問題は、むしろ天皇個人よりは、天皇制自体のアキレス腱であり、さらには日本国民にとつても、その民族としての資質や責任感を問われる問題であつた。それを行方不明にして、不可能の、触れてはならないという象徴を戴いてきたことに何の痛みもおかしさも感じないとしたら、日本人はまさに自らに最もふさわしい象徴を選んできたといふべきであらうか？」巧みに言ひまはしてゐますが、要するに日本人は馬鹿だからそれにふさはしい象徴をいたゞいてゐるといふ罵倒です。さらに「日本の国

民はそれでもまだ自らのアイデンティフィケーションを、こうした天皇に求めるのだろうか。日本国憲法第一条は、それが今のまゝである以上これからも長く、そういう無言の問いかけをしつづけるように思われる。」

かうした徹底した天皇排撃の言葉でしめくられてゐます。では天皇は戦争責任のことをどう考へてられるのか。先程の小柳先生のレジюмеにあるマッカーサーの言葉を読んで下さい。これは昭和二十年九月、天皇がマッカーサーを御訪問なさったときのマッカーサーの言葉です。

「私は大きい感動にゆすぶられた。死をもともなうほどの責任、それも私の知り尽している諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとするこの勇氣に満ちた態度は、私の骨の髄までもゆり動かした。」

わづか一回の面会によって、マッカーサーといふ、日本をあまりよく理解してゐなかつた外国の軍人が天皇の深い責任感に感動してゐる。御自分に関係がないとマッカーサーが理解してゐることまでも、全部自分で責任を負ふといふ態度を表明された天皇に対してはげしい感動をおぼえてゐるのです。

ところが天皇に会見した五十名の記者たち、そして東大の法学部の教授は、感動するどころか、頭の良さとずるさを一緒にした人間であるとしか受けとらなかつた。何といふ悲劇でせ

う。日本の学問の現状は何と情ないことになってゐることか。

人々は科学々々といふ。勿論科学も大切でせうが、しかし科学は人の心の働きを扱ふことは出来ない。そのことを忘れて、科学万能になってしまったため、結局人の心はどこかに置きざりにされてしまつてゐるのです。かうして大学のトップクラスの教授が、人の心をくみとる力を全くもちあはせないといふ悲劇が生れてくるのです。心を知るのは心です。その心を豊かにする道、心を鍛へる道を真剣に考へない限り、このやうな悲劇は永久に続くでせう。

私は先ほど司会の方から御紹介いたゞいたやうに、最近「昭和史に刻むわれらが道統」といふ書物を書きましたが、その巻末に、私が東大で法学部から退学処分を受けた時に、その処分の原因になつた当時の論文も一緒に掲載いたしました。その中で当時（戦時中）の東大の法学部は一体どういふ様子だったのかを私なりに記録してゐるつもりですが、その中に私は次のやうに書いてゐます。

「作年度、今年の三月までにおける宮沢俊義教授担当の法学部の帝国憲法講義は、憲法中の第一の問題である統治大権の帰属問題に関して、これを作為的に敬遠し、全くこれに論及することなき講義であつた。

「それはいはゞ憲法講義の形態を整へざる憲法講義であり、その事實は、事変下における東大法学部に帝国憲法の講義が行なはれてゐなかつたと極言せられても仕方がない事柄である。

「さらに三〇〇頁になん／＼とする同教授著のテキストの講義案には、同教授のもっとも得意とする帝国議会の事項に関しては、実にテキスト全頁の四分の一が費されてゐるにもかゝらず、肝心の憲法第四条（注・天皇ハ国ノ元首ニシテ、統治権ヲ総攬シ、コノ憲法ノ条規ニヨリ之ヲ行フ）の統治権上の最重要大条項に関しては、奇怪至極にもその条文すらテキスト中に一ヶ所も記載してをられないのである。」

これが戦前の東大法学部の状況でした。その宮沢俊義さんのお弟子さんが小林直樹さんになるのです。

さらに小林教授はこの文章の中で、日本国憲法について、帝国憲法を排除して国民主権の国にしたことは結構だが、たゞ一つ社会的変革が行はれなかったこと、社会の仕組みそのままで変へることが出来なかった。それが残念だと言つてゐます。国立の大学の教壇に立つて、国からそれだけの地位を約束され、給料をうけとりながら、憲法第一条における天皇の問題についてこのやうな理解しか示さないし、さらには社会変革を企図してゐる、これが一国の思想学術の上でどんなに大きな問題を孕んでゐるか。よく／＼考へていただきたいと思ひます。

日本の学問の世界はそこまで乱れてしまつてゐる、しかし日本には本来「開くべき道はひら」いても、「かみつ代の国のすがた」を忘れない、しきしまのみちといふ生き方があった。

「日本をよくするためには、過去を捨てなければならぬ」といふやうな偏狭な生き方とは根

本的に異ったおほらかな道があった。もし進歩のためには過去を切りすてよといふやうなことがまかり通れば、丁度、ソ連や中共の革命後の歴史が明示してゐるやうに大量の虐殺と肅清が行はれることとせう。だがさういふかたくなな思想は、日本古来の思想とは無縁なのです。

進歩的文化人たちは口では俗耳にこびるやうなことを言ふけれど、実は自分でつくり上げた論理の枠で自分を縛つてゐるにすぎない、そして陛下のお心一つお偲びする力さへもたないのに、自分がきめた枠にはいらぬ思想に対しては侮蔑し、罵倒してやまない。それを私たちは学者と呼ばなければならぬのか。実に乱れきつた日本の学問の世界の荒唐ぶりをまぎ／＼と見せつけられるやうなおもひがいたします。

しかし日本には、先程の明治天皇の御製に「みじくも示していたゞいたやうな、「敷島の道」が伝へられてゐます。その「一筋の道」をふむことによって、私たちは日本人本来のすなほにして、ををしいのちを蘇らせなければいけない。この合宿教室でのいとなみがそのよすがになればと心から念じてをります。



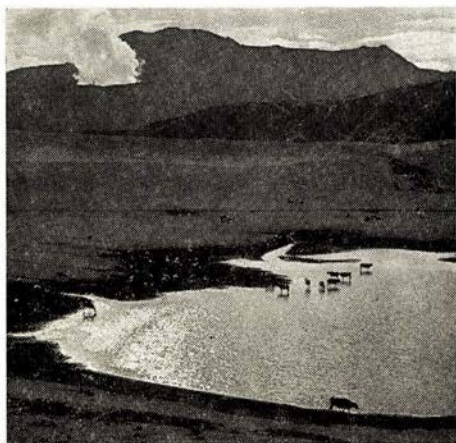
講義

•

講話

明治の学生

熊本大学名誉教授 松本唯一



草千里の放牧

明治の学生生活の思ひ出

満洲で聞いた明治天皇のご崩御

△編者註▽

松本唯一先生は今年八十六歳の御高齢であるが、栃木県のお生れ、大正五年東京帝国大学を首席で御卒業、その後ハーバード大学に学ばれた後、時の東京帝大総長山川健次郎先生の御斡旋、及び九州帝国大学の工学部教授で、「名も無き民のこころ」の著者であり、憂国の志厚かつた河村幹雄先生の御要請により御西下、明治専門学校（九州工業大学の前身）教授と九州帝国大学教授を兼ねられ、戦後は熊本工業専門学校校長を経て、熊本大学理学部長に就任された。専攻は地学であるが、阿蘇山の研究を中心とした九州の火山の全貌を解明された業績は世界にその名を知られる権威であり、昭和六年の大演習の折、及び昭和三十二年の植樹祭の折、今上陛下にも御進講申し上げてをられる。

御登壇いただいた時間は短かったが、温かにしてユーモア溢れる御人柄は参加者に深い感銘を与へた。特に明治天皇御崩御の折の御体験を語られる先生のお姿からは、すべての参加者が日本人として生きることの真実の意味を知らしめられ、文字通り魂をゆすぶられるおもひで、一つ一つの御言葉に耳を傾けたのである。

明治の学生生活の思ひ出

私は明治三十七年、日露戦争のはじまった年、中学に入学いたしました。それから初めて新聞といふものを読みました。日露戦争中は随分ていねいに読みました。また、『日露戦争実記』

といふ、一冊十銭の雑誌を買って貰って耽読いたしました。私は学校の書物は暗誦する位に、くそ勉強をいたしました。そのかたはらに、この『日露戦争実記』は読みに読みました。さういふ次第で、大変僭越な話ですが、日露戦争についてならば大抵のことは、この頃の方よりもわかつてゐると思つてをります。

日露戦争は私にとりまして、大変な事件でありました。この頃、いはゆる『文化人』といはれる方々が、日露戦争を侵略戦争と決めつけてゐますが、それを聞くと私はとてもいやな気がします。そこで私は、日露戦争の本当の姿を知っていただきたく、よく日露戦争のお話を申し上げるのであります。この度も、実はその話をもつたのですが、御意向もあり、私個人の体験が主となりますが、「明治の学生」と題して、お話させていただきます。

明治四十二年に私は中学を卒業しました。そしてすぐ東京に出たいと思つたのですが、親が許してくれません。その訳は、私の兄が当時、東大の理科にをりました。ところが、その兄が長年病弱でありまして、大変金がかかったものですから、父は「お前がまた東京へ行って兄貴のやうになつたら、うちはつぶれてしまふ」と言つて、行かせてくれなかつたのです。それでは故郷でやむなく、月給十円の代用教員をやつてをりました。そのうち兄が帰省して来まして、「お前、何をしてゐる」と聞きますので、「学校の先生」と答へますと、「そんな馬鹿なことがあるものか。すぐ官報を見て一高を受験するやうに電報で申し込め」と言ふのです。しか



しその時は、願書の申し込み期日はすでに過ぎてをりました。親は、この兄の意見に対しては何も言ひませんでした。それで私は、これなら来年は東京に行けるな、とほぼ見当がついたわけであります。さういふ次第で、ともかく月給十円の先生で勤務を一年いたしてをったのであります。当時、私は身の丈四尺七寸で背が低かった。ですから、学校に着て行くものが一番の問題です。私が中学時代着てゐた服は、兄のお下がりにツギを当てて穴をふさいだものばかりですから、それは着られませんが。そこで、親父の綾付き羽織を大きく肩上げして着て参りました。私は月給十円もらふことになってゐましたから、その十円を前借りして、洋服を一着丁度十円かけて作りました。これが、私が生まれて初めて新しい洋服を着た最初であります。この洋服は一高で三年着古しましたが、その後、大学を出て先生になつ

てから、困った学生がゐりましたので、その学生にあげてしまひました。

私は中学時代、広瀬海軍少佐のことを書いた書物をよく読みまして、将来、私も必ず海軍軍人にならうときめてをりました。海軍兵学校では、あの豪胆な広瀬少佐の玄関番をさせてもらはうといふ夢がありました。ところがやがて少佐は、第二回の旅順港の閉塞の際に、ご承知のやうに戦死されました。私はあの時、本當にがっかりしました。これで私の頼る海軍将校はゐない、本當に悲しい思ひがしました。一方、中学の在学中、つひ不養生がたり近眼になってしまひ、とうとう海軍も断念せねばならなくなりました。そこで一八〇度転換して、現在の通り「山男」になってしまったわけであります。さういふ事情で、一高に入学すべく東京に出てきた次第です。

翌年の明治四十三年、いよいよ試験まであと一週間といふのに、何の準備もしてゐません。しかし、ともかくも試験直前に東京へ出ました。ところが、私の下宿に、前年一高に入った友人が、沢山々々山のやうに本をかついで持って来ました。私は、その本の山を見て、「一高といふところはむづかしいところだなあ」とつくづく思ひました。この調子では私は確実に受からない。昨年は受けられなかったが今年は受けて落第かと、いや落第にちがひないと心に決めました。しかしそれならば、浪人中の一年間は、便所に行く時と御飯を食べる時、お風呂に入る時以外は一步も部屋から出ないぞと固く決心しました。さうしましたら思ひかけず、しつぱ

の方で受かってゐました。そして晴れて一高に入学することになります。入学してみると、一高の学生といふのは、勉強する人は実によく勉強します。私は最大級の勉強家ではありませんでした。次の段階位の勉強家でした。勉強してゐて夜眠くなると洗面所に行つて水をかぶったり、朝は毎朝水風呂に飛び込んでをりました。さうしましたら、だんだん成績が上がつて行きました、二年生になる時は一番になってしまつたのです。なつてみると、一番を続けようと思ふと今度は大変な努力が要るといふ具合で、必死で勉強したものです。

満洲で聞いた明治天皇のご崩御

そんな生活を送つて、二年生になつた年の四月だと思ふのですが、南満洲鉄道株式会社(満鉄)の重役で一高の先輩の方々が来られまして、「どうだ君たち、ひとつ満洲旅行をやらんか。満鉄の運賃は無料にする。泊りは小学校に泊れば実費で無料に近い。費用は往復の船賃、汽車賃だけである。総計二十円もあればよからう」といふわけです。そこで、一高の興風会といふ団体がそれを受け入れて、満洲旅行を計画しました。私も人には言ひませんが、行きたくないと思ひました。しかし、やつと家から東京へ出してもらつて一高に入つたので、贅沢は言はれません。実は、私はその当時、月額十円を家から送ってもらつてゐました。そのうち一円

は寄宿寮の舎費、六円が食費、その他せめて一円位は本代に使ひたいと思つてをりましたので、自由に使へるお金は残りの二円だけです。しかし、何とか工面して、満洲旅行に参加することに決心しました。さうなると、旅行費用の実費二十円を生み出すのが大変です。そこで思ひ付いたのが、昼食を抜くことでした。一回八銭の昼食代を抜けば二十円出来ないことはない。それに又、私はこれに屁理屈をつけました。当時、一高の寮には「賄征伐」といふ悪い風習があり、殊に昼食時は一千の学生が一度にドツと押しかけるので、賄夫たちは隼の如くに跳んでも仲々間に合ひません。皿は割れる、お櫃は飛ぶ、やがてテーブルがひっくり返るといふ次第で、昼食を抜くと、この活劇を見ないでもすみます。一挙兩得といふわけです。このやうにして私は旅行費用を捻出して、翌年夏七月、満洲旅行に出かけました。

最初、大連に参りました。大連といふと、当時の一高の寮歌の中に、

「……北樺太の雪の原 西大連の湾頭に

朝日の御旗かげ清く 領土は南北三千里

ああ我が大和民族の 理想一步茲になる

東亜の覇業誰が事ぞ 五億の民を救はんと……………」

とあつて、憧れの土地です。ところが大連に船が入港するや、直ちに満鉄の先輩たちがドヤドヤと乗船され、「天皇陛下ご大患」といふ号外を示されました。こちらはびっくり。初めての海



「最後の夜の集ひ」で『赤壁賦』を朗誦される松本先生

外旅行に天皇陛下がご病氣とは。これからどうしようか。と一同氣の重いまま、大連見物をすまし、旅順に向ひました。旅順では二〇三高地に登り、ロシアが作ったペトンの要塞などを見、遼陽、ついでロシア都市のハルビンに行き長春に戻ってきました。さうしたら早速、領事から「天皇陛下ご危篤」といふ知らせをいただいたのです。その知らせを聞いて一同誰言ふとなく、この上は呑気に旅行などしてをられぬ、予定放擲、「帰らう」といふことになりました。その晩は、本当に一同しみじみと参会をいたし、クリスチャンであった矢内原忠雄のキリスト教式の祈禱にならって、私達もクリスチャンではないけれども、一緒にアーメンを唱へました。

旅程変更の事はすべて先輩にお願ひして、翌朝、いよいよ帰るといふことに決めて長春の駅に行きますと、領事がアタフタと走って来て、「昨夜遅うに

電報が入りました。崩御」とただ一語。私共は、ただただ泣き崩れるばかりでありました。憶へば、日本の勢力範囲の最先端の満洲の長春、その長春駅の駅頭、同じホームの向ひ側はロシア、(こちら半分は)わが日本の天皇陛下が春雨秋雨、五十年築かせて下さいました新領土の最尖端におきまして、今し今、天皇陛下の崩御を耳にしようとは。誰しもが言葉につくせぬ驚きといはうか、ショックといはうか。私達は、夕刻奉天駅に着くまで誰一人一語を発するでもなく、茫然と車窓に倚ったままでした。その間、泣けて泣けて、もう涙いっぱいです。沿線の花も涙ごしに何の花ともわからず、誰もが泣濡れて奉天に降り立ちました。そして、奉天だけは予定通り一泊をいたし、ほかの予定は全部取り消して帰国したのです。

帰国して直ぐ様、二重橋に行きますと、何十人といふ人が、石コロ、土砂の上は端坐、土下坐して頭をピタと土につけてゐます。二重橋前に入るなり、誰でもがピタリと土下坐せざるを得ない実況でありました。そして、それが当時の、偽らざる日本全国国民の国民感情でありました。それから私は、郷里栃木で一ト月を謹慎しまして、九月に上京しました。私達は「諒闇」と申しまして、左腕に黒布を捲きつけ、満一年結局卒業まで、常に制服は喪章をつけての生活でした。

九月十三日の御大葬には、わが一高も全校職員共々、二重橋前で奉送申し上げました。午後早くに本郷の学校を出発、護国旗を先頭に皆徒歩です。護国旗の由来を申せば、一高ではその

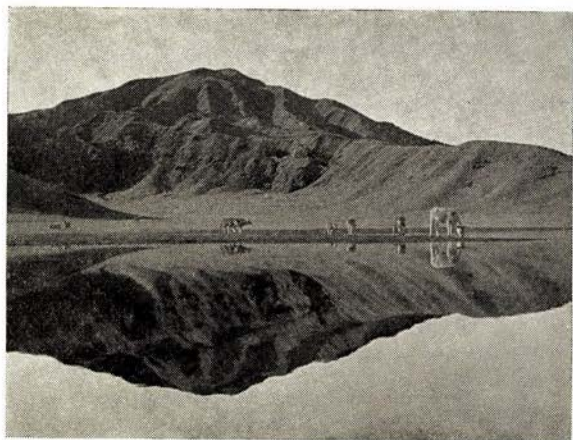
昔、森有礼文部大臣の発想で、文武両道を修め、以って国を護るといふ意味をこめて、文の神ミネルヴァ、武の神マルスの表象である柏と橄欖の中央に国の字を入れてゐるといふことから、ただ校旗とは呼ばず、皆、護国旗といつてゐたのです。ちなみに、この後、一高が本郷から駒場に移りますが、このときの護国旗の旗手をなされたのが、ここに居らっしゃる小田村先生です。さて、その護国旗を私達は、三年生のクラスから一人ずつ計一〇名が旗手と護旗手で代はる代はる捧げ、二重橋に向かひました。やがて宮城前の広場に着いて所定の場所に一応整列しました。後部の人達は何とか前に出ようとして、一時は人波が左右に揺れましたが、夜になって、殊に御葬列が二重橋にかかり、ご先駆の明りが闇のなかにきらめくに至つてピタと静まりかへり、皆々深々と頭を下げました。私は、もったいなくも最前列でご大葬の儀をお見送り申し上げたのであります。暗い中を静々と歩ませ給ふ御靈輦、御靈輦を戴かせまつる五頭の牛に曳かれました牛車、その牛車のキュー、キューと、えもいはれぬ、きしむ音が近くまた遠く、永くそして遙かに今でも私の耳に残つて居るのであります。天皇陛下と共に明治は終わったか、明治天皇陛下と共に日本は亡んでゆくのかとさへ思はれました。

もう少し、まとまったお話をしようと思つてゐたのですが、脱線ばかりして申し訳ありません。ご勘弁下さい。

現代の經濟と当來の經濟學

世界經濟調查會理事長

木内信胤



烏帽子岳の朝

現代の経済学と当来の経済学

過去一年間の動き

私の日本論



現代の経済学と当来の経済学

△私の根本的なもの見方▽

私に長いこと、過去一年の世界と日本の動向について私の解釈をお話することを、この合宿教室における私の任務のやうに心得て来たのですが、昨年からそれを變へて、過去一年間の動き方は附け足しにしました。さて、今年の主要テーマは「現代の経済学と当来の経済学」といたしました。「当来」といふのは、まさに来るべき」といふ意味で、「当来の日本」といった風にも使つていいものと思つてゐます。

まづ、お配りしたパンフレット「私の経済学のパラダイム」についてお話しませう。その一番最初に「パラダイムといふ言葉にいて」とい

ふ項目があります。パラダイムといふ言葉は、文法上の言葉ださうですが、ここでは「枠組み」と訳したらいと思ひます。それも「思想的枠組み」と訳したらなほいいかと思ふのですが、現代の経済学の枠組みを書いて、それと私の経済学の枠組みを比べて、私のこれから作らうとする経済学はどんなものかを説明しようとしてゐるわけです。

「経済学は病氣にかかつてゐる」とは私の年来の主張ですが、「私の経済学のパラダイム」といふのは、その論証のスタートです。これから私は何をやるか申しますと、『世界経済』といふ雑誌の九月号から始めて、ひと月おきに六回書かうと思つてゐます。そこで理論面を扱ひ、別に『経済論壇』といふ雑誌に、やはり九月号から、これは毎月實際問題を論じて行つて、それが理論面とうまく対応するやうに書いて行かうと思ふのです。毎回読み切りで書くのですが、全部が完了した際には、全体がひとつのシステムとして統合されてゐるやうに書くつもりです。だからもし、来年も講義に来るとするならば、その時には「私の経済学」——それは「まさに来るべき経済学」のひとつのサンプル、と私は思つてゐるのですが、それがほぼ完成してゐるといふことになります。

実は私は、経済問題を考へる場合に、私が立つてゐる「根本的なものの考へ方、見方」即ちここでいふパラダイムに相当してゐることを、これまで三つの論文で明らかにしてゐるのです。「脱ケインズ経済学の建設」といふ論文（昭和五十一年七月）、その十年前に「私の経済哲

学」といふ論文（昭和四十一年二月）を發表してゐます。そして、その中間の昭和四十六年六月には「社会科学方法論」、以上三つの論文を書いてゐるのです。ですから私の言はんとすることは、既に十年前から書いてゐること、この三つの論文に書いてゐることと殆んど同じ内容です。

そこで、右の三つの論文のなかで一番古い「私の経済哲学」では何を論じてゐるかを、ちょっと説明しておきませう。第一章は「セマンティクス（意味論）」とコミュニケーション（通意論）」です。言葉といふものは、例へば民主主義といふ言葉は、時代によって使ひ方が違ひます。どう違ふかを組織的に捉へようとしてゐるのが「セマンティクス」といふ学問ださうです。ところが、別に言葉の意味が違ふのなら、どうすれば相手に通じ、どういふ場合には通じないのか、これを体系的に考へて行けば、ひとつの学問が成立しますね。これが「通意論」です。言葉といふものは、通じるか通じないかが極めて大事な問題であるのに、そのことにすら気がついてゐないやうでは、到底深い思考、学問的な考察は出来る筈がないのです。言葉自体も、人により、場合によつて違ふのだ、といふことが氣になる人間にならなければダメなのです。それが「私の経済哲学」のイントロダクション。第二章は「認識論と實在論」、ものがわかるいふことはどういふことか、ものは本当に實在してゐるのかどうか、といったことを考へなければ、これもダメだ、といった積み上げの上に立つてゐるのが「私の経済哲学」です。

△現代の経済学のパラダイム▽

まづ、さういふことをお耳に入れておいて、「現代の経済学」の話に入ります。某大学の経済学教授のAといふ人（以下A教授）は、私の書くものをよく読んでゐる人ですが、私が「現代の経済学は病気だ」と主張してゐるのに対して、

「私は貴方のお説に賛成です。しかし、貴方は経済学者でないから、現代の経済学はダメだと仰言るけれども、相手の内情をよくご存じない。私は経済学者ですから、現代の経済学はどんなものか、一応は知つてゐます。貴方に、現代の経済学の内容についてお話しませう」と言つてくれたのです。私は喜んで、是非聞かせて欲しいと頼んだのが今年の十一月頃です。

第一回の話を聞いてわかつたやうな気がして一文を草したが、まだ大事なことが残つてゐることに気がついて筆を止め、その大事なことを聞き直して書いたのが第二回目の論文です。そのあと、もう一度話を聞いて、それでまあ納得したので、「私の経済学のパラダイム」がまとめられた、かういふ次第なのです。

A教授のいふところによつて考へますと、およそ現代の社会科学はどういふものかと申しますと、中心的な考へ方は、「科学主義に立つ」といふことなのです。ここで、サイエンスといふのは自然科学です。現代は、自然科学が非常に進歩して世の中を大変に変へた。核兵器を造つたりして、まるで戦争のために進歩してゐるやうだといつて嘆く人もありますが、良くなつ

た面を考へれば非常に良くなったのです。現に日本といふ狭い、耕すべき平らな土地の少ない国土に一億以上の人間がゐて、お米は余る、野菜・果物も概ね一〇〇%自給ですね。麦や大豆は大量輸入してゐますが、これまた、その気になればお米と同じやうになるでせう。これは科学の進歩の結果で、生産性がすぐ向上したからです。食物は十分、その他の物は余るほど生産され、輸出が大きくなりすぎてアメリカが悲鳴をあげる、といふ状態になりました。これらのことには、日本人の偉大さといふ要素が加はるのですが、要するに科学技術といふものをマスターすれば、人間が生きて行くことには問題はない、といふことなのです。

現代の科学技術、これが世界の「絶対平和」の基礎なのです。もっとも、これを基にして本当に世界に絶対平和が実現するかどうかは別ですよ。しかし、とにかく基礎は与へられてゐるのです。さう考へてゐる人はあまりゐないと思ひますが、私はさうだと思ひます。

だから現代の自然科学、科学技術文明と言はれるものは実に素晴らしいものなのです。非常に強力で有能です。恐しい面もあるが科学技術文明がいまの文明の特徴ですから、現代においては全てが自然科学的な考へ方になる。その結果「社会科学」も自然科学のメトードに従はうとする。そのことをA教授は、*「経済学も科学たらんとしてゐるのだ」と言つてゐるのです。そのことから次のやうなことが出て来るのです。*

現代の経済学は、

一、普遍的かつ抽象的な命題を重視する。

二、法則を発見しようとする。

三、それらの法則もしくは命題の正当性を、専ら「実証」と「論理」によって証明しようとする。

以上の三点が「現代経済学のパラダイム」であって、それらのことが現代経済学の「科学主義」たる所以だと言ふのです。

「現代の経済学」が、このやうな枠組みの上に立ってゐるのなら、それは「私の経済学のパラダイム」とは、全く異質なものであり、それさへ聞けば十分だ」とも言へるのです。ところが、ひとつ気がついたことがあるのです。それはA教授が説明してくれたものは、現代社会科学のパラダイムであつて、現代経済学プロパーのパラダイムではない」といふことです。

そこで、再びA教授を煩して現代経済学プロパーのパラダイムについて説明して貰つたのです。そのパラダイムを発見するには、大体次の三点から探つて行けばいいと思ふと、A教授が話してくれたのが、

(1) 現代経済学の基本的な問題意識は何かといふこと。

(2) 現代経済学にタブーとされる質問は何かといふこと。

(3) そして(1)の問題意識を解決するために、どういふ方法を使ふかといふこと。

といふ三つのことでした。そして、その各々についての一応の回答を示してくれました。

(1)の問題意識については、「財とサービスとの循環過程の研究」と言へるものがそのひとつで、これが「マクロ経済学」、生産要素の配分と所得の分配に関する最適の選択に関する研究」と答へれば、それが「ミクロ経済学」だといふのです。「マクロ経済学」、「ミクロ経済学」の定義をこんなに簡単に言ってくれたのは、私にとっては驚きでした。

なかで面白いのが現代経済学のタブーですが、

- (a) マクロとミクロとの「関係」について質問してはいけない。
- (b) 「生産技術」と「消費者の嗜好」の変化を考慮の中に入れてはいけない。
- (c) 「商品」以外の財貨もしくはサービスを問題にしてはいけない。
- (d) 「行動規準」に関する問題を出してはいけない。
- (e) 「時間」と「空間」の問題を取り入れてはいけない。

の五つですが、これは私には全部非常な驚きであったのです。

そして(3)の問題意識を解決するための方法ですが、ミクロとマクロではまるで違ふのであって、ミクロ経済学ならば、まづ「経済人間」(Homo Economicus)といふものを仮定して、その人間は合理性と独立性を持ち、情報も完全に知っていると考へます。そんな人間はゐないの

ですが、ゐるのならばとして、『最適の選択に関する研究』をするといふのです。選択とは何かといふと、意志決定です。しかし、その「選択の主体」は、さういふ實在しない「経済人間」なのです。

次は「選択の対象」ですが、財であらうとサービスであらうと、それは「商品」として扱はれる。「商品」とは欲求を満足してくれる性質を持つのみならず、稀少性を持つこと。例へば空気、なければ困る大事なものだけれども、稀少性がないから商品にはならない、かういふことを前提にしてゐるわけです。

なほまた商品は、「市場」における交換が可能だといふ性質を持つと前提し、「経済人間」の「行動規準」は、「一定のインプットを使ってアウトプットを極大化しようとするものだ」とする。また、選択の場所である「市場」については、「完全競争が行はれる」ことを前提し、その場合、時も処も無視するし、「均衡は必然的に成立する」とするのです。

つまり、世の中に無いことをみんな仮定してゐるわけですが、「経済学」といふ学問はさうしなければ成立しない。それならそれは、それで結構ですが、しかしその代り、仮定は實在しない仮定だといふこと、をいつも覚えてゐてくれるといいのですが、それを忘れるから困るのです。

△私の経済学のパラダイム▽

以上、大変むづかしいことを並べたやうですが、さう聞いてみれば成る程わからないわけでもないでせう。そこで、「私の経済学のパラダイム」ですが一応、八項目を立ててゐます。

第一、私は経済学を「科学」だとは考へない。経済学に限らず、政治学、社会学、歴史学等々、すべて人間社会に関する学問は科学ではないのです。科学たり得ないものを科学と決めてかかるから、とんでもない迷路に入ってしまった。「現代の経済学」はあと二年もしたら全くのすたりものになるでせう。

第二、右との関連において言っておきたいことは、学問とは何であるか、といふことです。経済学も学問のひとつ、学問とは要するに「鍛錬された常識」であるといふのが私の考へです。

第三、経済の分野には自然科学でいふやうな「法則」はない。

第四、経済学といふ「独立の学問」は存在しない。

第五、次にこれは超重要なことですが、「ものがわかる」のは「直観力」の仕業であつて、知識の集積によるものではない。人は一部分しか見ることが出来ない、にも拘らず全体を知る。この事実を私は「一葉落ちて天下の秋を知る」といふ古語の心として理解してゐるのであつて、私の学問の基礎中の基礎です。

第六、理屈はあとから付けるもの。

第七、経済現象は歴史現象である。その理解はどこまでも深く、どこまでも精緻たり得るので、これが正しい理解、それで終りだ、といふことはない。

第八、経済現象は、その国の文化史のなかの現象である。

以上の八項目ですが、それは何とA教授が教へてくれた「現代経済学のパラダイム」と異なるものか、我ながら驚きを感じる次第です。

しかしまた、「現代の経済学」とは成る程そのやうな「枠組み」の中でものを考へてゐるのか、とわかつたやうな気もするが、疑問百出でもあつて、A教授から第三回目の話を聞くことになるのです。一番気になるのは「タブー論」ですが、私からの質問で始めました。

現代の経済学の問題意識と、タブーと、方法論との三つについて仰言つたことは、あなたの独創的な見解ですか、それとも通説ですか？

お答は、(一)と(三)は通説だと思ふ。しかし(二)即ちタブー論は、自分の独創に近い、といふものでした。

では、その通説の問題意識ですが、まづマクロ経済学の目標は、財とサービスの循環過程、を究明しようといふのだが、まづ生産の主体の「企業」と消費の主体の「家計」とを立て、その間に「政府」が介在する、財とサービスは、この三者の間を循環し、それと反対方向にマネ

ーと呼ぶべきものが循環する、これが循環過程ですが、これを究明しようといふのがマクロ経済学だと言はれる。次にミクロ経済学は、生産要素の配分と所得の配分、それを最適ならしめるためには、どういふ意志決定をしたらよいか、それを究明しようとしてゐるので、それが現代の経済学の二つの大きな問題意識だと言はれるわけですが、それに並ぶやうな大きな問題意識は他にないのですか、と私は質問した。ところが、それは無いといふ答でした。これも私には、ひとつの驚きでしたが、同時に私は、相手は組みやすいと思った。問題意識は無数にあるのだが、マクロ、ミクロの両経済学とも、精緻なる論理によつて組みあげられてゐて、すべて問題意識はその体系の中に吸収されてゐる。それなら、上記の二つの問題意識は結局つまらぬものだ、といふことがわかれば、それでいいからです。

今日のお話の「第一部」は、これで終りとします。あとは、パンフレットを読んで下さい。以上は、パンフレットをお読みになる時の、理解の助けまでにお話した次第です。

過去一年間の動き

△不況は一大虚像であった▽

昨年の夏は、福田さんが総理になって半年と少し経った時でした。「経済の福田」を自認す

る福田さんでしたが、不況脱却が思はしくないので、追加措置を考へてゐた時で、それが九月三日に「総合経済政策」として発表されました。「事業規程二兆五千億円の追加」です。福田総理は、忝からこれでいいつもりであつたらしいのですが、九月末から大変な円高になつて、みんなびっくりしたのですが、それで目茶目茶に狂ふことになりました。

その円高が二四〇円まで行つたのは十一月ですが、財界は挙げて悲鳴をあげるといふ姿でした。ところが、十二月から一月にかけてケロリとした表情になつた。これは驚くべきことです。十一月には、みんな悲鳴をあげてゐた。私も「これは大変だ」と思ひ、かねがね考へてゐた私の理論、即ち変動相場制はダメ、固定相場にしると提唱するわけです。それには大きな輸出品を一〇品目ぐらゐ、その一年間のドルでみた増加率を、一五%を越さないやうに押へる、これが私の案ですが、それを主張したわけです。ところが、もうケロリとした顔をしてゐるのです。これといふ時に、大阪の財界人に会ひましたところ、もうケロリとした顔をしてゐるのです。これは実に大きな驚きで、このことを契機として、私は多く悟りをひらいたのが、この一年間でした。

一方、アメリカは十一月に厳しい対日要求をつきつけた。これは秘密だったのでありますが、アメリカの要求は、成長率は八%にしろ、日本は製品輸入が少なく総輸入の二〇%しかない、これを四〇%にしろ、といふものでした。アメリカは、日本の対米輸出で苦しんでゐるのです。

が、日本の輸出を押しやるといふことは、表だってはあまり要求しない。自由主義に反するし、自国の生産物を売りたいと思ふのに日本に輸出を押しやると言ったら、自分が売りたいといふのと矛盾するからでせう。そこで日本は八%は無理だが、七%成長は約束しませうとなった。十二月に牛場特使を派遣してです。成長率といふのは意味のない数字ですから、七%成長の公約といふのは、わけのわからないことだと思ひます。なぜかと申しますと、成長率は、個人消費、設備投資、政府の支出するお金、それに輸出、これが四大項目ですが、何がどのやうに増えて七%になるのか、それによって世の中はどうなるか、その「何がどのやうに」が大事なのです。

七%成長を約束したのが今年の十二月、それを私は非常に嘆いた。かういふことでは、私達がいくら具体的な提言を行なつても、政府はうけ入れてはくれない。アメリカの外圧によつて、日本はとんでもない方へ向つてしまった。かくなる上は、当分何を書いていいかわからない。だから私に「書くことなし」といふ論文を書いた。ところが一月になりまして「日本はもう不況ではない」といふことに私は気がつく。そこで私が作った言葉は、「不況は一大虚像であつた」といふものです。十二月に大阪の財界人がケロリとしてゐた、その延長として一月の中、新聞の報道を見てゐて、私は、「もともと不況はなかつたのだ、あれは不況ではなかつたのだ」といふことに、悟りをひらくわけです。

をどう思ひ、そこへ持つて行く手順はどうすればいいかです。最後に第六の柱として、日本の政治・経済のどこが、どう變つていけばいいのか”を知ることで、これは全部のまとめです。以上が六本の柱なのですが、この書きものは、この一年の経過といふものが、ある程度頭に入つてゐなければ、理解は困難だらうと思ひます。

△「円高」と「出超」の問題▽

次に円は、今日二〇五円の附近にゐるが、“どこまで行くか”（七月三日現在）、“七%成長その他対米公約は実現出来るのか”、“円高になつても不況逆転はないのか”、“閣内の意見不統一は解散問題とどう絡むのか”等々のことが、いまの主要関心事ですが、——と私は七月三日、思つてゐるのですが、“七月中旬のボンでの首脳会議を経て八月上旬までには、或る程度の見通しが立つやうになるかも知れない”とも書いてゐる。これらの事が、いまの經濟状態を見て行く上で、一番肝心なところです。

「円高」について少し敷衍しておきますと、二〇五円は七月三日、昨日、八月四日には一八七円位、一ヶ月で二〇円近くの棒あげ、これは約一〇%ですから凄いですね。そのうらに四月の六月の出超の数字がわかりませんが、昨年は年度で見まして一四一億ドルといふ出超なので、今年の出超は二〇三億ドルの見込みだといふ。四月と六月の実績を単純に四倍したのだと思

ひますが、さういふ大きな数字になります。政府の公約は、出超は大幅に減らすといふものです。減らすどころか大幅に殖える見込み、となつてゐます。

しかし出超は、六月まではさうだけれども、それから先はぐつと落ちる筈のものです。最大の理由は「円高」です。ですから、これからの輸出は、減るかも知れませんが、減らないまでも伸びなくなるでせうから、黒字幅はぐつと減るでせう。私は通年で經常収支の出超は一〇〇億ドルを割るだらうと思つてゐます。

そこで不況逆転はないかと言ふと、私は逆転すると思ひます。円高になつたが販売価格をあげたから辛うじて採算は合つてゐる。価格をあげることが出来ない製品は採算が悪くなりますから、破産しないまでも苦しくなり、不況色を濃くするわけです。その上、円の手取りはどうしても減つてくる。一ドル二〇〇円までは、まだよかつたが、一八五円ともなつては、円で見た日本の輸出は既に減り始めてゐる。日本の成長率は円で計算しますから、成長率は到底七%にはならないといふことにもなります。かうなることは明瞭なのです。

そこで、是非とも七%成長を達成しろ、不況は困るから大いに積極政策をとれ、といふことに相成るのです。積極政策をやるのはどうするか、結局、財政赤字をもつと大きくする他はない。一方、減税をやれといふ人がある。それで景気が振興するかどうかは問題ですけれども一応の理論ではさうなる。公共投資を殖せば景気は振興する、と多くの人は思つてゐる。

年私がここでお話した「新しい日本の誕生」がいよいよ、自覚されるコースに入ってきたといふことなのです。あらゆる問題を日本は、ただ何となく、いつの間にか解決するといふ不思議な国だ。この事実が、明確に露呈したのが、この一年間です。その中で、私もいままで知らなかったことに、いくつか気がついて、私自身も急成長した感じでした。ともかく私には、この一年間は画期的な一年であって、すぐく進歩したし、これでいよいよ「私の経済学」を筆にする資格を得たと思つてゐるところです。

そこで、どうぞ「わかる」といふことにも、いろいろあることを知って欲しいと思ひます。私自身、二十代でわかつてゐたことが、いま改めてわかる、といふ経験を日々重ねてゐるので、かうして日本はいよいよ確実に、「東西文明の融合文明」を実践によって実現し、自覚し行くことでせう。

私の日本論

ご存じの方も多しと思ひますが、ハイエク教授が創設しました「モンペルラン協会」といふのがありまして、今度初めて香港、即ちアジアで総会を行ふのです。総会に論文を提出するのはスピーカーに限られてゐるのですが、私は二〇年も前からの会員なので、あなたは特別扱

ひをする、前もって論文を出してください”と言はれたのです。その論文が「私の日本論」で、同じ趣旨を「世界と日本」（八月十四日発行）に書いたのですが、それは「日本はいまどこへ来たか」といふ題で、「前古未曾有の高いところに来た」といふ副題がついてゐます。

△日本は長いコースを走り終つた▽

日本は明治以来一〇年間走り続けて来ました。明治は「富国強兵」が国家目標で、それに成功したから日露戦争に勝つたわけです。負けてゐたら、日本は存在を失つたかも知れない。だから富国強兵に成功したといふことは、大変な意味を持つ。

日露戦争に勝つて日本は、「列強」の一員になる。そして、その意識で動く。朝鮮を合併し、やがて満州国を造つたのがそれです。後で非難するのは勝手ですけども、当時から言へば、当り前の道、疑ふ余地のない道に入つて行つたわけです。その道が敗戦につながるのです。戦後の日本に残された唯一の道は、経済発展でした。小さな島に一億近い人間がゐるのでから、これは絶対必要であつたわけです。経済発展のシンボルが「輸出拡大」です。明治以降生糸が輸出の主品目であつたが、戦後は重化学工業品でなければダメだといふことで、日本はすごい重化学工業国になつた。これが明治以来、日本が走つて来た道です。

その「輸出拡大」といふ目標を、過剰達成したといふのが現在の状態です。この過剰達成と

いふのが私の解釈です。日本人はよく働くとか、技術水準が高いとか、所謂「日本株式会社」とまで言はれる挙国一致、これらはみな事実ではありませんが、それは末端的な捉へ方なので、これを根本において捉へれば、日本は、東西両文明を日本流に統合してゐるのです。

支那文明と印度文明、それに日本固有の文明の三つが、「東の文明」です。日本固有の文明といふのに、古事記や萬葉に現れてゐるやうな心情を持つ民族によって作られたもので、それは日本の気候風土から出て来たものです。「西の文明」といふのは、源流は西アジアと地中海でせうが、いまはヨーロッパ文明といふもの一本になつてゐる。

日本固有の文明は、印度文明を仏教によつてうけ入れる。それを成し得たのは、「漢字」の仲介によつて入つて来たからです。漢字は、各々の字が意味を持つてゐますから、二つ乃至四つを組合せて新しい語を作ることが自由です。仏教の難しい内容を、新しい語を作ることによつて表現した。その漢字を日本人は知つたからこそ、仏教が理解できたのです。もしも漢字の仲介がなかったら、日本国民は仏教を理解することは、到底出来なかつたでせうね。

奈良朝、平安朝、鎌倉時代、戦国時代を経て、徳川時代となると、支那文明の重要な要素である「儒教」を日本人は本格的に学ぶ。徳川時代は、日本人は儒教を真剣に研究し、身につけた時代です。仏教をうけ入れた時代から千年も経つてゐるのですよ。かうして仏教、儒教をうけ入れたといつても、本来の日本の根源たる文明は、脈々と続いてゐた。のみならず、それら

を統括してゐるのです。

△漢字を駆使して西欧文明を吸収▽

そのやうにして十分な基盤が出来た時に、ヨーロッパ文明が入つて来る。これがまた極めて特殊かつ強力な文明なのですが、今度は日本人は漢字を使ってうけ入れるのです。漢字で造語する。「株式会社」といふ言葉はもとは無かった。法律、経済、医学、等々の用語は、明治の初期ある期間、一五年間ぐらゐるださうですが、その間に造語されたものださうです。仏典を翻訳した西域の人と同じやうなことを、日本人は自分でやったのです。ヨーロッパ文明といふ異質的な文明も、それを漢字で表現することに成功したから、忽ち全国民のものとなつた。これは「漢字」といふ特殊なもののみが行ひ得る魔術にも似た働きであつて、このことを日本人は知つてゐなければなりません。しかしまた、かういふ芸当を演じ得る国民は、世界中に日本人以外はないですよ。その結果としていまは、西欧文明を十分に吸収して自分のものとしてゐるのです。

△日本文明の特徴▽

本来の日本文明が、印度文明を、支那文明を、そして最後にヨーロッパ文明をうけ入れて、

西歐人は自己主張で生きてゐるが、自分一人では力が足りないから、グループを組むわけです。しかし、あまりグループで争ふと、あとは社会が分裂して来るのです。経済能率といふものは、西歐の科学技術文明の所産ですが、それをうけ入れた日本人は概ね一〇〇%、その技術の能率を發揮してゐる。ところが彼等には、それが出来ない。それはグループエゴによって世の中に乱れが生じて来たからです。それが一波が萬波を呼ぶといふ形で、次第に加速して来たから、益々能率は低下するのです。その結果が、いまの日本との著しい差となつた。日本にもグループエゴはありますし、西歐に發生した悪いものは殆んど全部日本にもあります。けれども、その程度がまるで違ふのです。だから、能率の發揮に大した妨げは起らないのです。

△新日本の自覚▽

いま申したことは、昨年お話ししたことと全く同じなのです。昨年の講義を読み返してみても、私自身もいささか驚いたのですが、「新日本の誕生」といふことを、昨年すでに信じ切つて書いてゐるのです。「新日本の誕生」とは、実は「本来の日本に帰る」こと。「帰る」と言つても、それは、「根源的なもの」をしっかりと保持しながら、それに統括された新しいものを作つて行く」といふことですが、要するに「本来の日本」が、ただ単に顕現して来るだけです。だが、いままでとあまりにも違ふから、「新しい」と呼ぶのであつて、实体は少しも違はないの

です。

私がいま作らうとしてゐる経済学は、さういふ日本文明から見れば、*「かういふ経済学になる筈ではないか」*といふものです。日本国が既に「新しい日本文明」の保持者になつてゐるのに、それは自覚されてゐないやうに、私の経済学は、私の心の中に既にあるけれども、まだ形は与へられてゐない。それを引き出すだけの話ですから、あと二年で出来ると思ひます。

日本人が日本国を自覚するのは、すでに在るものを自覚することですから、決して難しいことではない。いま私は、日本人にその自覚を持って貰ふためにも、渾身の力を注いで努力してゐるところですが、私はいまの日本を、*「前古未曾有の高いところに来た」*と位置づけてゐます。私の心の中にある日本の位置づけ、それが客観的に正しい事実だと思ひますが、*「それを自覚して欲しい」*といふのが私の切なる願ひなのなのです。

感
想

——本居宣長をめぐる——

文芸評論家
小林秀雄



私が『本居宣長』の仕事を始めから随分になります、この仕事を続けてゐる間、誰も何も言ってくれた人はありませんでした。「文芸時評」など毎年出てゐるのですが、大体読んでくれているなかつたといふ感じでした。ところが、今度出版されてみると急に騒がれまして、やうてゐる時は本当に孤独でしたので、あまりに反応が違ふので驚いてしまひました。

本居宣長について、何か話してくれと方々から頼まれます。しかし、私はもうしゃべることなど何もありません、あの中にみな書いてしまひましたから。もう言ひ残したことはない。

宣長は荻生徂徠といふ人を尊敬し、儒者の中ではあの人だけだといふくらゐよく読んでゐますので、徂徠をやらないと本居さんは分らないところがある。私がやり出した頃には、荻生徂徠の全集など勿論ありませんし、あの諸橋の漢和辞典だけを頼りに徂徠の文章を読んで行つたのです。しかし、そんな風に字引を引きながら読んでゐると、とても楽しいのです。僕はずつとさういふ事を繰り返してやって来た。私は、一人で楽しんで仕事をして来た。だから「本居宣長についてちよつと分りやすく話してくれ」などと言はれてもお断りしたい気持が強い。そんなことは全然出来もしません。しかし、さういふ注文が今は非常に多い。これは現代の病氣だと思ひたい位です。みんな早く分りたいのです。手っとり早く、苦勞しないで。苦勞しない

で分るといふのは、知識が一つふえるといふことにすぎない。そんなものの中に発明といふものはありません。この前「日本文化会議」といふ会がありました、その時話したことを繰り返してお話して失礼しようと思ひます。

その会議で、私の前にプラトンの研究家の田中美知太郎さんが「哲学と文章」といふ講演をなさいました。その筆記を読みまして大変面白いと思ひました。今度宣長さんをやってみまして、私が一番先にぶつかった問題はやはり「哲学の文章」だった。宣長に関する仕事については、僕には何も自慢することはないのですが、ただ人と違ふところは、僕は宣長の文章を非常に丁寧に読んだといふことです。文章を読むといふことは、決してやさしい事ではない。よく、「君の書くものはみんなむづかしい」と人に言はれます。僕はさういふ時「君はやさしく文章を読んではだよ」と答へます。文章と呼んでいゝものは熟読するとみんなむづかしいのです。文章の底にはこれを書いた人間がゐますから、一体この人間はどういふつもりでこんな言語表現をしたのかといふことをちよつと考へれば、どんな文章もむづかしくなるのだ。大抵の人はやさしく文章を読む癖がついてゐる。だから、文章らしい文章にぶつかると、これはむづかしいと言ふのです。文章を読むといふことは、知識を貯めることではない。「あゝ分った」と直ぐ言たがる人は知識を貯めてゐるのです。さういふ読み方をすれば、文章はみなやさしいですよ。たった一つの歌でも、この歌人はどういふ心持でこの歌を詠んだのだらうと思へ



ば、歌はいくら読んでもむづかしいし、読めば読むほど味はひも出て来る。その味はひの中にその歌人の顔が見えてくる。さういふところまで読まなくてはならないでせう。論文でもさうです。歌と論文は違ふと簡単に考へてはいけない。全然違はぬ性質が両者にあるのです。私は歌は詠まないけれども、自分の文章は歌のつもりで書いてゐる。僕といふ人間の味はひが出て

ゐるやうに、僕は文章を作らうとしてゐます。僕はむづかしい文章など少しも書いてはゐません。僕の文章を、小林といふ男が表はれてくるまで、何度も読んでもらひたいと思つてゐるだけです。

宣長の文章には、普通の意味でむづかしいことなど一つも書かれてゐないけれども、一体こんなやさしい文章で、本当はこの人はどういふ事が言ひたいの

だらうと考へて、何度も何度も読んでみると、なかなかむづかしい事になる。昔から宣長については、沢山の人が批評してゐる。僕は殆んど読みました。読み残したものは先づありません。どういふ処に不満を持ったかといふと、論理を辿り論旨を理解し、これを批判するといふ筋ばかりに急であつて、文章の姿を味ふといふ事を、皆二の次にしてゐる。さういふところに不満を持った。一と口で言へば、宣長といふ生きた人物が、文章の背後から立ち現はれて来るまで、文章の姿を味ふといふ事をしてゐない。

今日の宣長研究に共通した一つの性質があります。一方で研究者は非常に論理的で実証的な精神を持った学者を考へる。一方では、不合理な古伝説をそのまま信じた狂信家を見る。宣長を分裂した二人の男に仕立てあげて了ふのです。常識で考へても、そんな馬鹿氣た事はない。宣長といふ人は精神分裂症ではない。それなら、宣長といふ人間を二つに分けて考へれば、分りやすくなると研究者が勝手に考へるに過ぎないではないか。それでは研究の体裁を整へる事であつて研究ではない。私は、初めから宣長といふ人間は一人しかゐないといふ常識に立ち、あくまでも、これを貫いた。宣長が説くところの内容如何といふ問題にばかりかゝづらつてゐると、そこに矛盾が現れて来て、この容易な解を求めて、宣長といふ人間自体に矛盾があつたなどと詰らぬ事を言ひ出すのです。宣長の文章といふものを味つてゐると、それは宣長といふ個性の統一した魅力を感じて来る。この統一した彼の個性の直覚から、彼の論の内容に這入つ

て行くといふ道を、私はとった。僕は長い事かかってひたすら宣長さんの文章を味ふといふ道を行き、彼の学問には何の分裂もないといふ確信に達しました。

人間を自分に分りやすいやうに観察しようなどと急いではいけないのです。どんな人にもその人間の独特な生き方、分析の利かぬ個性といふものがある。それを眺めなければいけない。個性といふものは一般化して理解される事を拒絶してゐる。個性はたゞ眺める事しか出来ないものだ。だから眺めなければならぬ。無理に理解しようとする、勝手な解釈に落入るのである。これを考へれば宣長といふ人の統一した個性が現れてゐるのは、その文章の姿であるといふ事が、おわかりでせう。文章を時間をかけて眺めなければならぬ。

そこで、先ほどの哲学者の文章の話に戻ります。田中美知太郎さんは、プラトンの「パイドロス」といふ本を例に引いて文章の話をなさった。対話の最初のところで、若いパイドロスがソクラテスに聞く、「いろいろ奇妙な、信じられないやうな神話が沢山あるけれども、あなたは本当にあゝいふ事を信じてゐるのですか。あれは事実だと思つてゐるのですか」と。ソクラテスは答へる。「あなたの質問は、ちと無邪気すぎる。神話のやうな馬鹿げた話を誰が信ずるものかと答へれば、君は安心なのか。不合理な話を、勝手に合理的に解してみれば、事は

すむのか。そんな簡単な問題ではあるまい。」ソクラテスは、有名なデルポイの「汝自身を知れ」といふ銘の話をする。己れを知るといふ事は、人間にとつて最も大切な事であるが、ソクラテスの確信によればこの己れを知るといふ道は一つのパラドックスを含んでゐる。それは何かといふと、己れを知るといふ事に、一番邪魔になつてゐる事は、自分は何でも知つてゐるといふ自負であるといふ事だ。己れを知るといふ難問題に這入るには、先づ自分は何も知らぬ、といふ謙虚な心をしつかりと持つてゐる事が、一番大切な事だとソクラテスは考へる。解つたと思つた時でも、それを疑つてみる事が大事である。物を考へる力は、物を疑ふ力である。先づ疑ふといふ思惟の原動力を失ふと、浅薄な知に惑はされる。これが、よく知られたソクラテスの「無知の知」の必要である。

奇怪な神話など理解出来ぬと君は言ふが、さう言ふ君自身が、神話に出て来るやうな怪物かも知れないではないか。自分は怪物ではないと言ひ切るほど、君は自分をよく知つてゐるのか。さうソクラテスは、パイドロスに言ひたいのです。

本居宣長は、ご承知のやうに日本の神話をそのまゝ信じた。ところが他の学者たちは、みんなあの神話は、アレゴリーである、寓言であるといふやうに解釈した。あゝいふことよせで、実は何かが言ひたかつたに違ひない。宣長はさういふ解釈を絶対に許さなかつた。神代はアレゴリーであると、一番はつきり書いた人は、熊沢蕃山であつた。支那の昔にはもつと立派なア

レゴリーが沢山あるけれども、「古事記」の神の物語はアレゴリーとしても実にまずいアレゴリーである、と言った。宣長はこれに対し、決してアレゴリーではない。古人の心ばへそのまゝの姿であると言った。内容の不合理ばかり見るから君はアレゴリーなどといふが、掛けがへのない個性的な文章の姿を先づ見よ。君の直覚に訴へる文章の魅力を味ってれば、やがてそれは古人の心ばへに即した古人の思想を語ってゐる事が納得出来るだらう。このやうな宣長の神話に対する態度のうちに、ソクラテスの「無知の知」が働いてゐる事がよく感じられると思ひます。

それからもう一つ。ソクラテスの話がまた昔の神様の話になるところがある。——エジプトのある地方の神様、これは発明の神様なのですが、いろいろな技術を発明する。とうとう文字を発明して大評判になる。都に出てもっと偉



小林先生、ロビーで（右は小田村国文研理事長）

い神様のところに行つて「実は今度は私は字を發明した。これで、人間の知識も記憶力も非常な進歩をするだらう」と自慢しました。ところが、その都の偉い神様は、「君は文字といふものを發明して、得意がつてゐるけれども、文字など發明するとみんな知識を文字に托して、それで安心するから、誰も自分の記憶力を働かせなくなるだらう。字さへ覚えれば知識が貯まると思つてゐる学者がいっぱい出てくるだらう。エセ学者が増える事になる。さういふ話をソクラテスがするところがある。

ご承知のやうに、ソクラテスは一度ももの書かなかつた人です。ソクラテスを一人の登場人物として、プラトンが後からいろいろ書いてゐますが、ソクラテス自身は何も書かないで死んだ人だ。そのソクラテスが、かういふ話をしてゐるのは面白い。僕はそれを読んで、直ぐ宣長の事を思つた。宣長も文学といふものについて同じ考へを持つてゐた。

市川匡の「末賀能比礼」に反駁した宣長の「くず花」の文章の一節を読みます。「古へより文字を用ひなれたる、今の世の心をもて見る時は、言伝へのみならんには、万の事おぼつかなかるべければ、文字の方ははるかにまさるべしと、誰も思ふべけれ共、上古言伝へのみなりし代の心に立かへりて見れば、其世には、文字なしとて事たらざることなし、これは文字のみならず、万の器も何も、古へには無かりし物の、世々を経るまゝに、新に出来つゝ、次第に事の便よきやうになりゆくめる、その新しく出来始めたる物も、年を経て用ひなれての心に

は、此物なかりけん昔は、さこそ不便なりつらめと思へ共、無かりし昔も、更に事は欠ざりしなり」。これは一見やさしい文章ですけれども、よく読めば決してさうではない。誰もみな今の心をもって昔を見てゐる。そして、それに気付かずにあるものだ。昔の人の心は、かうであつたらうといふ想像力を働かすのは易しい事ではない。昔の人には昔の人の心といふものがあつたといふことが、なかく／＼わからぬものだ。文字を使ひなれた今の世の心をもって、文字なき世の心を決して測つてはならぬ。次の文を続けて読んでみます。

「文字は不朽の物なれば、一たび記し置きつる事は、いく千年経ても、そのまゝに遺るは文字の徳也、然れ共文字なき世は、文字無き世の心なる故に、言伝へとも、文字ある世の言伝へとは大に異にして、うきたることさらになし、今の世とても、文字知れる人は、万の事を文字に預くる故に、空にはえ覚え居らぬ事をも、文字しらぬ人は、返りてよく覚え居るにてさとのべし」。これは全くソクラテスと同じ考へです。万事を外部的にある文字といふ記号に托して、安心して了ふから記憶力といふ内部の力を働かすことを怠る。記憶力とは即ち精神力である。記憶力が鈍るとは、自発的な精神力が駄目になるといふ事です。過去を自分の力で常によびさましてゐるからこそ、僕は現在生きてゐるのです。けれども、文字といふものに万事を托すと言ふが、今日のその文字の世界をよく見てみよ。それは驚くほどの力を持った世界です。新聞、書物、ラジオ、テレビ、さういふものに、諸君は万事を托して、自分の精神的努力を働か

せない。諸君は空虚な怠惰な物識りになって安心してゐる。

そこでまた、さきほどの文章に話を戻しますが、プラトンには手紙が大分残つてゐます。第七書簡といふのが一番有名で、一番長い。その中で、プラトンは、自分は本当のことをいふと、自分の哲学の第一義、一番肝心なところは書物に書いてゐないと明言してゐる。これは晩年の書簡ですが、その点ではソクラテスと同じ事を言つてゐるのです。自分の知恵が人に伝はるのは、心を開いてその人と語り合ふ時だ。心を開いて、人を信じてお互に語り合ふところに、火花のやうに散る知恵が、本当に生きた知恵だ。さういふ知恵は本などではとても伝へられないから、本に書いたことはないのだと、はっきりその手紙の中で言つてゐるのです。大変面白い言葉で、人間といふものは本当はさうかも知れません。しかし、プラトンの全集には哲学の第一義が全く書いてないといふことになる。あの第七書簡がなくなつても、僕等一般読者は、大して残念にも思ひませんが、「パイドロス」がなくなつたら残念でせう。プラトンの言葉を信ずるなら、そこには哲学の第一義は書いてないことになります。しかしそれを想像することは出来る。僕等にそれを想像させるプラトンの力が、文章、あの対話の魅力にはあるからです。プラトンの著作は対話の形式で書かれてゐる。生きた知恵が対話の間に飛

び交ふ有様が、まざまざ心に浮ぶから、僕等はプラトンを読むのでせう。対話といふ表現形式を決定的にとつて、間然するところのないものに仕上げた、このプラトンの言語表現上の創造力を否定するわけにはいきません。

もう一つ注意すべき事がある。それは対話ディアレクティックといふ言葉の使ひ方です。ディアレクティックといふ言葉は、現在では非常に面倒な哲学の用語となつてゐる。それに比べると、プラトン或はソクラテスの使つたディアレクティックといふ言葉は、まことに簡單明瞭である。僕らが使つてゐる対話といふ日常語の語感を決して離れた使ひ方をしてゐない。信じ合つてゐる人たちが、談笑し、議論する。自分の心を本当にさらけ出して会話をする、その楽しさ真実さ。その中に本当の知恵が行き交ふ、これは誰もよく感知してゐる事だ。あんまり当り前な事は、特に意識してもみないものです、さういふ意味合から離れずディアレクティックといふ言葉が使はれてゐます。これは非常に大事な事です。ディアレクティックといふ言葉を哲学の専門語に仕立て上げて、面倒な言葉にする必要はない。

ソクラテスに言はせれば、このディアレクティックに反対な言葉が、レトリックなのです。ソクラテスが生きてゐた頃は、レトリックといふものが非常に盛んでした。日本語で言へば雄弁術といふことです。議会の演説とか、裁判の弁論とか、さういふところで雄弁をふるひ、相手を説得する。ソクラテスはこれを憎んだ。人を説得するには、その人の思はくを知らねばなら

ない。思はくさへ知り、それに取り入れれば、その人を説得することはわけはない。その為には雄弁が必要だらう。けれども真理を求める哲学にはレトリックといふものはいらない。パイドロスといふ青年は雄弁術を重んじてゐた。アテナイでは、当時、政敵を説得して出世するといふ事は誰の眼にも普通な事だったからだ。従つて、真理を求める道と人を説得する道とは、根本的に違つた道だといふソクラテスの考へは、なかなか受入れるのに難かしかつたのです。人を説得する技術がどんなに進んでも、本当の人間の知恵といふものは進歩するものではない。ソクラテスは、相手を説得しようなどとは全く考へずに会話を進めて行く。パイドロスは、さういふソクラテスと対談するうちに真の知恵を悟つて行くのです。

そこで、ディアレクティック、即ち対話といふものをだん／＼とつきつめて考へて行くと、心を割つて話す相手が、必ずしも現実にゐなくてもいゝでせう。自分自身と話しあへばいゝでせう。だから、対話の最も純粹なる形は、自問自答であると言つていゝわけでせう。それなら、この自問自答といふ事を、更につき詰めて考へて行くとうなるか。答を予想しない問ひはないでせう。あれば出鱈目な問ひだらう。真面目に問ふといふ事のなかで、答がいろいろ考へられてゐるわけだ。従つて問答を突らせる力は問ひのうちにあるといふ事が解つて来るでせう。

中江藤樹は独学といふことをやかましく言った。「君子の学は己の為にす。人の為にせず」と孔子は言ひました。本当の学問といふものは、自分だけを相手にやるものだ。藤樹は非常に独学といふものを重んじた人です。先生など、どんなに沢山ゐても、一人でやらなければ駄目だといふのです。人の為にする学問といふのは、レトリックです。人を説き伏せようとするのは学問ではないのです。藤樹はそれを、文学の欺瞞にかゝった病人だと言つてゐます。

藤樹の代表作「翁問答」の序文に次のやうな事が書いてある。自分の仲間には体充といふ俊秀の人がゐた。「疑問論難やむときなし」。いつでも先生のところ疑問を持って来る。先生が答へると、それに対して論難する。自分はそれに非常に感心した。その疑問論難をあとで筆記しておいた。それがつもりつもって、この「翁問答」といふ書物になったと言ふのです。孔子も言つてゐる。「之を如何せん、之を如何せん」と曰はざるものは、吾れ之を如何ともするなきのみ」、問ふ力を持った生徒でなければ、教へることが出来ないと言ふのだ。

宣長の処女作「あしわけ小舟」も、やはり問答体で書かれてゐます。その問答体の魅力は、すべて宣長さんが自分自身に発した問ひの力にあるのです。世人は歌について、あるひは歌の伝統について、歴史について、いろいろ尤もらしい説をなしてゐるが、疑つてみると全部根底から怪しいものである。その疑問が、あの問答体の「あしわけ小舟」といふ本を書かせてゐるのです。歌の問題につき、「疑問論難やむときなし」といふ宣長の烈しい心持が現れてゐる。

るのです。これを想へば、今日の学校教育の荒唐が何処から来てゐるかがはっきりするでせう。先生は生徒に答を隠した質問しかしないのです。生徒は隠された答を当て物でも当てるやうに当てるのです。これでは問ふ力、即ち発明力が養はれる筈がない。

宣長に「うひ山ぶみ」といふ有名な本があります。これは、宣長が寛政十年に書いたのです。寛政十年といふと、あの有名な「古事記伝」を脱稿した年です。だから、これはあの人の学問の完成した時に書かれた、学びやうの法です。今で言へば学問の方法論だ。彼が達した学問の方法論といふものを、弟子に請はれて仕方なく書いた本なのです。その最後に、歌が一首出てゐます。「いかならんうひ山ぶみのあさごろも浅きすそ野のしるべばかりも」といふ歌です。大概の人は、こんな歌など読みとばしてしまひます。何故読みとばすのですか。宣長の文章には、無駄などといふものは一つもないのです。あの人は非常に文章に注意した人であつて、こんな歌でも洒落に書いてゐるのではありません。これは結論なのです。うひ山ぶみといふのは、昔の修験道の行者が、修業のためにはじめて山に登ることです。あさごろもといふのは、まだ木綿などなかった昔のことですから、そのころの行者はみな麻の衣をつけてゐた、その麻衣です。「あさ」は、麻を浅にかけた詞です。麻衣を着た新米の行者が、はじめて山に登る。山といつても浅い裾野にすぎないが、その道案内にこれを書いたのだが、どうであらうかといふ意味です。宣長は全然自信がないのです。彼は門人に請はれて、誰にでも解り易い学問

の学びやうといふものを示したけれども、自分は甚だ覚束なく思ふと言つてゐるのです。学びやうの法といふもの、今で言へば文学論、学問の方法論を彼は次のやうに述べてゐます。

「さして教へんは、いとやすきことなれども、そのさして教へたるごとくにして、果してよきものならんや、また思ひの外にさてはあしきものならんや、まこと実にはしりがたきことなれば、これもしひては定めがたきわざにて、実はただ其人の心まかせにしてよきもの也。詮ずるところ学問は、たゞ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝはるまじきこと也。いかほど学びかたよくても、怠りてつとめざれば、功なし。又人々の才と不才とによりて、その功いたく異なれども、才不才は、生れつきたることなれば、力に及びがたし。……とてもかくても、つとめだにすれば、出来るものと心得べし。」

ちゃんと、さういふ風に書いてゐるのです。学びやうの法といふものは、説くのはやさしいことだけれども、説いて本当にいゝことか、もしくは説かない方がいゝのか、本当は分りはしないのだ。学びやうの法などは末の事であつて、一番肝要なのは一所懸命怠らずつとめることだとは、分り切つたことではありませんか。この分り切つたことを誰もないがしろにしてゐるのです。さうして学びやうの法をみな聞きたがるのです。宣長は癪にさはつたのですよ。けれ

ども、余り弟子たちに請はれるから、やむを得ず書くのだが、その心持が分ってほしいといふのが、この歌なのです。ところが、その歌をみな読みとばしてしまふのです。さうして、今日の宣長研究家はどういふことをしてゐますか、みな「うひ山ぶみ」を利用して宣長の仕事をわかり易く説明してみせてゐるのです。しかし、この歌のことを書いた研究など一つもありません。けれども、肝心のところはこの歌にあるのではありませんか。宣長は、自分の学問がだん／＼成熟してゆくと共に、誰にでも通用する学問の方法論といふものに対して、だん／＼と疑念を深めていった人なのです。

かういふことが、どうして率直に受入れられないのでせうか。学問といふものは倦まず怠らず年月をかけてはげみつとめることが一番肝要だとは、常識である。学者とか研究者といふものは、みな一番常識的なことを忘れた人間だといふことがよく分るでせう。これが今の学問界です。ソクラテスが説いた常識をみな忘れてゐるのです。人間はだん／＼利口になると常識を忘れるのです。常識など軽蔑するのです。けれども、本当に苦勞した人は常識を磨く事によつて、学識を研いでゐるのです。

質疑に答へて

△問▽ 私はこれまでいろいろな作品に接してきましたが、リアリティといふ点から見れば、やっぱり現実の実感にはかなはないと思ひます。この現実の実感と創作との関連についてはどのやうに考へたらいいのでせうか。

△答▽ たしかに生の経験のうちにはリアリティを一番強く感じる、だけどそれはあまり生々しすぎるのぢやないでせうか。だから創作があるのでせう。創作にはいつでも一つのフォーム（形）を取る。その形に、その生の経験を仕立て上げなければならぬ。創作の喜びといふのは、その経験を形に仕立てあげる喜びです。その喜びは人のためではない、自分で自分の経験を整理したいといふ要求なのです。

「生の経験」といふ、「生だ、生だ」といふけれど、本当は誰もこれについての自覚を持たぬ。経験を味つてみないのです。

人々は何かを経験する、しかしその時は衝撃が強いのでせう。衝撃が強い時はみんな我を忘れてゐますよ。それで自分はその時どういふことを言ったのか、行動したのか、自分にはわからないものです。大体わかるやうな経験は、あまりたいした経験ではないね。私の経験から言つても、例へばこの女と死なうなどと思ふ時に、自分が口走ったことか、自分のやった行動な

どといふものはよく自身忘れてゐますよ。さういふものを自分に納得させるためには一つのフォームがいるんです。そのフォームを作るのが創作です。

人間の生の経験といふものは、みんな自覚してゐないものです。実にだめなものです。支離滅裂なものです。誰も合理的な経験なんてするものぢやない。合理的経験なんてありはしません。経験といふ言葉がさういふ言葉だ。

○
△問▽ 先生はお話の中で、宣長の倦まず怠らず励みつとめるのが肝要だといふ言葉を引用なさいましたが、そのはげみつとめる力はどこからきたのでせうか。それをお聞きしてほくもなんとかやっついていきたいと思ひますが。

△答▽ 理想をもつてゐたんだよね。宣長は。その理想のために怠らずはげまうと思つたんでせう。しかし君に理想はあるの？ 空想はあるかもしれない。しかし空想と理想とは違ひますよ。だが空想と理想はなか／＼區別できないものです。特に若いうちは——。ではこんな話をしませう。

ぼくは理想なんて抱いたことはないんです。ぼくは貧乏でしたからね。ぼくは大学の時から自活してゐました。それは女を養ふためです。ぼくは匿名の原稿を書いてそれを売って暮らしてゐました。そのころは左翼が盛んな時でしたが、私、彼等はみんなお金をもつてゐたのに驚



いた。といふのは彼等は空想してゐたんです。日本を共産化しようといふ空想に燃えてゐた。だが生活には困らなかつた。稼いでゐる者なんか、一人もゐなかつた。その当時ぼくには理想はなかつた。だがさうしてゐるうちにだん／＼ぼくの中から理想が育つてきた。ものを書いてゐるうちにもう少しく書くかと思つてきた。さういふふうにはくはやつてきたのです。それが君への答へだね。君みたいに、どうしたらうまくはげましてもらへるかなどといふことをぼくに質問しては困るのです。

○
△問▽ 先生は今の人はみんな今の心を持って昔の人の心を見てゐて、そこにはまるで想像力が働いてゐないとおっしゃいましたが、では昔の人の心を見るのには想像力だけで充分なのでせうか。
△答▽ 充分です。たゞ想像力といふ言葉をよく考へ

て下さい。想像力といふのは空想力ぢやないんです。空想力といふのはでたらめなことを空想する、だけど想像力といふものの中にはみんな理性がある。そこには、感情も理性も直覚もみんな働いてゐる。さういふ充実した心の働きを想像力といふのです。

昔の人の心になるのはなんでもない。それは人間は変らないからです。たしかに物質的な進歩は大変なもので、それにぼくらは動かされてゐるから、変らない人間をないがしろにしてゐる。しかし人間はさう変わるものではないのです。

変らない人間を発見するのは、昔のものを読むのが一番いいでせう。例へば万葉集を読めば、誰から教へられなくても、必ず何かゞひゞいてくる。それは万葉の心ばへといふものが、やっぱりぼくの中に生きてゐるからだらう。要するにぼくの精神構造といふものが万葉の人と違はないからです。

△問▽ 自分の想像力を信じてよろしいのでせうか。

△答▽ あゝいいですとも。とにかく想像力を磨くのです。想像力は空想力とは違ひますよ。さういふことさへ知れば、君は想像力を存分に働かせていいんです。磨くことができるんです。精神だって、肉体と同じやうに、使はなければだめなのです。

△問▽ 信じることと疑ふこと、それに問ふこととの関連はどう考へたらいいのでせうか。本

を読んでも信じる時には一所懸命に信じて読むのですが、今度はそれだけではいけない、疑ふことも必要だと思ったりするのですが。

△答▽ 大変大きな問題だなあ、ただどさういふふうには抽象的な質問をなさるけれど、君はもういろんなことを信じてゐますよ。君、自動車に乗るだらう、その時は運転手を信じてゐるぢやないか、疑つてゐないぢやないか。疑ふといふけれど本当に自分は疑つてゐるのか、それを疑つてごらん。ちつとも疑つてゐないかもしれない。さういふ身近のことから考へてみたまへ。自分の日常生活の中で。さうすると信ずること、疑ふこと、それがどんなことかが、自分の経験の積み重ねによってわかつてくるやうになります。だからさういふふうには抽象的に質問してはいけないな。質問といふものはむづかしいものだね。

△問▽ 現在、科学といふ言葉が、特に社会科学の場合に、非常に誤つて使はれてゐるやうに思ひますが、科学といふことについてお聞きしたいと思ひます。

△答▽ これもお話すればきりがありますが、現在科学々々と言ふけれど、物理学を一番理想的な形だと考へてゐますね。しかしこんなには物理学が理想的な形になったのは二十世紀になつてから、アインシュタイン以後でせう。その頃から物理学は昔ピタゴラスが考へたやうに「数」になつたのです。扱ふ対象が所謂四次元連続体になつたために、すべてが相対化され「数」

によつて計算できるやうになつた。物理学は理想的な形態を取るに至つた。

しかし経済学、社会学などはそんな純粹な形態はとれないはずだ。その中には人間の欲望だとかその他さまざまの心理的要素がはいつてくる。それを無理に理想的なものにもつてゆかうとすると誤りがでてくるのです。科学といふものが理想的な形を取つてみると、いつでも人間といふ、この厄介なものが科学にはぶら下つてゐる事が、逆にはつきりして来るといふ事もあるのです。だからどういふところまでぶら下つてゐるか、そのけじめをいつもはつきり知つて、それで理性を働かせればいいのです。

○
△問▽ 先生の御研究は、御出身のフランス文学をはじめ、近代文学、古典、音楽、絵画、美術など、広い範囲にわたつてゐると思ひますが、その究極において宣長といふ人間に出会はずを得なかつた、その経緯についてお伺ひしたいと思ひます。

△答▽ それは非常に簡単なことです。ぼくは一生をふりかへつてみて、大体計画の立たない男です。その場／＼に解決していったものの積み重なりがいつのまにかそんなふうになつて行つたのです。ぼくには一つの感動とか直覚とか、そんなものがいつでも先にあるのです。はじめに、非常に明瞭な感動があるのです。これになんとかもつと明瞭な、自覚的なフォームを与へなければいけないと思ふ。さういふ感動がまづ来るのです。つき／＼にさういふものに出会

ってここまでやって来た、それがぼくの人生です。だから全く計画がないのです。

△問▽ 計画がないとおっしゃる中にも、ふり返ってみて、一筋通ってゐる道といふものを意識していらっしゃるのではないでせうか。

△答▽ それはむづかしい問題ですね。ぼくもよく考へますが、やはりゆきあたりばったりがぼくの人生のやうです。もっともずっと一生を通じて計画的に生きてゆく人は多い。しかしぼくみたいな生き方の方が普通ではないでせうか。

よくぼくはぼくのやってきたことを書けと言はれるんです。さうすると困ってしまふのです。あんまり無計画にやってきましたからね。だけど自分の一生をふりかへってみて、ぼくは自分しか出してゐませんね。ぼくはいつでも感動からはじめた、感動といふものはいつでも統一したものです。分裂した感動などいふものはありません。感動してゐる時には世界はなくなるものです。感動した時にはいつも自分自身になる、どんな馬鹿でも。これは天与の知恵だね。感動しなければ人間はいつでも分裂してゐますよ。しかし感動してゐる時には世界はなくなって、自分自身になる、それは一つのパーフェクトなものです、完全なものです。つまりそこで感動してゐるものは個性といふものです。このやうにぼくの書くものはいつでも感動から始めたから、自然、そこにはぼくといふものがあつてせう。ぼくはその感動を書かうとしたのであつて、自分を語らうとしたのではないのです。感動はどこからかやってきた、それを語

ただだけです。だから御質問のやうに、なぜかうなったかといふ筋道をたどることはできないのです。



青年研究発表

友情の世界

三井三池製作所勤務

坂本精児



登山道路に遊ぶ牛

只今、御紹介にあづかりました坂本精児でございます。私は昭和四十九年に熊本大学工学部を卒業しまして、現在三井三池製作所に勤務し産業機械等の設計に当たっております。本日は、私がこの合宿教室を通して知り合った友との触れ合いの中で得ました事を述べさせて戴きたいと思ひます。

私が大学へ入学しました頃思つてをりましたのは、友達を作りたいといふ事と、自分のこれからの生き方を見つけようといふ事でありました。しかし、いざ実行するとなるとどうしたら良いのか判らず、人の話を聞いたり、クラスの仲間がどういふ考へを持つてゐるのか、それを聞くために下宿へ遊びに行ったりしてゐました。又、友達と話すには少しでも本を読み、知識を増さねばならない、それも哲学・社会学等の専門用語を覚えねばならないと思つて、それらしき本を見つけては読んでいったのです。しかし、自由平等とは何か、友情とは何か、人生や社会の在るべき姿は何かといふことについて書かれた本は色々ありましたが、友達と話し合つても私自身が腹の底から「これだ！」と納得するやうな事は、なかなかできませんでした。私は満たされない気持のまま、いっそも考へないで、気楽に過ごさうと冗談ばかり話すやうな事もありましたし、友達の遊びに誘はれるままに付き合つてみたこともありましたが、それで気が紛れる訳でもありません。何か、自分で「これだ」といふ生き方を見つけたい、いつでも心から話し合へる友達を見つけたいと思ひながら、どうしたら良いかわからず、その日その

日を過ぎていったのです。

さういふ時、通学中よく電車の中で一緒になる同じ高校出身の友達と知り合いました。その友達は、色々な本を読んではその感想などをよく聞かせてくれました。それも文学・歴史・科学と多岐にわたってゐます。私は文学や歴史にあまり興味がなかったのですが、あまり彼が熱心に話してきますので、最初は物珍らしく耳を傾けてゐたのです。しかしながら、クラスの仲間等が討論はするにしても、行き詰まると話をごまかしたり、抽象的な言葉を振り回して、したり顔をしてゐるやうな、その中であつて、彼は一つの事を深く突き詰めて行かうとします。又、疑問に思つた事は、その場だけに終らず、ずっと持ち続けてゐるのです。さういふ彼を見るにつけ、この友達は自分の道を着実に歩んでゐるのだといふ感じがして、私は彼に魅かれていったのです。

そんなある日、彼が「これを読んで見ろ」と一冊の本を開いて手渡したのです。その文は幕末の頃活躍した橋本左内といふ人の「択交友」といふ文でした。その中で左内は、「友には益友と損友がある」と言つてゐるのです。私は友といふ問題に関して、ただ漠然と、誰でも良い自分に適した友達はできないものかと考へてゐたのですが、左内が友といふものを益友と損友に分けて、益友といふものを自分で扱ひ大切にしていきなさいと言つてゐる事に目が覚められた様な感じがしたのであります。と言ひますのは、今迄、友を得たいと思ひつつやつてゐたのも、実



は、損友の付き合ひにすぎなかったと気付かされたからでした。友の機嫌を損ねまいと、下手に妥協し、自分から話を合せてゐた事、酒の場や遊びの場だけで、いかにも心が通じてゐるかの様にしてゐた事、又互ひに気持は分つてゐるのだと深く干渉せず馴れ合ひになつてゐた事、それは皆損友の付き合ひ方だと左内は言ふのです。さういふ友は、いざといふ時、何の役にも立たないし、何の補ひをする事もできないと言ふのです。そして、友の付き合ひはもつと敵し

いものであり、自分達の生き方を昨日より今日、今日より明日と互ひに高め合ひ切磋琢磨していく。そして相手の間違ひは鋭く指摘し戒め合っていく。さういふ友は一時的な気休めを言ふのではないし、その点確かに面白くない事や気遣ふ事も多くあるものだ。しかしその友こそ真に自分の事を思つてくれてゐる友であり、本当に大事にしていかねばならないと言つてゐるのです。

私は、この文を読み終つた時、友達付き合ひについての考へを大いに反省させられ

たのです。しかもこの文は、左内が十五才の時に記したもののなのです。当時十九才であった私は友と交はるといふ事に対して、こんなにも確固たる信念を持ってゐた左内に対し、大變驚きを持ったのでした。今迄、友情を論じた本は読んでも、どうした方が良いとか、これこそ友の在り方だといふやうな話はありませんが、この左内の「択交友」の様に益友なのか損友なのかと私の胸に直接問ひ詰めてきた事は初めてなのでした。

この様に付き合ひの在り方を指摘してくれた友は、私にとって正しく益友と思はれました。そして私はこの友に自分をぶっつけてみようと思つたのです。この友と付き合ひ出した事がこの合宿教室へ参加する切っかけともなりましたし、そこで多くの先輩や友と巡り合ふ事ができました。そしてその人達と一緒に勉強会を行つていったのです。勉強会は週一回熊本市の施設や先輩の下宿を借りて行っていきましたが、そのうちに先輩達はいつでも勉強できる場を身近に作らうと一軒の家を借りられ、そこで共同生活を始められたのです。学生四人が寝起きを共にし、炊事も自分達でやる事にしました。私はこの生活を大学を卒業するまで、二年半送つたのですが、私にとって掛け替へのない生活であつたと思つてゐます。

始めた頃は、何とか心を合せてやつていかうといふ気持でゐたのですが、月日が経ち、毎日生活していくにつれ思ふ様にならない事もできます。いつでも心が張り詰めてゐる訳でもありませんから、投げやりな気持になつたり、自分の氣の向くまま自由な生活を送つても良いで

はないかと思ふ事もありました。しかし私がさういふ様に一人で考へ込み、空想に耽る弱気な気持ちになりかけたときにいつもそれを吹き飛ばしてくれたのは、友達と一緒に日本の古典にとりくんだことや、先輩や友達の暖い心に触れたことでした。

古典は色々な本を選んで輪読していったのですが、その中で「古事記」を読んだ時、特に須佐之男命のくだりを読んだ時には、自分の在り方を大いに考へさせられたのです。

須佐之男命といふ神様は、父の伊耶那岐命より海の国を治めよと言はれるのですが、その命には従はれず、自分は死んでしまはれたお母さんの国へ行きたいと、母を恋ひ慕ひ、他の一切に見向きもされず泣き喚かれます。その泣く様は原文で「青山は枯山なす泣き枯らし海河は悉に泣き乾しき」と記してあります。青々とした山を泣き絞って枯山にしてしまひ、海河の水を吸ひ上げて泣き乾した。それ程激しい号泣であったと記されてゐるのです。父の伊耶那岐命は大変怒られ、この国を出て行けと須佐之男命を追放されるのです。この須佐之男命と言ふ神様は、もともと荒々しく乱暴な神様でしたので、他の神々からも追放され最後に出雲へ辿り着かれます。そこで八俣大蛇を退治し、櫛名田比賣と結ばれ平和な家庭生活を始められるのです。

「古事記」に出て来られる他の神々も同様ですが、この須佐之男命も全知全能の神ではなく、私達と同じ様に母を慕ひ、死といふ現実を見つめ、自分ではどうしようもない悲しみ苦し

みに耐へ打克っていかれる神様なのです。そして一人の女性を愛し、家庭生活の安らぎの場を見出していかれます。そこには何の議論を挟むことはできません。どこか別の所に、素晴らしい生き方があるのではないかと理想像を作り冥想に耽ける事や、自分だけ素晴らしい生き方をすれば良いといふ隠遁超脱の人生等、この命の生涯には何処にも見当らないのです。自分の現実にと与へられた運命のまま、悲しみ苦しみを乗り越えて雄々しく生きていかれるその様に、私は大変動かされたのです。私がこんな寮生活ではなく一人でも勉強していけるのではないかと思ったり、自分だけの生活に憧れを見出し、苦しさ煩しさから逃避的になりがちであった気持ちが何とも小さく見えてきたのでした。

さうした古典に接する一方、共に生活していく中で、友達のふとした暖い気持ちに触れる事ができました。訳もなく塞ぎ込んでゐますと、友はどうしたのかと一所懸命心配してくれますし、先輩も私が夜遅く迄試験勉強してゐますと寝ないで付き合つて下さるのです。

又、皆で銭湯へ行った時、誰となく背中を流さうかと互ひに流し合つたりするのです。かうした日常生活の中で友のふとした心遣ひを大変有難く思つたのでした。そして、こんなに自分の事に心を配ってくれる先輩や友に何とか応へていかうと思つた時、自分の心が生き生きと広がっていくのを感じました。

かうした古典や友と接しながら、自分の現実生活の中には、悲しみ苦しみ等、自分の思ふや

うにならない事も沢山あるけれども、そこから逃げてはいけない。今、自分の置かれてゐる現実をありのままに見つめ、自分の心の躍動するままに、物事や人との付き合ひを深め広げていく。そこから本当の生きる喜びが生まれてくると確信したのです。

現在、私は設計といふ仕事をやってゐますが、実際の技術とは、多くの人々の協力のもとに生れていくものなのです。先日、新機種の開発といふ事で、この機械がどこまで耐へられるかと一ヶ月間の連続の試験運転を行ひました。騒音や温度を記録し、徹夜作業を交代で続けていくのです。現場作業者の中には、油に塗みれた定年近くの人もゐますし、何も判らず、言はれた通り働く二十才前の人もゐます。長く徹夜作業が続くと気が苛立ってきて、人に当たったり無理な注文をしてしまひます。しかしそれが成功した時は心からのよろこびを味はふのです。特に油塗みれになって一緒に働いてくれた人々が、「うまくいったな」と声を掛けてくれた時は、何とも言葉に表はし難いものがあります。一つの機械を作るにも幾人もの人の汗があり、人と人とのぶつかり合ひの中より生れてくるのです。かうして私は、一つの事に対し、人と人がぶつかり合ひ触れ合ふ中に、本当の仕事の喜びを見出し、この機械がなければ困ると言はれる様な製品を多く作っていかうと思つてゐるのです。

（昭和四十九年、熊本大学卒・二十六歳）

心のつながりを求めて

鹿児島県熊毛郡上屋久町立
小瀬田中学校講師

大久保 民子



高原の牧馬 2

只今、御紹介いただきました大久保でございます。昨年、鹿児島大学を卒業いたしました。現在、屋久島の中学校に勤めてをります。

私は、大学時代、読んだ本の中に見つけた「なつかしい心持ちで語る」といふ言葉が強く心に残り、それ以来、人と話すときはさういふ気持で話すやうにつとめてきました。特に初めての人と話すときなど、自分自身が、この「なつかしい」といふ気持に帰りますと、すんなり相手の心の中にはいっていきけるのです。まづ、その体験を少し話してみたいと思ひます。

私が大学三年の初め、汽車通学をしてゐた頃のことです。満員で、通路に立ち並ぶ人が多いのに、一ヶ所だけあいてゐる席がありました。見ると、その前に坐つてゐるのは、男の高校生でした。その人は、シャツをズボンの上に出し、かかをつぶした靴を履いて、足は前の座席に人が坐れない程投げ出してゐました。そのため、その前の座席に座らうとする人もなささうなので私は思ひきつて「ここ、あいてゐますか。」と、声をかけてみました。しかし、相変らず別の方を向いたまま、ひと言も答へてくれません。

ところが、下に目をやると、前に投げ出されていた足が、二、三十センチほど引かれてゐるのです。これは座つていいといふことだと思つて私はそこに腰をおろしましたが、そこにほんの僅かながら相手をおもふ心が感じられて、私は汽車から降りるまでにはぜひ、この高校生と話したいと思つて坐つてゐました。

列車がある駅に止まったときでした。窓のすぐ近くに、黄色い花をいくつかつけたサポテンが見えました。朝露にぬれて光ってゐるのが何とも言へずばらしかったので、私は、しばらく見つめてゐましたが、ふと前の高校生の方を見ると、何とこの人も同じサポテンを見てゐるではありませんか。とつきに、「あのサポテン、きれいなね。」と言ひましたら、つぶやくように「あのサポテンも三年目だ。」と言ふのです。「それじゃ、あなたは高校三年生なの。」と聞きますと、初めて私の顔を見て「さうだ。」と言ふのです。その後は、次から次へと私の問ひかけにも、素直に答へてくれましたが、最後には笑顔さへ見せるやうになつたのです。

二度目に、この高校生の中村さんに会つたのは、それからしばらくたつた日の、やはり汽車の中でした。ところが、中村君はその二、三日前に列車で同級生とタバコを吸つたことが原因で退学になつてゐたのです。それで今日は、クラスのみんなにお別れをしに行くところだと言ふのです。就職したら、きつと連絡をすると約束してくれました。約束通り大阪の就職先から、すぐに便りが来ました。その便りの中には、会社は自分が思つてゐた以上に厳しく、どうしても高校を卒業しないと一人前に扱ってもらへないから、もう一度高校に戻りたいといふことが書かれてゐました。あの中村さんに、こんなにもたくましい気力があつたのかと、私は大変嬉しく思ひ、ぜひ復学するやうに勧めました。そのうちに中村さんの切なる願ひが、もとの高校の先生方に通じて、たうとう昨年四月、高校三年生として復学できたのでした。高校の先



生方も、中村さんの態度がまじめになった、もう昔の君ではない、といって喜んで下さったさうです。

私は、中村さんとのつきあひを通して、前読んだ本にあったやうに、なつかしい気持ちを持って互ひに心を開いてつきあってゆけば誰でも本来持つてゐる素直な心で接してくれるやうになるといふ確信をつよめることができました。

ところが、教職の場でおこる問題は、私が大学時代思つてゐた程、簡単ではありませんでした。自分の思ひが、すぐには相手にわかつてもらへないことがほとんどで、何度か悲しい気持ちになりました。中でも最も苦い経験をしたのが、勤めて一年にもならない、今年二月のことです。

そのころ職員会議で卒業式の時に歌ふ歌として、何がふさはしいかといふことが、議題にのぼりました。

そこで私は、以前から考へてゐた「仰げば尊し」を提案しました。他のどの歌よりも趣深く、お互ひに別れゆくときの心情を、これほど清らかに表現した歌は、他にないと思はれたからです。

ところが、何とほとんどの先生方が反対で、すぐさまその場で否決されたのでした。主な理由は、「歌詞が古くて歌ひにくい」「卒業式といふ、門出を祝ふ歌としては悲しすぎる」「自分は仰がれるやうな先生ではない」といふことでした。

しかたなくその日は帰って、もう一度歌詞をよく検討してみました。

はじめに、「歌詞が古くて歌ひにくい」といふ反対意見ですが、私は音楽の時間には昔から歌ひ親しまれ、日本人としてぜひ覚えてほしい歌を、少しでも多く歌はせることにしてゐます。たとへむづかしくても、何度か歌ふうちに、生徒は歌詞をすっかり覚えてしまひます。流行歌にしに関心を示さないと思つてゐた生徒たちにも、このやうな面があることを前々から知つてゐましたので、「歌詞が古くて歌ひにくい」といふ理由は、あてはまらないと思ひました。

次に、「卒業式は人生の門出を祝ふのだから、悲しい歌はふさはしくない」といふ意見、これは、理屈からいへばなるほどさうです。けれども、卒業式の当日となつて、やうやくわかつたのですが、そこでは門出を祝福することを考へる余裕は全くありませんでした。卒業していつてしまふことが、ただもう、無性に悲しいのです。しかし、生徒にとつても教師にとつて

も、別れの悲しみは、十分味はひ尽くすと、自づからそれを乗り越えて生きていく力がわいてくるものです。このやうな人の心の動きを大切に、歌の選択がなされねばならないと思ふのです。

もう一つ、「自分は仰がれるやうな先生ではないから歌ってほしくない」といふ意見です。私自身、未熟で至らないことばかりなのですけれども、生徒はこんな私とも、真剣につきあってくれます。生徒のその気持ちに恥かしくないやう、私は努力しようと思ひます。それが教師と生徒の自然な姿ではないかと思ふのです。歌ってほしくないと主張することは、教育者が当然持つてゐなければならぬ誇りを、自ら捨てることになると思ふのです。

一晚考へてみましたが、やはり私がいちばん歌ってほしいのは「仰げば尊し」であると確信しましたので、翌朝、もう一度考へて下さるやう、お願いしました。すると、「あれだけの人が反対したのだから、もうこれ以上審議する必要はない。『仰げば尊し』以外の歌を考へてきてもらはないと困る。」と言はれ、ゆふべあれだけ考へたはずだったのに、私は用意してゐた言葉の半分も言へず、その上「仰げば尊し」以外の歌の中から選ばざるをえなくなりました。思へば私は、大多数の、絶対にゆづらないといふ意見に、すっかりおびえてしまひ、自分の氣持を十分相手に伝へられずに、たうとう同意してしまつたのです。この苦い経験は、再びくり返したくないと心に決めて、その日は帰りました。

その晩、「仰げば尊し」以外から、何曲かを検討しました。他に考へられるとすれば「螢の光」以外にはありませんでしたので、翌日、この歌を提案しました。しかし、今度も前と同じやうな理由で反対されました。私は、今度はもう絶対によざる気持ちになれませんでした。

ところが、先生方のほとんどは、自分の言葉ではない一般論を話されたり、日教組集団に力を借りた横暴な意見を主張されたりするため、心をうちとけて語ることはできませんでしたし、会議の席での納得のいく討論は、たうていできさうにもありませんでした。

そこで私は、個人的に話して、私の提案に賛同してもらへるやうお願ひすることにしました。学校で語れなかった先生とは、土曜、日曜に家庭を訪問して語りました。初めて一年にもならない若輩者が、キャリアのある先生を前にして語るのですから、随分、生意気だと思はれたこととせう。どの先生にも、快く賛同してはもらへませんでした。「そんなに先生が言ふのだったら、しかたがないねえ。」といふ言葉を聞くと、予想してはゐたものの、無性に悲しくなり、どうしてこないやな思ひをしてまで語らねばならないのだらうと思ひました。

それでも心から納得してもらへたといふわけではなかったやうですが、翌日の職員会議で何とか「螢の光」を歌ふことに決定しました。

会議が終はると、その場にいたたまれなくなつて、二階の音楽室に駆け込むと、途端に涙がこみあげて来ました。一週間の張りつめた気持ちがゆるんでほっとしました。思へば私は、今ま

で先生方と心をわって話すことはなかなかできませんでした。先生方には十分納得してはもらへませんでした。思ひきって一人一人の先生と語っていったことは、私にとって貴重な体験でした。

学生時代、私は中村さんを通して、なつかしい気持を持って互ひに心を開いてつきあっていけば、必ず相手も素直な心で接してくれるやうになると信じてゐました。今でもその気持に変はりありませんが、互ひに心をうちとけて語ることが少ない職場において、自分の思ひを人に伝へ、納得してもらふことは、本当にむづかしいことです。そのむづかしい場にあつては、特に、相手の心に通じるやうに、自分の話す一言一言を大切にして、心の限りを尽くしていくべきだと思ひます。

私はこれから、中村さんとのつきあひや、「**「仰げば尊し」**の問題を通して学んだことを大切にして生きていきたいと思ひます。

(昭和五十二年、鹿児島大学卒・二十三歳)

御製から学んだ事

住友電気工業(株)勤務

布 瀬 雅 義



外輪山暮色

私は昭和五十年に東京工業大学を卒業し、住友電気工業といふ電線を中心に製造してゐる会社に入りました。現在 I E 部に所属してをります。I E (Industrial Engineering: 経営工学) とは品質の良い製品を早く、安く、作る為に、物の作り方や管理の方法を改善する技術です。私の仕事は I E の技術者として社内のいろいろな部門へ行き、その人々と協力して原価低減や品質向上などの問題を解決する事です。入社してから三年間この仕事をしてきましたが、良き上司や先輩にも恵まれ、仕事自体も面白いので非常に充実した三年間であったと思ひます。

しかし自分自身楽しんで仕事をしてゐても、果してこれでよいのかと不安に思ふ事がよくありました。一体自分は仕事を通じて、会社にとって、或ひは世の中にとってどれだけ役に立ってゐるのかと考へると答に窮してしまふのです。たとへば一つの問題を解決して百万円といふ大きな原価低減に成功したとします。毎月百万円づつ余分に利益が入ってくるといふのは個人から見れば大変な事です、会社全体から見れば月々数億円の収益があるのですから、百万円位は誤差のうちと言へませう。

かう考へると自分の仕事の意味がどこにあるのかを見出す事が大変むづかしくなってきました。そして自分の仕事の中でどのやうに具体的な志をたてたらよいのか——今までこれらの事について何度も考へてきましたが、はっきりした解答を見出せませんでした。

ところが先日今上陛下の御歌を拝誦してゐた所、陛下がこの迷ひを一気に吹きはらつてくだ

さったのです。次の三首の御製です。

戦災地視察

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひを忘れてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

国をおこすもとると見えてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

この三首は昭和二十一年、敗戦の翌年に作られた御歌です。陛下の御聖断によってやうやく戦争は終りましたが、その後には史上例のないインフレと住居食糧の欠乏といふ、もう一つの国難が待ちうけてゐました。陛下はこのやうな苦難のさなかにある国民を励まさうと決心されて、全国津々浦々まで巡幸されたのです。「風呂など十日位入らなくともかまはぬ」とか「列車の中に泊まる事もいとほぬ」と言はれて、全国の被災地、工場、炭坑、孤児院、さらには大陸から引きあげてきた人々の開拓地をもまはられました。

一首目の「国民を思ふ心にいでたちて来ぬ」といふ緊迫した御表現からは、国民は一体どのやうに毎日の生活を営んでゐるのだらうか、さういふ思ひに駆られてとるものもとりあへずやうってこられたといふお姿が想像されます。私達が肉親の不幸を聞いて駆けつける時と同じやう



な切迫した思ひがこめられてゐます。陛下が国民を心配されるお気持ちには、私達が自分の家庭を心配するのとまったく同じ「肉親の情」なのです。天皇の御心を古来から大御心と称してきましたが、大御心とは具体的にはこのやうな御心を指した言葉であると私は解してゐます。

二首目の「わざはひを忘れてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ」。国民は毎日の食糧を得るのに精一杯といふ苦しい日々を送ってゐました。また戦争で肉親を失った人々も大勢ゐたでせう。陛下がお見舞ひに来て下さったといふ事に感激して、自分自身の苦しみや悲しみを一瞬忘れ、多くの国民が陛下を出迎へたのです。さういふ民の出迎へを本当にうれしく思はれてゐる陛下のお気持ち「うれしとぞ思ふ」の「ぞ」にこめられてゐます。この句は字余りになつてゐますが、陛下のお喜びがあふれ

て七字にはおさまりきれなくなったもので、かへって自然に感じられます。

この二首の御歌には自分といふものを忘れて国民を思はれる陛下の大御心がにじみでてゐます。また国民も自分の苦しみや悲しみを忘れて陛下を出迎へてゐます。どちらにも自分といふものはない。お互ひに自分を忘れた所でまごころの交流が行なはれ、そこからわきあがる喜びが御歌となつてゐるのです。

この御歌にふれて、私は今までも自分といふものにとらはれてゐたとはつきり感じました。何か世の中に役立つ大きな仕事をしたいといふ気持ちの裏には、常に「自分が、自分が」といふ意識があつたのです。自分が、何か大きな仕事をしたいといふ気持ちと、自分一人ではわずかな事しかできないといふ現実との矛盾——この矛盾は自分といふ個我の意識にとらはれてゐては決して解決できないのです。自分の殻のただけでこの矛盾をつきつめていったら、結局行きつく所は自分一人ではたいした仕事はできないのだから自分と家族の幸せだけを考へていけばよいといふマイホーム主義か、或は逆に早く出世して自分の力だけで世の中を良くしていかうといふ傲慢な生き方しかないのです。自分一人だけで仕事をしてゐるわけではないのに、自分の仕事だけをとりあげて、会社や世の中にとってどれだけ役立っているかなどと考へるのは間違つてゐると気づきました。

現在では組織として一つの大きな仕事をする機会がますますふえてゐます。その為に個我の

意識にとらはれたまま、自分の仕事の中だけに充足感を求めてゐては、結局生きがひも感ぜられず、自分自身が組織の歯車の一つに過ぎないと思ふやうになってしまひます。組織社会になればなるほど、一人々々が個我の壁をのりこえてお互ひに心を通はせ、力をあはせていく事が必要になるのです。そしてそれが人間本来の生き方だと思ひます。個我の壁をのりこえて、お互ひに力をあはせる事によつてはじめて大きな仕事ができるのでせう。その時にこそ本当の生きがひが感じられるのだと思ひます。

ここで思ひだされるのが「和をもつて貴しとなす」といふ聖徳太子の十七条憲法中のお言葉です。このお言葉はよく解されるやうに「なかよくやつていく事が大切だ」といふやうな抽象的な一般道徳を述べたものではないと思ひます。第十条には次のやうな一節があります。

「人皆心有り。心各々執あり。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。」

人といふものはお互ひに個我にとらはれやすい、この事をはっきりと認識された上で「共に是れ凡夫のみ」といふ強いお言葉がでてくるのです。「和をもつて貴しとなす」といふお言葉の裏には、「共に是れ凡夫のみ」といふ痛感があるのです。

太子は六世紀の終りに推古天皇の皇太子として摂政の地位につかれた方です。当時は蘇我氏

をはじめとしてそれぞれの豪族が皆自分達の私利私欲の事しか考へないといふ混乱した時代でした。その中で太子は御自身も他の人々も同じく個我にとらはれやすい凡夫であると痛感されてゐるのです。そして我々はみな個我にとらはれやすい凡夫ではあるけれども、お互ひに個我をのりこえて、力をあはせて乱れた国家を改革していかうと国民に呼びかけられたお言葉が「和をもって貴しとなす」といふお言葉だと思ひます。

和とは勝手に生きてゐる個人々々がたまたま学校や職場が同じだから仲良くやっついていくといふやうな事ではなく、お互ひに個我にとらはれやすい凡夫である事に目覚め、個我の壁をのりこえて心を通はせ、力をあはせていく事だと思ひます。そしてさういふ和の世界さへ実現できれば、第一条の終りにあるやうに「何事かならざらん」(できない事などあらうか)と太子は確信されてゐるのです。

先程紹介させていただいた今上陛下の御歌は、太子の言はれる和がそのまま実現した世界を示してゐます。ひたすら国民の事を思はれる陛下と、自分の苦しみ悲しみを一瞬忘れて陛下を出迎へる国民、その間には個我の壁はありません。太子の和の精神は千四百年後の今上陛下の御歌にそのまま受けつがれてゐるのです。

陛下の御歌に戻ります。三首目の「国をおこすもとると見えてなりはひにいそしむ民の姿たのもし」。もとるとは基礎、なりはひは職業の意味です。陛下は各地で仕事に励む農民、坑夫、

工員の姿をごらんになられたのです。衣食住に事欠き、苦しい生活を送りながらも、黙々と働いてゐる名もなき民の姿に陛下は国家再興のもとゐるはここにあると感じられたのでせう。

私達の父親母親にあたる世代の方々はいふ所から出発して今日の日本を築いてこられました。多くの名もなき国民が力をあはせて黙々と働いてきたからこそ日本復興といふ大きな仕事ができるのだと思ひます。

今度は私達がバトンを受けて、力をあはせて今後の日本を支へていく番です。一人々々は小さな「もとゐる」でも、それらが和の心をもって力をあはせれば国家をも支へる事ができる。

——私はさう信じます。さういふ気持ちで日々の仕事に取り組んでいかうと思ひます。

（昭和五十年、東京工業大学卒・二十五歳）

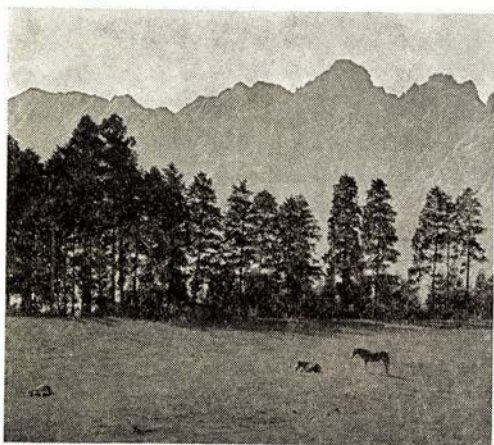


慰霊祭の前に

慰靈祭の体験

九州大学法学部三年

加藤 多夏詩



新緑の小堀牧

私は大学一年生の時に、初めてこの合宿教室で慰靈祭に参加しました。その時は、毎年八月十五日に行はれる全国戦死者追悼式の模様を思ひ浮べてゐたやうに思ひます。多くの花で飾られた、戦死者の御魂をお祭りする祭壇の御前で、天皇陛下がお一人立っておられる。さういった光景です。この光景が目には焼き付いてをりましたので、慰靈祭と聞けば、直ぐこの光景を思ひ出します。

私は小学校の頃より父に従ひ、毎朝神棚を拜んでをりましたし、八月十五日の終戦記念日の正午には、一分間の黙禱を捧げて来ました。従って、戦死者の御魂を前に、威儀を正すといったことは至極当然のことだといふ気持ちがあったやうに思ひます。

かうして大学の一年生の時に、この合宿教室に参加したのです。その時の感動は大きかったです。それは佐世保で行なはれた合宿です。御講義の内容がどれもこれも新鮮で目を見開かれる思ひでした。その中でも、国民文化研究会の理事長であられる小田村寅二郎先生の「日本人の祖先は日本人である。」といふ御言葉には強く心動かされ、身体に火をつけられたやうで、心の中に眠り続けて来た何か大切なものが呼び覚まされたといふ感じでした。それ以来、日本といふ国について思ひを巡らすやうになり、またそれが喜びともなりました。その時迄、別段深く考へもせず使つて来た「祖先」「日本人」といふ言葉に生命が宿るのを覚えたのです。かういった感動の中に、三日目の慰靈祭があったやうに思ひます。従って、合宿の中での諸先生方の

御講義の内容、班別討論といったものを除いては、この時の慰霊祭を語ることは出来ないやうに思ひます。これが私の最初の慰霊祭の体験でした。

ところで私は、四月以来九州大学の教養部近くにある「大観塾」といふ、学生だけで共同自炊生活をしてゐる一軒の家で、毎週金曜日に開かれてゐました輪読会に参加して来ました。これがこの合宿教室に参加する直接の契機となつたのですが、合宿後もそれに参加し続け、合宿教室で生命が宿る思ひのした「祖先」「日本人」といつた言葉の他に、「先人」といふ言葉を知りました。「先人」といふのは、近くは先の大戦で国を護らうとされて亡くなられた方々を始め、私達の前に生きられ、国を支へて来られた人々といふ意味です。先輩方と共に、私も「先人の生き方に学ぶ」「先人の志を偲ぶ」といふことがどういふことなのかを考へるやうになつたのです。かうして週一回の輪読会を続け、昨年二度目の夏の合宿教室を迎へることになりました。

昨年の合宿教室に参加された方は御存じだと思ひますが、昨年の慰霊祭は雨に見舞はれ、例年のやうに屋外で篝火を焚いて行なふことが出来なくなりました。そこで急遽大広間に祭壇をこしらへて、そこで慰霊祭が行はれたのです。電灯が消された暗闇の中で、一同深く頭を下げて最敬礼をしてをります時に、突然、雷が部屋中に轟き、あたかも御魂の御声のやうだったのです。その時私は、御魂のお叱りを受けたやうな気がしました。「お前は本当に今、御魂を



お偲びしてゐるのか。」かう聞えて仕方がなかった。その時の私の気持ちに曖昧なところがあったのでせう。雷の音に一瞬たじろぎました。これを機に、何とか慰霊祭に対する私の気持ちをはっきりさせた、と思ふやうになったのです。

かうしてゐる内にこの三月、国文研から、戦中学徒遺詠遺文抄『いのちささげて』（国文研叢書19）が出版されました。十二名の、戦中に戦死された方や病死された方、終戦後自刃された方の数々の短歌、詩、書簡、論文等が収められてゐます。これらの遺詠遺文を読むと、その方々の御姿が彷彿として来ます。そして、この時の心の働かせ方が慰霊に通ずると思ふと、慰霊祭の場では、祭りごとを精一杯行なふこと、それが慰霊といふことではないか、さう思つたのです。さう思ひながらこの御本を読んでゆくうちに、慰霊しなければといふ気負ひから解き

放たれたやうに思ひます。そこで「いのちささげて」の最初に出てまゐります、海軍少尉寺尾博之さんの御歌を読みながら、皆さんと一緒に御魂をお偲びしたいと思ひます。

寺尾博之さんは終戦直後の昭和二十年八月二十日未明、福岡市郊外の油山といふところで、海軍技術中佐長島秀男さんと共に、敗戦の責任を一軍人として痛切に感じられ自刃された方です。それ以来三十年余の間、寺尾さんを慕はれる方々が毎年八月二十日にはこの地に集はれ、寺尾さんをお偲びするといふことが続けられてゐます。始めは、生前寺尾さんに直接間接に付き合ひのあられた方々のみによる集ひでしたが、年とともに、それらの方々の御家族、教師になられた方はその教へ子、そしてその友人といふ具合に、集ふ人の輪も拡り、今日に到つてをります。私も一年生の時、輪読会の先輩に誘はれて以来、二度この慰霊祭に参列してをります。さういふこともありまして、この方の御歌をお選び致しました。

最 後 に (昭和十八年)

大竹の駅に迫りぬつきくと懐しき人をしぬぶそのまに

人々の深きみなさけいたゞきてすぎこし生をたゞにかしこむ

限りなき大御心をしぬびまつり仕へまつらむ生くる限りは

大竹といふのは、広島県西部、山口県との県境近くにある町です。戦前そこには海兵団があったのですが、そこに入団される為、汽車で向はれてゐる時の御歌です。

二首目の御歌ですが、ここで「人々」とうたはれてゐるのは、寺尾さんのお父さんであり、お母さんであり、友人達であったのでせう。さういった方々と共に生きて来られたといふ、誰もが経験してゐる生活体験を「深きみなさけ」とうたはれ「いたゞきて」とうたはれ、心から、ありがたうございました、と今迄の友との、家族との生活を振り返られる。さういったお気持ちで国を護る任に就かれる寺尾さんの誠実な生き方が偲ばれて来ます。安定した歌の調べが、その儘寺尾さんの真心を伝へてゐると思ひます。

三首目。この「大御心」といふのは天皇陛下の御心のことです。「限りなき大御心をしぬびまつり」といふ御言葉に、寺尾さんの陛下をお慕ひするお気持ちの強さが読みとれます。そして、陛下の御心になんとしてもお応へしたい、さういふ素直で、はっきりとした御気持ち、入営に当り「仕へまつらむ生くる限りは」といふ自然な言葉の調べとなつてうたはれてゐるやうに思ひます。

かうして一首の歌でも、それを読んで寺尾さんの生きられた御姿を思ひ描かうとしてゐると、歌の言葉がいきいきとして来ます。

最後に寺尾さんの遺歌をもう二首読みまして、私の話を終へたいと思ひます。

(昭和十八年)

倒れたる友を嘆かずいつの日かあもたどりゆく道と思へば

生き死にをこえてつらぬく日の本の丈夫男子の行く道ぞこれ

「あも」といふのは「私も」といふ意味です。共に泣き、肩をたたきあつて喜んだ友人を失ふことは悲しいでせう。しかし、寺尾さんの御気持ちはそこに滞ってはゐない。涙を拭き、いつの日か自分もたどつてゆく道だと思へば、と友人、先人達の生き方に自分も連なつてゆかうとされる。そこに丈夫男子として生きることの喜びを、はっきり感得してをられた、寺尾さんの生命溢れる生き方を感じることが出来るのではないでせうか。

この寺尾さんの御歌をお偲びする気持ちをその儘に、たゞ今から行はれる慰霊祭に臨みたいと思つてをります。

国民に注がれる皇室のみこころ

海上自衛隊勤務

鎧

信

弘



刈干と根子岳

ただいま御紹介にあづかりましたかすがひ鏡かすがひです。私は日頃、明治天皇の御製を拝誦してをります。ただいまも

思ふこと思ふがままに言ひてみむ歌のしらべになりもならずも

といふ陛下の御歌を念じて、勇氣を得てこの壇上に上りました。

私は、この三月までは八ヶ月の間、防衛大学校で研修をしてをりました。一緒に勉強してをりました研修生は、皆、気さくで真面目な人ばかりだったので、私が皇室や君が代の話を致しますと、なかなか分ってくれない人があります。私は今の日本には御皇室や陛下が本当に慕はしくてならなくなるやうな教育は、どこにおいてもなされてないのだらうかと悲しい気がしました。

さて、この四月に母校の熊本大学に海上自衛隊からの派遣で研究のために参りまして、久しぶりに熊本の我家に帰りました時、次のやうな嬉しいことがありました。それはかういふことです。いまここにもってまゐりました「心の雫」といふ本を手にしたのです。これは私が高校生の時に一度読んで、大変心を動かされた本です。実はこの本には私の祖父のことが書かれてゐるのです。身内のことを言ふのはいささか気がひけますが、私はこの本を読んで祖父は本当

に情の深い人だったのだなあと思ひました。この「心の雫」といふ本には、昭和六年頃に祖父たちが行った社会福祉事業について、その一端を物語風に書いてあるのです。しかし、この事業は社会福祉事業を充実しようといふやうなスローガンが最初に掲げられてなされた事業ではないのです。この当時は、町の中に乞食をしてゐる人や、癩病の患者の人がをりました。身近かに本当に胸の痛むやうな境遇にある人々が多くなるたのです。さういふ人を、同じ市民として見るに見かねて、なんとか助けようと、民間の有志の方々が力を合せてやった事業なのです。この有志の方々も一市民として毎日の仕事を持った人々で、決して裕福な人々ではありませんでした。したがって、至れり尽せりの救済はできなかったのですが、心のこもった事業であったやうです。祖父についてこの本に書いてありますのは、「家なき哀れな子供」といふ題です。動物同様の寝る家もないといふ乞食生活をしてゐた少年を、祖父が救って肉親の元に返してやった話なのです。まだ両親の元で甘えてゐたい年頃のみなし子を、本当に哀れに思つてなんとか肉親の元に返してやりたい、さう願つた祖父は、半年間一軒一軒家を訪ねまはつてやったのださうです。

この話を讀んだ時、私は祖父に会へたやうな気がして嬉しくなりました。この本を今年の四月に家に帰りました時、再び読み返してみたのです。そしてその時、この事業は実は皇室の御心を体して行はれた事業であることを知つて、大変嬉しく思ひました。この人々は、当初、熊



本市方面委員と呼ばれました。これが今日の民生委員制度のはしりです。

この民生委員制度の五十周年に際しまして今上天皇は昭和四十二年に次のやうな御歌を歌はれてをります。

民生委員制度五十周年にあたりて

いそとせもへにけるものかこのうへもさちうすき
人をたすけよと祈る

「いそとせも」といふのは、五十年もといふことです。大正十年頃から昭和四十二年の今日で五十年も民生委員制度が続けられたのだなあと思はれてゐるのです。「この上も」以下は、今まで積み重ねてきたものを受けて、なほ一層不幸な人たちを助けていって欲しいと祈つてをられるのです。同時に、幸薄き人を助け

よと陛下御自身強く言ひ聞かせるやうに祈つてをられるのです。

私は、学生時代、昨日、青年研究発表をなさいました坂本精児先輩たちと一緒に、熊本大学の信和会の学生で作つてをります時習義塾で、生活を共にしてきました。その塾の玄関を出て石段を上つてすぐの所にリデル・ライト養老院といふのがあります。ここは、以前は、癩病患者の收容所でした。リデルとその姪にあたられるライトといふ方々は、オーストラリアから来られた看護婦で当時一般にあまり顧みられなかつた癩病患者の人々に、一生を捧げ尽されたのです。ところがこのリデルとライト女史の癩患者の療養所に今上陛下の御母様の貞明皇后様が御下賜金を賜はれました。そこは、今美しい花園があり、御歌歌碑があります。すぐはいれる所ですので学生時代、坂本さんと一緒によく行ったものです。そこへ、昭和三十三年に、今上陛下が御出でになり、次のやうな御製を作つてをられます。

リデル・ライト記念養老院を訪ひて

母宮の深きめぐみを思ひつゝ老人^{おいびと}たちの幸祈るかな

「母宮の深きめぐみ」といふのは、貞明皇后が、恵まれない人たちに対し、深い慈しみの御心を御持ちであつたことを今上陛下が偲んでをられるのです。母宮の深き恵みを思はれなが

ら、身寄りの無い老人たちの幸福を一心に祈ってをられるのです。

数年前のことですが、皇太子殿下と美智子妃殿下が熊本においてになりました。その時に、癩病患者のゐる恵風園に慰問に行かれました。癩病といふのは、体が腐っていく病氣であります。伝染病ですので隔離してある病院です。癩患者と言へば、普通の人は近付くのを怖がる病氣です。しかし、両殿下はベッドに寝たきりの年老いた癩患者を訪問してまはられたさうです。同行してゐた新聞記者が皇太子殿下が手にはめられてゐた白い手袋を脱ぎ、癩患者の老人の手を握って励まされる姿に心打たれたといふ記事が出てをりました。

貞明皇后が深き恵を、恵まれない老人たちに注がれたやうに、また今上陛下は恵まれない方々の運命を御自分の運命のやうにお受けとめになつてゐます。それと全く同じやうに皇室の慈しみを國民に注ぐといふ伝統が、皇太子殿下にも受け継がれてゐることを知り、私は非常にありがたく思ひました。このやうな喜びに触れることのできる日本に生を受け、自分が海上自衛官となつてゐることに深い誇りを感じます。

そして、戦前戦後と変らず今上天皇は國民に慈しみを注がれ、そして、皇太子殿下もそれを受け継いでをられるやうに、私も、今上天皇の御心の雫を受けてゐる國民の一人として、皇室の御心を体して恵まれない人々に尽した祖父の心を受け継ぎ、奉職する場は違つても日本國のために、力一杯尽していききたいと思ひます。

さて、皆様、既にご存知の和多山儀平さんは、実は私の先輩になります。和多山さんは私の母校熊本大学の前身である旧制熊本高等工業学校を卒業されました。卒業と同時に海軍予備学生として帝国海軍に身を投ぜられました。私も熊本大学工学部卒業と同時に技術幹部候補生として海上自衛隊に入隊しました。

お手元に、和多山儀平さんの遺書がありますが、その遺書の四行目に「天皇陛下万歳」と書いてあります。国民に厚き大御心を注がれる天皇のご存在に、自分のいのちよりも更に尊い価値を和多山さんが見出されてゐたからでありませう。遺歌の二首目は次の歌です。

君のためのち死すともしきしまのやまとしまねをとほに護らむ

「君のため」といふのは、ほかならぬ天皇陛下のためにであります。「いのち死すとも」といふのは、天皇陛下のために自分のいのちはたとへ死んでも悔いはないのだといふ心がこめられてをります。そして、「しきしまのやまとしまね」つまり歴代の天皇方と国を思ふ私たちの祖先によって護り継がれたこの日本を護るのだといふ不動の決意を詠んでをられます。

私は冒頭で申しましたやうに、明治天皇の御製を拝誦したり、今上陛下の御製を拝誦する時に、心の底から天皇陛下万歳と叫びたくなるほど感動することがあります。また、皇太子殿下

が人間の体が腐っていくといふ恐ろしい伝染病である癩病患者の老人の手を握りしめてお励ま
しになったことを知った時、天皇陛下万歳と叫びたくなるのと同じやうな思ひがしました。
それにつきましても海軍軍人の和多山儀平さんの遺書の二行目にある

生きて神洲の防人となり、死して護国の鬼とならむ

といふ言葉は、海上自衛官である私に残してくださいましたやうに、私は受け止めてをります。
最後に、和多山儀平さんの遺書の一部と遺歌を読んで終りたいと思ひます。

生きて神洲の防人となり、死して護国の鬼とならむ。身は南海の空に桜花と散るとも魂は永
遠に国土に留め祖国を護らむ。

天皇陛下万歳

大日本帝国万歳

君のためのち死すともしきしまのやまとしまねをとほに護らむ

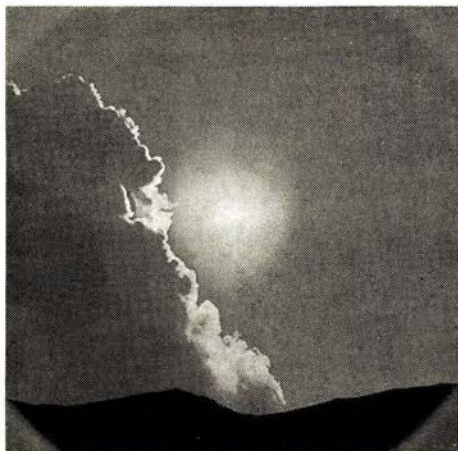
「いのちささげて」 発刊にあたって

横浜市・舞岡八幡宮宮司

関

正

臣



朝日と噴煙

私はこのたび国民文化研究会から出版されました『いのちささげて』といふ書物を御紹介申し上げながら、かねがね考へてをりますことの一端を述べさせていたゞきたく壇に上りました。

「亡くなった友人の記録を出さう」といふ話は戦後間もなく出てゐたのですが、去年の暮に漸く原稿整理が終つて今年の二月出版と成つた次第です。今年は戦後三十三年。死んだ人は三十三年経つと仏さまに成るさうですから、さういふ不思議な巡り合はせの年に、再び甦つて来られたことになります。

標題は『いのちささげて』と名付けましたが、私共は、国民の在り方は「いのちをささげる」ことに極まると考へて居りますので、それを実行した方々の文集の標題はこれ以外にはあるまいと些か自負してをります。これは「いのちかけて」とは違ひます。「いのちがけ」とは「一所懸命」の「懸命」であつて繰返すことが出来ませんが「いのちささげて」と成ると、其の時もはや肉体はないのです。では何にいのちを捧げたのかといふことは最も大事な問題ですから逐ひ／＼申し上げることに致します。

ここに収録された方々は私共の友人十二名、年齢は十七歳から二十九歳まで、此の度の大東亜戦争に戦死された方、その間に病死された方、さらに終戦直後に自刃された方を含んでゐます。このやうに年齢もなくなられた状況も学歴もみな別々ですが、唯一点において固く通ひ合

つてゐる。それ故にこそ此の御本に集結したといへませう。その一点とは「日本を守りたい、守らずにはをられない」といふ念願であります。そして其の念願のまにまに御自分のいのちを国のいのちに捧げられたのです。

「国のいのち」とは之らの方々にとっては抽象概念ではなくて実感でした。それは一人々々が天子さまの大御言葉、大御歌を常々、直接に仰いでをられたからです。いのちをささげると申しますが、その「ささげる」といふ言葉を「犠牲」と同様に考へるのは誠に粗忽な考へであつて、「ささげる」といふのは本来、「喜び謹んで差し出す」といふことですから、崇高無類な精神の発露であつて、世界の人々がすべて尊んできた生き方なのです。それは、日露戦争が終つて間もなく、日本が日本の軍人のものに先立ってロシア軍人の忠魂碑を建てたこと、今度の戦争の折、オーストラリアが、自分の国の軍港シドニーに突入した敵国日本の特殊潜航艇の乗員を海軍葬を以て弔つたことに依つても知ることが出来ます。

外国に於ては、夫々のしきたりがあるのでせうが、日本に於ていのちを捧げる対象は天皇なのであります。

いくさは敗れました。従つて日本は守り得なかつたことに成ります。然し其の「日本」とは国土ではなく国体であり国柄なのですから、守らうといふ念願が成就したかどうかといふ問題は、戦争といふ相對現象の結果とは次元が全く別なのであつて、現に生きてゐる者全員に委さ



れて継続中なのです。

従って此の念願を持つ者は、戦前であらうと、戦後であらうと、「天皇^{かみ}上に^{おほ}に在^おしまし、国民挙^あつて仕へ奉る」といふ、日本人共通の在り方に没入するだけなのです。かういふ日本人の在り方は、遠い昔、記録の上で極く内輪に見ても、千二百年、即ち「大君の命かしこみ」と謳^{うた}った万葉時代に遡^{さかのぼ}ることが出来るのです。

このやうな念願は、大東亜戦争中は、実に鮮やかに躍動してをりました。その例を一つだけ御紹介いたします。開戦直前、聯合艦隊がハワイ作戦発動の会議をした時、司令長官・山本五十六は、「日米交渉が妥結したら直ちに引返す」と訓示した。ところが此の時は艦隊はすでに動き出してゐたので、この訓示に対して異議を唱へた者がゐた。問、髪を容れず長官は厳然として、「此の場で辞職せよ」と裁断を下しました。そこには、開戦の御詔勅が出されてゐない時点におけ

る、研ぎ澄まされたやうな慎みがかがへると思ひます。「大君の命かしこみ」といふ万葉の人々のおもひが現代に継承されてゐる実証として是非心にとゞめていたゞきたいエピソードです。

ではこの書物の中の一部をかいつまんで、御紹介いたしませう。

この中には先程も申し上げました通り十七歳で病に斃れた少年の遺稿も収められてゐますが、その方が十四歳の時に作られた和歌があります。今で言へば高校二年生の時のものです。題は「天長節」（本書三五三頁）

けふの日の喜び鳥にもあるごとく嬉しげにも飛ぶ鳥のこゑ

「天長節」とは「天皇誕生日」のことです。皇后さまの御誕生日を「地久節」と申しますが、いづれも祈りのこもった名称であることに心をとめて下さい。さて其の当日の鳥が「嬉しげにも」飛んでゐる、といふのです。其の声を、耳を澄まして聞きながら、目を輝やかして鳥の動きを追つてゐる作者の姿が浮んできます。「喜び鳥にもあるごとく」といふのは、自分、といふより国中が、喜んでゐるからなので、それを鳥に投げかけて、鳥と一体になつてゐるのです。国民がよろこびを一つに味はふことの出来たすばらしい時代の表現として心に残る歌だ

と思ひます。

次に二十四歳の東大生、この方も病気でなくなられたのですが、その遺言を読んでみます。これは臨終の枕許におられたお母さんが書きとめられたものです。（本書四三七頁）

皆様ノ厚イ情ケニカコマレテ死ンデユク。今マデオ導キ下サツタ事ヲ心カラ感謝スル。オ国ノタメ思フ様尽セナカツタノガ残念ダツタ。同信ノ諸兄ハワレノ志ヲムダニシナイデシツカリヤツテクレ。ホンタウニオセワニナツタ。

と云ひ、そのあとに添へられた歌が二首、その二首目の歌は

コトキレルイマハノキハモスメクニノヤスケキヤウイノルカナ

とあります。息が続かず字足らずですが、息絶える今はきはの際に、日本の安らかな発展を祈る一学生の切実なおもひが、一つ／＼の言葉から惻々と迫って参ります。

どなたかの御講義にもありましたやうに、いのちとはつながりであります。いのちは断たれたくない、然し個人の肉体は必ず消え失せる。だが日本の国のいのちだけはいつ迄も続いて呉

れ。それでこそ自分は、いつ迄も生きてゆけるのだ——といふ安心感。それを私共は「神洲不滅」といふ言葉に託して生きてきました。だから「神洲不滅」とは一部の人々がいふやうに世界はどうなってもいい、日本だけは滅びないのだといふ優越感や、神がかりの超国家主義の表現ではなく、祖国日本がいつまでもく続いてほしいといふ切実な念願の表現なのです。旧制の熊本高等工業学校を卒業して軍務に服してゐた二十二歳の青年は、そのやうなおもひを次の日記や歌の中に書きとめてゐます。(本書二七二頁)

熊本駅頭に帽を振って送って来られた父上の面影と、ブリッジの下に黙って頭を一度下げ、そのまゝ見送られた母上の面影は如何にしても忘るゝ事は出来ない。そしてこの回想こそ私の戦斗意志の源泉であつた事を今更回想してゐる次第である。

友らに

おきていのりふしてぞおもふますらをのかなしきねがひ神もみそなはせ
すめくのにのみ代やすかれとひたいのるおもひにつらなり生きゆく今はも

最後に、私自身の読後感を若干加へさせて頂きます。第一に申し上げたいこと、それはら

の方々の念願は、現に生きてゐるといふことです。しかしそのやうな念願を蹂躪しようとする動き、端的に言へば革命への動きが既にはじまつてゐる。其の一例は靖国神社国家護持をめぐる問題です。「九段で会はう」といふ約束は、当時の軍人や家族すべての人々のものなので、戦死者は其の願ひ通りに靖国神社に祀られました。それを一部の政党のみならず、政府自体が敬遠するやうな態度に出ることは、実に憂慮すべきことだと思ひます。国内ではそのやうに国のいのちを断ち切らうとする動きが顕著になつてをりますが、今年の二月十一日、「建国記念日」の奉祝式典には四十一ヶ国の大使公使が参列してくれました。その代表、ギニア大使の祝辞の一節に次のやうな文章がありました。

アフリカ大陸には古代からの文化や伝統を持つてゐる国が多い。さういふ所から来てゐる者として、第一代神武天皇即位以来二六三八年といふ日本の歴史伝統を高く評価する。

といふのです。ギニア共和国は二十年前西暦一九五八年に独立した国ですが、この国の大使の祝辞には何ともいへぬ羨望や詠嘆がある。世界の人々はそのやうな目で日本の歴史を見てくれる。この日本の悠久の歴史は外国の人の目には見えてゐる。ただそれを見る目をもたないのは日本人だけではないか。実に残念なことですが、何とかして日本の歴史をうけつぐ道を切

り開かなければならない。そして戦死者の念願を断ち切るやうな革命への動きはいかなることがあっても防ぎとめなければいけない。そのことを強く懇へたいのです。

今夜は間もなく慰霊祭が行はれますが、死者を慰めるといふ鳥濱がましさを捨てて、いのちを捧げた方々に学びつゝ、務め続けようではありませんか。昭和三十一年に始められた此の合宿教室の出発そのものが、戦死された方々のおもひを「受け継がう」といふところにあったのです。

まとまらないお話でしたが、この名もない青少年のおもひを書きとゞめたこの一冊の書物が、日本歴史の上では勿論、世界にも通じるすぐれた価値をもった貴重な史料であること、そして又現在を生きてゐる私達を励まし導いてくれる大切な書物であることを是非申し上げたかったのであります。どうか是非座右に備へてお読み下さるやうに、心からお願ひしてお話を終ります。

第二十三回「合宿教室」

のあらまし

(附) 一年の歩み

大阪大学文学部四年

絹田洋一

九州大学医学部三年

長澤一成



合宿地に立つ明治天皇御製の幟

「合宿教室」までの一年の歩み

昭和五十二年八月十日、雲仙での合宿教室の幕は閉ぢられた。それから一年の間、私達は一一人の生き方が問はれるやうな様々な問題に直面しなければならなかった。雲仙での合宿直後、バングラディッシュのダツカ空港に於て、連合赤軍によるハイジャック事件が起こり、政府は彼等の要求に従つて、奥平純三以下、強盗殺人犯を含む六名を釈放、彼等の手に渡した。この事件は単に国内のみの問題に留まらず、諸外国から、改めて国際社会に於る日本の「信義」を問はれることになったにも拘らず、国内ではマスコミ次元の問題に終始し、時が経つに従つて、人々の脳裡からいつのまにか忘れ去られたかの様である。「今、私達日本人の生き方が問はれてゐるのだ。」といふ国民的自覚もない儘、対蹠的な、小手先の対策がとられたばかりであった。

思へば、日本人は今、己の物的な幸福のみを追ひ求め、眞の生き甲斐とは何か、自分が生きる価値は何処にあるのかといふ事を問ふことすら出来なくなつてゐるのではなからうか。「人命尊重」といふ叫びは、殺し文句の如くに横行してゐるが、生命の価値を真剣に求める姿勢は、社会にも、又大学にもなかなか見られないのである。

さらに、三月廿六日、開港直前の成田空港で、過激派のゲリラ活動によって管制室が破壊されるといふ事件が起こった。此処でも又、事件に関はる本質的な問題は問はれず、機動隊と過激派の対決といふ事で決着がつけられたかの様である。

このやうに、問題は次々に生起し、場当りのな解決が後手後手になされて行くその中で、人々は次第にばらばらになってゆき、人生のバックボーンとなるべき言葉や、先人の生き方を互ひに求め合ふ力を失なひつゝあるのではなからうか。現在は一見平静を取り戻したかに見えるが「平静」といふ言葉に隠された精神の衰弱は覆ふべくもない様である。

一方、社会の動きを反映するかの様に、学生の多くは、目先の功利にとらはれ、大学は学問の場たるよりは、単なる技術修得の場にならうとしてゐる。其処に学ぶ多くの学生は、一体自分分は、大学で何を学ぶのかといふ問題に真向ふことなく、「自分さへよければいい」或ひは、「他人の生き方には干渉しない」といった、空虚な空気に支配されてゐると言つても過言ではない。そして、空虚は享楽で埋められ、一日一日が徒らに過ぎて行つてゐる。我々は同じく大学に学ぶ者として座視出来ぬこの状態の中で、先人の言葉を学び、其の生き方に一歩でも近づかうとする学問と友情の輪を拵げようと、各地の大学で様々な活動を展開して行つた。

歴史を学ぶとは、取りも直さず先人の言葉を学ぶことであり、この言葉の学びが、己の生き方を正して行く基である。しかし、残された言葉から今は亡き人の心を汲み取ることは、一人

の人間の知識と想像力と諸々の力の全てを出し切っても尚、余りある仕事である。
 我々はその、言葉に対する感覚の練磨を、輪読や短歌創作に求め、一人でも多くの友を誘ふべく私達の学生生活は展開されて行った。新しい友も加はり、秋もたけなはの頃、各地で地区別の合宿が開かれた。

△地方合宿▽

主催	年月日	場所	参加大学
熊本信和会	昭和29年 10月29日～31日	人吉「観蓮寺」	熊大・熊商大・鹿大
福岡信和会	10月29日～30日	油山「椿荘」	九大・西南大・福岡大
大阪信和会	11月4日～6日	大阪北郊「持経寺」	阪大・大阪芸大 京産大・広大
東京信和会	11月5日～7日	三浦海岸「丸長荘」	東大・亜大・早大 中央大・慶大・東工大 駒沢大

早大信和会	西南・福大 信和会	九大信和会	九大信和会	鹿児島 信和会	東工大 歴生会	早大積誠会	福岡信和会
6月17日～18日	5月6日～7日	4月29日～30日	昭和1753年 3月17日～18日	12月3日～5日	12月3日～4日	11月26日～28日	11月26日～28日
神奈川県「津久井保養所」	油山「椿荘」	油山「椿荘」	葦牙寮	始良郡「加治木荘」	渋谷青少年研修会館	伊豆「つりばし荘」	東郷神社「養真閣」
早大	西南大・福岡大	九大	九大	鹿大・熊大・西南大	東工大・慶大	早大	九大・福岡大・西南大 福教大・九産大 九州共立大・熊大 鹿大・阪大・広大・亜大

このやうな日々の研鑽を積みながら、昭和五十三年を迎へた。

一月には、大学の現状を各地のリーダーが持ち寄り、何とか新しい息吹きを吹きこむ為に、全国で学んでゐる友人達と一堂に会し、大学に学ぶ学生として直面してゐる問題を披瀝し合ひ、来るべき阿蘇合宿へむけ、皆の心を一つにすべく春季合宿が計画された。合宿地は昨年同様、福岡市北郊の宮地嶽神社である。

合宿参加者の内訳は左の通りであつた。

△東日本▽ 高崎経済大・東工大・亜細亜大・慶応大各1・早稲田大3

△西日本▽ 大阪大・京産大・大芸大・岡山大・広島大各1・九大9・福岡大2・西南大3

熊大5・鹿大4・計三十五名

△国民文化研究会▽ 十一名

総計 四十六名

三月廿四日、三十五名の学生が夏合宿以後、大学の中で直面して来た問題を胸に、緋寒桜の咲き残る宮地嶽神社に集まって来た。そして、その手には、戦前・戦中を通じてマルキシズムの嵐が吹き荒れた大学の学風改革に、一命を賭して当られ、行半ばにして戦陣に、或は病に斃れられた先輩方の遺稿集「いのちささげて」があつた。

合宿は、自己紹介、リーダー学生発表、討論と進んで行った。学生リーダー発表では、「いのちささげて」の中、東京帝大ではげしい思想戦を展開、昭和十九年南太平洋で戦死された吉田房雄さんの「象牙の塔に闘ふ」の一文が取り上げられた。空漠たる大学の現状は決して今に始まった事ではない。「詩もなければ宗教もない、世界観もなければ政治もない。徹底した空漠さが大学の全雰囲気を成してゐる。戦ふか、妥協するか。何れか一途しか残されてをらぬ。高文と就職と結婚とのためにのみ存在するやうな贅沢物、これと戦へぬやうな青年が果して何の役に立つであらう。」「僕は思ひ切つて戦ひを宣言したのであった。此のままニコ／＼と卒業してゆくことは、余りにも大きな罪悪だと信じたからである。」そして、その戦ひは、二年に亙る友人達との「全身の力を振りしぼつた」研究に支へられ、展開して行った。

私達は、この遺文の中に吉田さんの非常な覚悟を感じとり、又、現在の大学が、戦前、戦中のそれと本質的には何等変りのない事を知り、取り組まねばならぬ問題の大きさに、襟を正さしめられるやうなおもひであつた。

翌廿五日、福岡県立三池高校教諭、志賀建一郎先生が登壇された。先輩は「自分の身の廻りで不正な事がなされてゐるとき、先づ『おかしい』と言葉を発する事が、私達の人生には大切な事だと思ふ。自分は学生時代、様々な事をやったが、会ふ人ごとに、一緒に本を読まうと呼びかけ、常に自分を曝け出すことによつて人と付き合つて来た。」と語られた。そして、最後の討

論では、今回の合宿でも紹介された寺尾博之さんの遺歌の一首一首に心を傾け、読み味はって行った。ここにして皆の心は一つに統一せしめられ、四月からの苦しい日々にかけての気持ちも定りつつあった。

翌廿六日は、下関より国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生に御越し戴き、「いのちささげて」に登場される数名の方々について御話戴いたが、今はなき友をしのび、せきあげる涙をこらへながら話をすゝめられる先生のお姿に参加者一同身体からだのふるふやうな感銘をおぼえ、限りない力をめぐまれるおもひであった。

又、夕刻、東京より国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授、小田村寅二郎先生が駆けつけて下さり、一時間半に亘って御話し戴いた。先生は「戦後の日本の様な状態で三十三年間も独立を保ち得たといふのは歴史上未曾有の事であり、アメリカとソ連の力の均衡による僥倖にすぎない。」と語られ、更に「古事記」神武天皇の御東征の項にふれて「もう好い加減で一人一人が『長寝ながいしつるかも』と目を醒まさうではないですか。」と強く訴へられた。

次の四首の歌は早稲田大政経二年、内海勝彦君がその折の感銘をよんだものである。

ただならぬ世の有様を述べらるる師の御気持ちの伝はりて来ぬ
日の本をささふる人となれかしとふ師の御言葉に目さむる思ひす

古事記なる長寝しつるかもとふ言の葉を思ひ出しつつ学びゆきてむ
 思ひ悩み長寝をしつる時あらばともに励まし進まん友よ

△春季合宿日程▽

3月26日(日) 第三日	3月27日(月) 第四日
	就 寝
(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食	
輪 讀	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食
晝 食	所 信 發 表
寶 邊 先 生 御 講 義	合 宿 に む け て
質 疑 應 答	晝 食 閉 會 式
小 田 村 先 生 を 囲 ん で	後 片 付 け
入 相 夕 浴 撲 食	
小 野 先 輩 發 表	
短 歌 鑑 賞	
夜 の 集 ひ	

「合宿教室」のあらまし

		3月24日(金) 第一日	3月25日(土) 第二日
		春季合宿日程表	6:00
7:00			(起床) 朝の集ひ
8:00			朝食
9:00			リーダー発表
10:00			全 体 討 論
11:00			
12:00			
13:00			晝 食
14:00			志賀先輩 御講義
15:00			質疑 應 答
16:00	開 會 式		全 体 討 論
17:00	自 己 紹 介 所 感 發 表		
18:00	夕 入		夕 入
19:00			食 浴
20:00	學生リーダー発表		輪 讀
21:00	及 び		
22:00	全 体 討 論		
23:00			
0:00	就 寝	就 寝	

かうして参加者の心は一つとなり、四月からの大学生活に対する覚悟も定った。かくて、翌廿七日には閉会式を終へ手を振り交はし、名残を惜しみつつ、各々の地へと別れて行った。「たまきはるいのちはつねにつながるとおもへどかなしわかるるときは」といふ先人のうたにこめられたおもひが合宿を終った時の友らの感慨であった。

尚、男子合宿と併行して、三月十一日から三日間、長崎の市街を一望できる風頭山・「太郎の家」で女子合宿が開かれた。三月中旬とはいへまだ小雪の舞ふ中、二十八名の女子学生がこれに参加した。一日目、鹿児島大学教授川井修治先生が「大東亜戦争で亡くなられた方々は後の世の人を頼みにして亡くなってゆかれたのであり、後の世の人とは他ならぬ私達なのだ。」と前置きされ、諸政党の現実にすぐはぬ国防意識や世界の現勢を主軸に、一般に楽観的な国防観が蔓延する現下の日本の危機を訴へられ、「治に居て乱を忘れず」の教訓を忘れてはならないと強く述べられた。二日目、山田輝彦先生が「現代の思想」と題し、現代の思想の要因は古く明治末からの、国の概念の脱落した、西洋思想一点張の極端な流れの中に自然主義、社会主義、人道主義として生まれ、是正される事なく今日に至ってゐる。しかしながら、さういふ指導者や知識人達の意識とは別に、名も無い民の心の中には綿々として国の行末を思ふ同胞としての一体感が続いてゐたのであり、そのやうな日本人の心の底流にあるものを大切に守り育ててゆかねばならないと説かれた。又、小柳陽太郎先生は川井先生の御講義を踏まえて「国を思ふ」と

いふことに触れられ、「国とは人々がそれ以外に生きてゆけない世界であるといふ現実を目ざめねばならぬ。さうであればこそそこに濁りが生じた時、敏感に『いけない』と思ふ。その心の痛みを大切にしていただきたい」と述べられた。又、今回は志賀建一郎先生がおみえになり「古典と私」と題し古典輪読の導入講義をされ（『国民同胞』昭和五十三年八月十日号掲載）、和歌創作導入講義は、青砥宏一先生が和歌を通しての「自然とのつきあひ」といふ事を御話しいただき、合宿地に関はりのある今上陛下の御製四首を紹介された。

長崎復興

あれはてし長崎も今はたちなほり市の人びとによるこびの見ゆ

長崎の宿にて

長崎の港見おろす春ゆふめぐりの山は霞たなびく

長崎市の街路樹

この町のなぎさの竝木をながめつつ暖かき国としみじみおもふ

長崎にて

唐国^{からくに}ゆ伝はりにける竜をどりは楽^{がく}に合はせて荒れ狂ふなり

そして四月になった。大学に様々な不安と期待を持った新入生が入学して来た。私達は「大
 学で何を学ぶか」といふ学生にとって根源的な問題を提起しつつ、講演会、輪読へと参加を呼
 びかけて行った。しかし、成田空港事件で勢ひに乗った左翼学生、更には活動家迄もが大学構
 内に入り込み、一部の大学では、新入生のオリエンテーションの時間がヘルメットと覆面をし
 た一団に占領されるといふ事態も生じた。だが大学側はかかる事態に手を下さうとはせず、職
 員、教授も彼等を遠巻きにし、小さな声で批判するばかりであった。このやうな事態の中で、
 私たちの呼びかけも、時として、野次と怒号の中で続けて行かねばならなかった。しかし、合
 宿へむけて一人でも多くの学生の参加を呼びかける運動は、各地で七月半迄、間断なく続けら
 れた。

△講演会▽

主 催	年 月 日	場 所	講 師・演 題
鹿児島大学信和会	昭和 1853年 2月 18日	鹿児島大学会館4階ホール	林健太郎先生(前東大総長) 「世界の中の日本文化」
熊本大学 信和会	4月 22日	熊大教養部A-11	北島照明先生(藤園中学教諭) 「学生生活と学問」

九州大学 信和会	5月10日	九大教養部学生会館ホール	片岡健先生(熊本西高校教諭) 「大学で何を学ぶか」
西南大学 信和会	5月31日	西南大4号館102番	小野吉宣先生(嘉穂高校教諭) 「大学で学ぶべきもの」
熊本商大 信和会	5月20日	熊商大721番	志賀建一郎先生(三池高校教諭) 「若き日の吉田松陰」
鹿児島大学 信和会	5月20日	鹿大教養部101号	平岡貞吉先生(鹿大教授) 「日本人と学問」 川井修治先生(鹿大教授) 「新しく学生生活を送る諸君に」
熊本大学 信和会	6月3日	熊大教養部A-11	小柳陽太郎先生(修猷館高校教諭) 「明治の精神」
大阪 信和会	7月1日	阪大教養部ロー11	小柳陽太郎先生(修猷館高校教諭) 「歴史と人生」 「いのち」 にふれるよるこび」

△以上、長沢一成記▽

開会式まで

第二十三回学生青年合宿教室は、昭和五十三年八月四日より八日までの四泊五日に亘って、熊本県の阿蘇国立公園で開催された。会場は、ホテル「阿蘇の司」。火の山阿蘇の頂上を仰ぎ、緑濃い山々を車窓に見下しながらやってくる参加者を待つのは、遙かに広がるカルデラ草原の中にあるこのホテルである。草原を遠く取り巻くのは外輪山、横たはる釈迦の姿にたとへられてゐるなだらかな稜線が美しい。合宿開会の三日前、「事前合宿」に参加する三十余名の幹部学生が、会場に集合した。全国から新しい友を迎へ、班長・副班長として班を運営していかねばならないこれら幹部学生の顔は、皆緊張してゐる。合宿教室に臨む決意を述べる全体所感発表後、三十余名一同に会しての討論、輪読が続けられた。合宿教室に於て実現したいと願ふ、班友との心をうちわつた語りひ、それはまず、この三十余名の研鑽の場に於て実現されねばならない。先輩後輩の差を越えて疑問が提出され、卒直な感想が述べられ、時に厳しい指摘がなされていった。そしてわずか二日の間に、五十余名の学生の中に確かな一体感が生まれ、新しい友との心の交流は、困難ではあつても必ず実現出来る。その確信は、皆の胸に刻み込まれたのである。翌日は、合宿開催準備の為の作業に充てられた。班室表示や仮名簿の作

成、椅子の運搬等、準備は手際よく進められる。玄関前には「友よ！と呼べば友は来りぬ」（三井甲之）と大書された横断幕が掲げられ、風に翻ってゐる。夕刻、作業完了。あとは全国から集ふ四百名の友を待つのみとなつた。参加者の内訳は次の通りである。

（学生班 五六大学）（洋数字は参加学生数）

早稲田大27 東京大1 筑波大1 亜細亜大19 中央大11 高千穂商大5 高崎経大4
 慶応大3 青山学院大3 国学院大2 日本大2 順天堂大2 明治大1 法政大1
 玉川大1 駒沢大1 東洋大1 津田塾大1 惠泉大1 防衛大1 神奈川大1
 東海大1 日赤中央女子短大1 名古屋大1 名古屋工大1 国立名古屋病院附属看護学
 校1 皇学館大1 京都大1 京都産大3 立命館大1 大谷大1 大阪大3
 大阪芸大1 奈良女子大1 岡山大4 作陽音大2 広島大4 島根大1 山口大4
 九州大38 福岡教大14 福岡女子大4 西南学院大24 福岡大16 九州産大2
 九州共立大2 中村学園大1 佐賀大7 佐賀医大4 長崎大14 熊本大17 熊本商大6
 熊本女子大1 大分大1 宮崎大2 宮崎医大1 鹿児島大25 高校卒1
 計 三〇一名（うち女子 六八名）

（社会人班・教員班） 会社員・公務員・小・中・高校教員・大学職員など 計 三六名

（招聘講師） 三名 （大学教官有志協議会） 四名 （国民文化研究会） 八三名

8月6日(日) (第3日)	8月7日(月) (第4日)	8月8日(火) (第5日)
(起 床) 朝 の 集 ひ 食 朝 朝 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 食 朝 朝 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 食 朝 朝 食
(講義) 「感想一本居宣長を めぐって」 小林秀雄先生 (質疑 応答)	(講義) 「天皇の御歌と 日本の国柄」 小柳陽太郎先生	志賀建一郎運営委員長挨拶
		全 體 意 見 發 表
記 念 撮 影	班 別 討 論	「合宿をかへりみて」 小田村寅二郎先生
		班 別 懇 談
班 別 討 論	班 別 討 論	感 想 文 執 筆 第2回和歌創作
晝 食	晝 食	閉 會 式 (晝 食)
「和歌創作導入講義」 高木尚一先生	(講話) 松本唯一先生	
	(講義) 「しきしまのみち」と 學問の任務 小田村寅二郎先生	
阿蘇中岳登山 和歌創作	班 別 討 論	
夕 食 入 浴 散 歩	地 區 別 ・ 大 學 別 懇 談	
	夕 食 入 浴 散 歩	
慰靈祭のまへに (加藤・鏡・関)	「和歌全體批評」 長内俊平先生	
慰靈祭の説明 並びに執行	班別・和歌相互批評	
班 別 懇 談	夜 の 集 ひ	
(就 床)	(就 床)	

「合宿教室」のあらまし

第二十三回「合宿教室」日程表		8月4日(金) (第1日)	8月5日(土) (第2日)
	6:30		(起 床) 朝 の 集 ひ
	8:00		朝 食
	9:00		(講義) 「現在の経済學と 當来の經濟學」 木内信胤先生 (質 疑 應 答)
	10:00		
	11:00		班 別 討 論
	12:00		晝 食
	1:00		青年研究發表 (坂本、大久保、布瀬)
	2:00		「輪讀導入講義」 夜久正雄先生
	3:00	開 會 式	
	4:00	學生所感發表	班 別 輪 讀
	5:00	班別自己紹介	
	6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩
	7:00	(講義)「精神の自立と再 成のために—自虐史觀か らの脱却—」 山田輝彦先生	「吉田松陰先生の遺文」 奥富修一先生
8:00		班 別 輪 讀	
9:00	班 別 討 論	班 別 討 論	
10:00	(就 床)	(就 床)	



会場をめざして集ってくる学生たち

(参観者) 一名 (事務局) 一二名

総合計 四四〇名

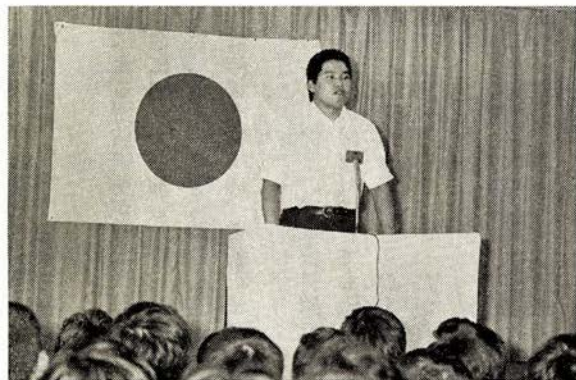
参加者は、合宿申込書のアンケートをもとに七名乃至九名を単位とする班に編成され、各班に事前合宿参加学生が、班長として割り当てられた。男子学生班は二十八箇班、女子学生班は八箇班、社会人班は五箇班、国文研班が二箇班作られ、さらに数箇班を単位とする五つのブロックが設けられた。ブロック長には各地区学生リーダーが当り、運営委員との検討会が常時持たれて、各班の情況が報告された。

八月四日、いよいよ合宿開催の日が来た。続々と会場に到着する友、期待と不安の入り混じった複雑な表情が見えるのは、初参加の学生であらうか。

午後二時半、参加者は講義室に集合し、開会式が行なわれた。早稲田大学社会科学部三年阿川信次君の力

強い開会宣言の後、国歌斉唱、続いて「戦時平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊」に対し、一分間の黙禱を捧げた。次いで主催者を代表して、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が「大学の格差や地位の差など、私達の外側にはりついでるものを払ひ捨てて、互ひの心を通はせ合ふ、さういふ、心の平等の世界」をこの合宿で実現して下さい。そして日本人が本来持つてゐる心の働きを再確認していただきたい。さらにこの合宿で人と人のつきあひ方の基本、常に相手の身になって考へるといふ生き方や、話を交すとき相手の目を見て話すといふ話し方を是非身につけてほしい。」と挨拶された。

続いて参加学生を代表して、熊本大学工学部四年、原田保君が登壇し、「自分自身が感じたところから話してゆくことが大切です、どうか一人でも、心を通はせ得る友を見出して行って下さい。」と参加者に訴へ



所信表明をする早大の内海君

て、開会式は終了した。この後、福岡県立三池高校教諭・志賀建一郎合宿運営委員長から、合宿趣旨説明及び合宿運営委員の紹介があり、次に熊本県立八代高校教諭・白浜裕指揮班長から、合宿諸注意がなされた。

十分間の休憩をはさんで、今回初めて、三名の学生代表による所信表明が行なはれた。

まず、福岡教育大学教育学部四年・谷口敏子さんは「合宿に初めて参加した時、スリッパを揃へて脱ぐ様に教へられました。この様な行為にこめられた、他人の事を考へる心遣ひ」は、合宿の基本的な精神に通ふと思ひます。」と述べ、さらに昨年の合宿での、班員のまごころに触れた体験を語っていた。

次に、大阪大学文学部四年の絹田洋一は、二年前の合宿の折に佐世保の海軍資料館で特攻隊員の遺書を読んだ時の感動を述べ「遺書を手にした母親の悲しみが偲ばれ、とても戦争を許す事は出来ないと思ひました。しかし、その後合宿における一人の先輩とのつきあひの中で特攻隊員の、身を捧げても祖国を守りたい」といふ言葉がいかに真実のおもひであったか身にしみて理解できたのです」といふ体験を語った。

最後に、早稲田大学政経学部三年・内海勝彦君が「昨年の夜久先生の御講義で、先生が茶谷武といふ戦死された方の遺書を読んでゆかれた時、私ばかりでなく、隣りの学生も涙を流してゐるのを見て、まごころのこもった言葉は必ず人に伝はるのだといふことを強く心に刻みまし

た。この合宿で、お互ひに実感のこもった言葉を交はし合っていていませう。」と力強く呼びかけた。

この後全参加者は各班室に入り、自己紹介及び合宿参加動機等について語り合ひ、「日本への回帰・第十三集」の輪読に入っていた。

講義・講話

第一日目の夜、合宿導入講義として、福岡教育大学教授・山田輝彦先生が登壇された。演題は「精神の自立と再生のために——自虐史観からの脱却」である。先生は、敗戦後の日本人が、自国の歴史に対する過度な罪悪感を払拭出来ない、いはば「自虐史観」に陥つてゐるのではないか、と指摘され「日本国憲法は、有機的な生命体として国家を見失ひ、無制限に拡大された自我を最終的な価値としてうたつてゐるが、現在この様な人間観が、公的な価値基準となつてゐる。」と述べられた。次に、明治時代の国木田独歩、石川啄木、夏目漱石等の文章を示されながら、個人主義、或ひは社会主義思想が日本に浸透してくる過程をたどつてゆかれ、「個我を主張するあまり、かへつて人間の心が死に瀕してゐる現代において、他への共感こそ、人間を復権する道である。」と、演壇から身を乗り出して訴へられた。そしてこれを妨

げてゐるものが、歴史を図式化して見、形の表面を剥ぎ取ってみないと気がすまない考へ方であると説かれ、最後に先生の戦前の御友人であり、昭和十九年十一月、戦死された和多山儀平さんの遺書を読まれて「己れの生命を犠牲にしてきた故人の姿に触れてはじめて、本当に人間に対する確信が生まれるのです。諸君と同じ年頃の戦没青年が、かういふ遺書を残して死んでいったといふ事を、どうか虚心に考へていただきたい。」と切々と訴へられた。

第二日目は世界経済調査会理事長・木内信胤先生の御講義から始まった。先生には今年で連続十九回御出講いただいたをり、今回の演題は「現代の経済学と従来の経済学」である。「経済学が病気にかかつてゐる」とは、先生が年来主張されてきた事であるが、まず「現代の経済学」の「パラダイム」（思想の枠組）を明らかにされ、「現代の経済学は普遍性と抽象性、法則、客観性（実証）を重視する、これは「科学主義」に立ってゐると見てよいが、常に自然科学をめざし、高度に専門化されたにもかかはらず、「円高」「不況」といった現実の全体的な問題に対して、全く解答を出せない。それは、この人間社会を作つてゐるものは「心」を持つ人間だからである。」と指摘された。そして現実社会を理解するには「一葉落ちて天下の秋を知る」といふ言葉通り、部分を見て全体を「直観的に」悟る以外にない。」が、この様なもの見方は、世界のあらゆる文明を統括してきた日本文明の中にある、と述べられ、この日本固有の文明を「物事を分析したり、言葉で説明したりしよう」とせず、たゞあらゆるものを美し

さにおいて感じとる事を窮極の願ひとしてゐるやうな文明である。」と表現された。最後に「私たち日本人がここに立ち返り、本来日本がなすべき事をやっていくことが、現在の世界にとって必要とされてゐるのである。」と述べられて、御講義を結ばれた。

午後の日程に入り、亜細亜大学教授・夜久正雄先生の輪読導入講義が行なはれた。先生はテキストである、黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』について、「黒上先生の御研究は、太子の御言葉の中に自分の生きてゆく道を求めてゆかうとされるものでした。」と紹介された後、輪読の意義について、「輪読は、一人々々がそれまで抱いてゐた考へを述べるのではなく、言葉のひびき、を聞きとって、今自分が感じてゐる事を互ひに披瀝し合ふことが大切なのです。この時皆の心が通ひ、古典の心に触れることが出来る、これが十七条憲法の『事を論あげつらふに諧かなひぬる時は、則ち事理自ら通ふ』といふ事ではないでせうか。」と、御自身の体験に基づいて語られた。続いて本文に入り、「動乱の生に随順せし情意的人格」といふ言葉を、「須佐之男命」をはじめ『古事記』の神々英雄に偲びながら味はってゆかれた。

夜の古典講義には、「境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し——獄中における吉田松陰の遺文——」と題して、東急建設技師・奥富修一先生が登壇された。「自分が会社の中の歯車の一つとしか思へず悩んでゐた時、松陰先生の著書を読み返す機会があり、以来、自らの生活に照らしつつ読んできました。」と話し始められ、松陰の略歴と当時の国情を辿られた後、

野山獄での松陰の姿を熱を込めて語ってゆかれた。さらに「境順なる者は怠り易く、境逆なる者は励み易し」（講孟余話）を引かれ、「現在の学生は、まさに順境の中にあると言へるのではないでせうか。その中において本当の物を掴むか否かは、君達自身の責任であると思ひます。野山獄における松陰の学問に対する姿勢、生きざまを皆さん一人一人の心で掴みとって下さい。」ときびしく訴へられた。

合宿三日目にはいよいよ文芸評論家・小林秀雄先生が御登壇になられた。この合宿教室で御講義をしていただくのは今回で五度目に及ぶ。参加者一同緊張して見守る中を、先生は静かに壇上に進まれ、お話を始められた。昨年、大著『本居宣長』を完成された先生は、宣長の文章をいかに読み込まれたか、又「読む」といふことがいかに難しいかを、沁々と語られた後、プラトンの『パイドロス』のお話に移られた。神話を



記念撮影の折の小林先生（中央）、木内先生（その右）

ありのままに受け取め、又「対話」を重んじた点において、この両洋碩学の姿勢は全く一致してゐたのである。「本居宣長は『古事記』の神話を全部信じた。これはアレゴリー（寓話）ではない、一所懸命考へた昔の人の思想である、と考へたんだよ。」「僕の知恵が働くには、心を開いて語り合ふことしかないんだ。信じ合つてゐる者同志が心を開いて対話する、そこに真実が火花の様にきらめくのです。」穏やかな先生の御口調はいつしか熱を帯び、確信に満ちた鋭い言葉を次々と投げかけられる。私達は息を呑んで聞き入った。殊に先生の「対話」についてのお話は、今この合宿教室で学んでゐる私達にとって、何よりの励ましとなつたのである。最後に先生は、宣長が『うひ山ぶみ』に書き添へた歌に言及され、「宣長は、本当はこの様な方法論を語るには大変懐疑的だった。ただ、倦まず怠らず励み勉めることが学問の大事である、と言ひたかつたんです。」と述べられ、参加者に質問を求められた。この後約一時間、質問に懇切にお答へ下さる先生のお姿に、私達は再び深い感動を受けたのである。

四日目は、福岡県立修猷館高校教諭・小柳陽太郎先生の御講義から始まつた。先生は「天皇の御歌と日本の国がら」と題して、まず「今日、多くの国民の心から、戦前戦後を通じて一貫してゐる『日本の国柄』が見失なはれてゐる。」と述べられた後、前日の小林秀雄先生のお話を引かれながら、「戦前の憲法における『天皇』、現行憲法における『天皇』といふ、二人の天

皇に分ける事は出来ない。天皇御自身はお変はりになるはずはない、その一貫した天皇の御人柄をお偲び申し上げることからすべてははじまる。」と訴へられた。次にポツダム宣言が、軍隊の無条件降伏を迫るものであって、日本政府に無条件降伏を迫るものではなかったことを指摘され、それは天皇を中心とした日本の結束を動かし難いと判断した為である、と述べられ、さらに、当時の国民の心を留めた様々な記録と、終戦時の御製、戦災地視察の御製などを誦みあげてゆかれ「陛下の国民を思はれる御心に国民が応へてゆかうとする、この君臣が感応し合ふ姿こそ、日本の国柄」と呼ぶべきものではないでせうか。」と語られ、「国民と喜びも悲しみも共にしてをられる陛下のまごころにいかにお応へするか、我々の進む道はここにあると思ひます。」と結ばれて、長時間にわたる御講義を終へられた。

その日の午後、小田村理事長の御講義にはいる前に、**熊本大学名誉教授・松本唯一先生**に「明治の学生」といふ題でお話いただいた。先生は八十六歳といふ御高齡にもかゝはらず、実にお元気な、はりのあるお声で、国家の運命に自己の全存在をとかしこみながら生きてきた明治の青年の姿をお話いただいたが、特に旅行先の満洲で明治天皇の御崩御のしらせをお聞きになった時の御体験、御大葬の時の御柩の車が闇の中をきしる音を、いま、ありありと聞くやうなおもひでお話になった時には参加者すべて、全身をゆすぶられるやうな感銘をうけたのである。なほ先生はその日の夜の「最後の夜の集ひ」にも御参加いただいたとき、その席上蘇軾の「前



班別の討論

赤壁賦」全文を朗々と詠じていたのだが、その抜群の記憶力と稜々たる気骨と巧まざるユーモアに心うたれない者はるなかった。

合宿教室最後の講義は、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生による「『しきしまのみち』といふ学問の任務」と題する御講義であった。先生は初めに、合宿に臨む私達の心に「構へ」が無かったかと問はれ、「本来のあるがままの自分の心にたち返って、人の話や先人の文章に接する努力をして下さい。」と話された。続いて「戦前と戦後」「戦争と平和」「差別と平等」等の様に、物事を単純な「善と悪」の対立概念に分けて考へる戦後思潮の欠陥に対して、鋭しい批判を加へられ、これに取ってかはるべき「敷島の道」について「敷島の道は、まごころを大切にしてきた日本人の伝統である。」と述べられた。そして万葉集に繰り広げられた真の平等の世界、さらに明治天皇の御

製に言及され「現代の学問の世界を風靡してゐるものはすべて西洋の学問であり、上つ代の国の姿は全く忘れられてゐる。」と話された。最後に小林直樹東大教授の天皇に関する論文をあげて、その不誠実、傲慢な姿勢を指摘され、「人のまごころの分らない人間が、自分の権威だけを信じて語るといふのが現在の学問界なのです。果してこれでよいのでせうか。」と憂憤をこめて訴へられた。

班別輪読・班別討論・和歌創作

合宿教室では、先生方による御講義の他に、学生相互の研鑽の場が多く設けられてゐる。その一つが班別輪読である。テキストは、第一日目は『日本への回帰・第十三集』、第二日目は黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』であつた。

黒上先生の御著書の輪読箇所は、『古事記』を引かれつつ、民族の生命を論ぜられてゐる部分であつた。その文章は『古事記』と同様、簡潔で、力強い。音読してゆくと、言葉の美しい調べが伝はってくる。その後一語一語を正確にたどりながら、著者のどの様な思ひが込められてゐるかを憶念してゆく。言葉の意味、文章の脈絡は難しいが、疑問を出し、感想を述べ合ひながら、皆で力を合はせて、少しづつ吟味してゆく、するとやがて、一つの言葉に、一人で読

んだ時には思ひも及ばなかった深い意味が込められてゐたことに気づかされるのである。すでにこの時この言葉はその人にとって、「生きた」言葉となつてゐる。忘れ難く心に刻み込まれたこの様な言葉こそ生きる力となり、支へとなるのである。

講義の後には、班別討論が行なはれた。私達は日頃学内の討論などで、概念的な用語のやりとりや、強引な自己主張を耳にする事が多いが、相手に勝つ事を目的とするこの様な議論では、自分の心を他の心に通はせてゆくといふ姿勢は、全く見られないのである。しかし合宿教室では、自分自身の体験に基づいた率直な思ひを、心を開いて語り合ひ、そして友の言葉に真剣に耳を傾けてゆく、といふ努力がなされる。ここに、友と共感し合へる、広やかな世界が実現されるのである。

講義、輪読と共に、短歌創作・相互批判は、合宿教室においてきはめて重要な意義をもつてゐる。第三日目、阿蘇登山に先立って、高千穂商科大学教授の高木尚一先生による短歌創作導入講義が行なはれた。先生は初めに「和歌を作る上で大切なことは、自分の思ひを率直に詠むことです。この時、自分の心の動きを見つめる意志の力を必要とするのです。」と、和歌を作る心構へを話された。次いで万葉集の防人の歌を誦まれ「忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも」について、「この歌を昭信会の先輩に初めて紹介された時、歌のしらべに大きな衝撃をうけました。この歌が、一信海に繋がらんとする思ひを生んだのです。」と、



和歌の批評をされる長内俊平先生

次第に涙をうかべられながら語ってゆかれた。さらに黒上先生の遺歌、明治天皇御製をあげられて、「飾らぬ歌は必ず人の心を打ち、その感動によって私達は作者の心を直に知る事が出来るのです。」と述べられて、御講義を終へられた。

導入講義の後、全参加者はバスで阿蘇中岳へ向かった。友と語らひながら、ごつごつした岩に覆われた坂道を登ってゆくと、噴火口をのぞかせた阿蘇の雄大な光景が広がる。地底をのぞき込み、或いははるかに外輪山を眺めながら、皆思ひ思ひに和歌創作に励む。緊張した合宿の中の、心なごむひとときであった。

この時作られた歌は、先生方や事務の高校生の徹夜の作業で分厚い歌稿となり、翌日は全員に配布された。四日目の夜、国民文化研究会の長内俊平先生によって、和歌の全体批評が行なはれた。参加者は心を一つに集めて、先生の楽しいお話に聞

き入った。先生が作者の気持ちや丁寧にくみとられながら添削してゆかれると、歌は次々と見ちがへる様に生き生きとしてくる。中には愉快な歌もあり、場内はしばしば爆笑につつまれる。この様な中で私達は、自分の心を正確に表現してゆくことがいかに難しいか、さらにどのやうな歌が私達の心にひびいてくるのかを実感したのである。

特にそのお話の最後に「歌といふものは嘘がつけません。嘘がつけないといふことがわかった時にはじめて、天子様がそのみ歌を本当に心からおつくりになってゐることが信じられるのです。」と話された後、「日本から天子様がなくなったら、日本はもうないのです。天子様のお心に沿って、大和心を磨いていかうではないですか。」と訴へられたが、聞く者の胸底にひびくやうな先生のお言葉の力強さに深い感動をおぼえた。

この後各教室では、班員の歌を詠みながら、相互批評を行った。作者は歌に詠んだ自分の気持ちを語ってゆき、皆は友の心に思ひをはせて、力を合はせて、より正確な表現を苦心してさがしてゆくのである。かうして一緒に苦しむのは、何と楽しい事であらうか。この楽しみは学生々活では到底味はふことの出来ないかけがへのない体験であった。

和田正人君（島根大二年）は感想文に、「友の作った歌を何度も何度も読み、その人と同じ気持ちにならうとする努力をしてゐるうちに、今までの自分と何か違った自分を発見した様な気持ちになりました。」と書いてゐる。

青年研究発表

第二日目の夕方、二十代の国文研会員による青年研究発表が行なはれた。

最初に三井三池製作所に勤務してをられる坂本精児先輩は、学生時代に橋本左内の『啓発録』を読んで「いつも自分の至らなさを補ってくれる本当の友を得たいと痛感した。」と述べられ、それから始められた、友との共同生活の体験を語ってゆかれた。そして今の職場でも、「現実から逃げず、心の躍動するままに生きたいと思ふ。」と述べられた。

続いて鹿児島県の屋久島にある小瀬田中学校で教鞭をとってをられる大久保民子さんは、大學生三年の時の一高校生との出会い、交流を通して、人と心を開いて語り合へたよろこびを語ってゆかれ、次に勤務してをられる学校に於て、卒業式に「仰げば尊し」を歌はうとして、先生方一人一人に訴へられた胸うたれる御経験を話され、「これから、先生方とも心を開いたつき合ひを深めていきたい。」と述べられた。

最後に登壇された住友電工技師・布瀬雅義先輩は、自分が直接会社や社会の役に立ってゐる実感がなく、あせてゐた時、「自分ひとりでは無い事に気づいた。」と述べられ、さらに御製や聖徳太子の十七条憲法をあげられて「個我の壁を乗り越え、皆が力を合

はせてゆくところに生きがいがあるのではないか。」と話された。

慰 霊 祭

三日目の夜慰霊祭が行なはれたが、それに先立って今年春、国文研叢書として出版された戦中学徒遺詠遺稿集、『いのちささげて』についての所感発表が、行なはれた。

最初に九州大学法学部三年・加藤多夏詩君が登壇し、合宿に初めて参加して以来、命をかけて国を支へてきた先人のことを考へ続けてきた、と語り、さらに「先人の歌をよむと、その心が自分の中によみがへってくる。この様にしてゆくことが御霊にお応へする、慰霊といふことではないか。」と述べた。

次いで海上自衛隊に勤務され、現在熊本大学大学院に在籍してをられる鏖信弘先輩は、先輩の祖父様が残された社会福祉事業について語られた後、貞明皇后、今上陛下、美智子妃殿下の御歌を紹介され、幸うすい人々に寄せられる温かい心が、皇室に受けつがれてゐる、と語ってゆかれた。

最後に『いのちささげて』の編集にあたられた横浜市・舞岡八幡宮宮司・関正臣先生は、三十三年間の御念願が成就された喜びを語られ、「命をすべて国にささげ尽した十二名の同志が、

今、手もとにもう一度生き返ったやうな気がする。」と沁々と話してゆかれ、おはりに、本の中にある寺尾博之さんの

倒れたる友を嘆かずいつの日かあもたどりゆく道と思へば
といふ遺歌を朗々と歌はれた。

そのあと国民文化研究会会員・吉田哲太郎先生より、この儀式の意味についての説明と諸注意がなされ、この後参加者は、広場に設けられた祭場に集合した。祭場には、篝火がたかれ、清らかな白布に包まれた祭壇が浮かび上がる。はるか古への祖先が見た同じ光景を、今又私たちは目の前にしてゐる。不思議なつかしさと感動が、胸にこみ上げる。間もなく儀式は始まった。お祓ひにかへて国文研の三宅将之先生により、故三井甲之先生の遺歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

が二度朗詠される。黙禱の後、最敬礼。御霊をお迎へする降神の儀である。高木尚一先生による祭文奏上、続いて小田村寅二郎先生が明治天皇御製を拝唱された。玉串が奉奠された後、全員で「海征かば」を斉唱し、再び黙禱、最敬礼、御霊をお送りして慰霊祭は終了した。

次に慰霊祭において拝唱された御製ならびに奏上された祭文を記しておく。

明治天皇御製

明治三十七年、日露戦争の折に「述懐」と題して詠ませたまへる御製 おほみうた 四首

たみくさ 民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな
国をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にはにたつもたたぬも
夏の夜もねざめがちにてあかしけるよのためおもふことおほくして
いくさ人いかなる野べにあかすらむ蚊かのこゑしげくなれるこの夜を

同じ年、「夢」と題して詠ませたまへる御製 おほみうた 三首

いくさびと 軍人すすむ山路をまのあたり見しは仮寝のゆめにぞありける
いくさ人まもるところに行きたりとみしは夢にてありけるものを
さ夜ふかくゆめをさましてさらにまた軍いくさのうへをおもひつづけぬ

同じ年「をりにふれたる」と題して詠ませたまへる御製 おほみうた 八首

おのが身のいたでおへるもしらずしてすすみも行くかわが軍人 いくさびと

寝ざめしてまづこそ思へつはものたむろの寒さいかがあらむと
くにのためたふれし人をおもひつつねたるその夜のゆめにみしかな
国のため身をかへりみぬますらをあまたえにけりこの時にして
はからずも夜をふかしけりくにのため身をすてたりし人をかぞへて
かぎりなき世にのこさむと国のためたふれし人の名をぞとどむる
戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ
世とともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

祭 文

阿蘇の山なみ、深々とかくむ広野にむれ立つ木立、ひろぐる草むら、夜のしじまに包まれし
今宵昭和五十三年八月六日、われら集ひて、とこしへにみくにまもりますみ祖のみたま、はた
またみくにのため尊きみいのち捧げたまひしいくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭仕
へまつらむとす。

しきしまのみちをふみわけ、みくにの内外にみてるまがごとのことごとを、力の限り打ち合
らはむと我らもろともに力合せて学びつとめ、講義の聴講に、はた班別討論などを重ねつゝ合



祭文を読まれる高木先生

宿教室もはや半ばをすごせり。

み山の草木のすみずみにまで、みなぎるみくにのいのちかゝふりつゝ、大君のみことかしこみ、みやのみたまのみまもりを信じつゝ、萬世よろづよかけて世のまさみちをきりひらかむと誓ひまつらむ。

我らもろともに、ふることのくしびにふれつゝ、今よりのちはつとめのにはに、まなびやに、はたまた教へのはに、心を通ひ合せつゝ、しきしまのみちいやつぎつぎにふみひらかむと、うけひまつることのよしを、みましみことたち、きこしめしたまへ

天がけるみ祖のみ霊よ、願はくは我らのゆくてをまもらせ給へと、ここに第二十三回全国青年学生合宿教室参加者一同に代り高木尚一謹み敬ひ畏み畏みまを白す

合宿最後の日

四泊五日の合宿も最終日を迎へた。初めに合宿運営委員長・志賀建一郎先生が挨拶に立たれ、「皆さんがこの合宿で学ばれたことは、端的にいへば、心の働かせ方」といふことでせう。しかしそれは決して国文研流の、合宿の中だけで通用するものではなく、日本人が遠い昔から伝へてきたすばらしい心の働かせ方だったと思ふ。皆さんがここで学ばれたもの、それは国文研的なイデオロギーではなく、国の命にふれて皆さんの内心から生まれ出たものでせう。大学に帰られたら、そのおもひを大切にしていって、今、日本の国のどこがおかしくなつてゐるのか友らとともに力をあはせて考へ続けていっていただきたい。」と眞実を吐露して語つてゆかれた。

次いで全体意見発表の時間もたれた。合宿教室で学んだ四日間の感動を語らんとしてこもく壇上に立つ友の姿に、聞く者も又、心を揺り動かされたのである。

続いて小田村寅二郎先生が登壇され「ハードな日程も最後に近づきましたが、この合宿のいとなみもお互ひの力を寄せあつてはじめて可能だったと思ひます。一人の力は大切ですが、自と他との一体感の中に拡大されてゆく個なるものの姿がいかに貴重なものかを、この合宿を通じて体験されたと思ふ。」と話され、「日本人は昔からそのやうな個の無限の可能性を大切にし、それを鍛へてきたけれども、現代の教育や学問はその役割を果してゐないだけでなく、専門分

化することによって逆に小さな個に閉ちこめようとしてゐる」ときびしく指摘された。さらに「日本人は古来歌をよむことによって自らの主観を客観化せしめ、その客観化されたすぐれた歌を自らの主観の中にしみこませるといふ営みをつづけてきた。この日本人古来の道を大切にしていたゞきたい。天皇制について考へる時もその道をたどり、御製を味はふといふことからはじめていたゞきたい」と訴へられた。

この後班別懇談に入った。共に語り合ふのも最後、班員の言葉には自然熱がこもる。そして感想文を執筆し、第二回目の和歌創作にうちこむ。静かなひとときであった。

閉会式のとぎがきた。国歌斉唱の声が、会場に二度響きわたった。国民文化研究会副理事長の宝辺正久先生が『明治天皇・昭憲皇太后御集』（角川文庫）を掲げながら「どうぞあなた方もこの本を手にして下さ



別 れ

い。敷島の道といふ学問のしをりになると確信してゐます。」と閉会の挨拶をされた後、参加学生を代表して西南学院大学法学部三年の酒村聡一郎君が、「合宿での感動を胸に刻んで、これからも共に学んでゆかう。」と力強く呼びかけた。続いて国文研の先生、先輩方に参加者一同で感謝の言葉を述べ、全員で力いっぱい「進めこの道」（三井甲之先生作詞、信時潔先生作曲）を合唱した。最後に中央大学経済学部三年・岩崎博君の「閉会宣言」によって合宿教室の幕は閉じたのである。

○

会場の玄関前では、山を下りる人、見送る人、共に手をとり合って別れを惜しむ光景が、しばし絶えなかった。四泊五日間に及んだ真剣な思索、友との語りひ。高原をふきわたるさはやかな風が、疲れた体をつつんでくれる。

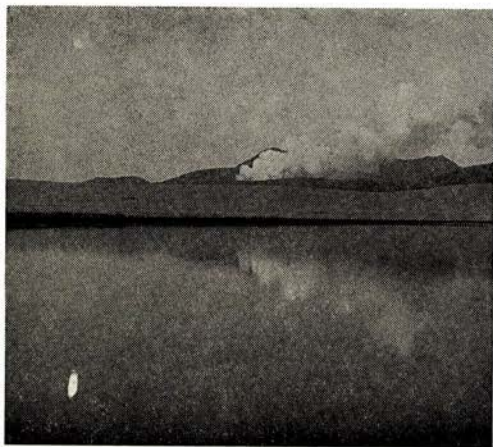
早稲田大学四年 右山 忠 史

集ひ来し友と別るるけふの日を忘れはせじと繰り返し思ふ

中央大学一年 井手口 昭 子

めぐりあひて心打ちとけし友どちと別るるときの悲しかりけり
別れても文交はさむと言はれたる友のことばに我もうなづく

合
宿
詠
草



夕月の草千里ヶ浜

奥富修一先輩の御講義を拝聴して

福岡大法三年山口道生

ひたすらに松陰の教へを伝へむと先輩の御言葉強まりてゆく
圍牆かんじょうの中も遂には学問の道を求むる集ひとなりぬ
司獄までも心ひらきて語り合ふ教への場にはの美しきかな

九州大 医 三年 笠 普一朗

奥富先輩の御講義の後の班別討論で

真剣に松陰の書ふみ読みるたる友らの姿見ればうれしも

それ迄は黙しをりたる友どちの己が思ひを語りてくれぬ

とつとつとつまりながらも胸ぬちの熱き思ひを語りてくれぬ

獄中で孟子講ずる松陰の強き志の胸にせまりぬといふ

もろともに松陰の書ふみ読みゆけば心つながる思ひわきくる

○

早稲田大 政経 二年 松本浩之

大久保民子さんの発表を聴きて

なつかしき心で人に接すれば直き心のよみがへるといふ
あたたかき心の通ひを願ひつつ歩まむといふ先輩とものたのもし

福岡教育大 教 三年 板谷紀子

大久保先輩のお話を聴きて

胸に手をあててひとつのことばをもこころをこめて語られにけり

○

中央大 商 三年 黒川洋

小林秀雄先生の御講義をお聴きして

「先生がおみえになった」の声聞きて思はず背筋を伸ばして待ちたり

ゆっくりと話しはじめし先生の声にいつしか熱のこもれり

先生のやさしき中にも厳しさのこもるお話に胸あつくなる

熊本大 医 二年 古井博明

小林秀雄先生の御話を聴きて

対話こそ学問なりと述べられし師の君のことば胸にひびきぬ

九州大 経 三年 奈良崎修二

小林先生の御講義の質疑応答の折

たどたどしく問ひをだしたる友どちのまなこ見据ゑて答へたまへり
語気強く身を乗り出してとくとくとさとすが如く語りたまひぬ

○

九州大 医 三年 渡 辺 英 則
高木先生の御講義をお聴きして

こみあぐる泪なみだこらへつつ語らるる師の御姿に心打たれぬ

早稲田大 社会科学 四年 横 前 忠 幸

小田村先生の御講義を聞きて

乱れたる学問のあり方正さむと闘ひ進まるる師を仰ぎ見る
満身の怒りをこめて語らるる師の言の葉にひかれゆくなり
われもまた師の歩まれしこの道をいのちの限り進みゆきたし

山口大 教 四年 藤 本 紀代子

松本先生登壇の折（編註・師の君は小田村先生のこと）

杖つきて壇に上がらるる先生の脇を抱へし師の君やさし

防衛大 管理 三年 船 越 長 弘

松本先生の御講話を聴きて

おどること語り給へる大人うしの眼の活き活きとしてうれしかりけり
七十年の昔を昨日にありしごと語らるる大人うしの素晴しきかな
米寿をば迎へむ人のかくまでに確かなる記憶に驚かされしも
素晴らしき大人うし末永くましませと思ひたりけりみすがたみつ

松本先生の御講話をうかがひて

鹿児島経済大 経 四年 川 口 武 範

うれしげにわれらを見つつ話さるる師のみ姿のしたはしきかな
とき折にみ手ふりながら若き日のことをくさぐさ語りたまへり
満州の旅に行かむと昼食をぬきてつひえをつくられしといふ

旅先に明治の君のみ病の重してふしらせうけとりしといふ
旅順にて八億年を経にきたる岩をひろひて持ち帰りしと

ハルピンに帰り来ませば大君の危篤なるしらせ待ちをりしといふ
大君の病いえよとみ友らと一夜を徹し祈られにしと

夜を徹し祈りまつれど大君は神さりましぬそのかひもなく

日の本ゆつきたる知らせのただ一語「ホウギョ」の文字見て泣きたまひしと
旅行やめただ日の本に二重橋にはせ帰るあひだただ泣きたまひしと

とき折に目をとちたまひもだしたまふそのかなしみをおもひだすがに
大君と民のきづなのかくばかり堅かりし御代に生きてありしか

二重橋にはせつきませばもろびとの皇居にむかひて土下座しをりと

一高の旗は校旗にあらずして国護りの旗ぞとのりたまひにし
国護りの旗を捧げて大君のとむらひ車を送りまつれり

牛の引くとむらひ車のきしむ音のひびくを今も忘れられずと

しらぬまに心はすみぬ吾にはただそのみ姿のしたはしくして

脱線してすみませんでしたと師の君は深くかうべをさげたまひけり
深々とかうべさげたまふ師の君に思はず涙のこみあげにけり

いつまでもすこやかにませとあたたかきおもわを見つつ心に思へり

○
和天山さんの遺詠を拝誦して

みいくさにいでたつ君の詠みませるかなしき雄々しきうたのしらべよ
ひたにもゆるいのちをもちてはらからをいとほしみつつ征きませる君
すめらぎのいやさかいのり日の本の無窮をいのり征きし君はも

兄の登壇を前にして

玉川 大文 三年 加藤 詩麻音

先輩と呼ばれし兄の紹介を聞きてうれしきこみあげにけり
壇上に歩みゆく兄の姿みてふるへる身体おさへられずも
眉あがりきびしき顔に底知れぬ兄の強さをみつけたるかな
家にてはいつもやさしき兄なれど今日の姿のたのもしきかな

△登山・和歌相互批評▽

登山の折、小林先生の御講義を思ひ返して

日本 大商 三年 百田 公児

噴き上がる白煙見つつ師の君の力あふるる生きざましぬびぬ

早稲田 大法 二年 新倉 潤一

母牛の後につづきて歩みゆく子牛の姿可愛かりけり

熊本 大工 一年 宇都 信隆

雨あがり阿蘇の原野にむつまじく親子の牛は草を食みをり

九州 大理 四年 多久 善郎

友どちと息づき登るこの道を父と登りき幼き頃に

順天堂大 体育 二年 菊川慶一
たらちねの母を思ひて大阿蘇の霧の彼方に故郷をしぬびぬ

熊本商科大 経 一年 田中恒秋
中岳登山の折に

病み臥せる母の姿を思ほえば足どり重くなりてくるなり

大阪芸術大 芸術 四年 小川俊彦
阿蘇火口にのぼりて

大阿蘇の火口に立てばかすかにも地鳴りの如き音の聞こえ来
かすかにも火口の底ゆ音聞こえ白き煙の湧き上がり来る

長崎大 教 一年 石田綾子
友どちとはげましあひつつ火の山の荒き岩肌登りゆきけり

福岡教育大 教 三年 久間敏子
中岳登山の折に

わがために手をさしのべて待つ友のやさしき思ひ嬉しかりけり
福岡女子大 文 四年 光山香奈子
見さくればなだらかにつづく外輪の尾根に真白き雲たちのぼる

和歌相互批評

島根大 文理 二年 和田正人

わが友の作りし歌の心をば感じとらんとくりかへしよむ
言の葉の一つ一つにこもりたる友の心を感じんとする

九州大 農 一年 佐野淳志

和歌相互批評にて

かくまでも難しきものか友どちの心あらはす言葉さがすは
すがしかり友どちの得たき言の葉を共に考へ浮かびけるとき

△友との語りひ▽

鹿児島大 理 三年 福元宗徳

一 昨年合宿教室にて知り合ひし先輩と再会して

昨年は会へざりし先輩の姿見てただうれしさに急ぎかけよる

久々に会ひたる先輩の面を見れば言ひたきことも言葉にならず
かたとせ

二年の時は経つれどなつかしき先輩の姿は変はらずてあり

友どちと心開きて語り合へばはらからのごと心なごみぬ
長崎大 経 四年 北林幹雄

大阪大 文 四年 絹田洋一

どうしても御歌を素直に読めぬてふ友の言葉を聞けば悲しき

友どちよまごころこもる天皇の御歌読みませ心なほくして

いかならむと問へば小さくよかつたとつぶやきませりこの友どちは

声合はせ御歌読みゆくその中に友の小さき声もきこえく

九州大 工 一年 松井哲也

素直なる心の人となりたしと思ひし心をゆめ忘るまじ

亜細亜大 経営 二年 杉崎正彦

み友らと声を合はせて歌ひゆけば心の一つになりゆく心地す

日本大 文理 四年 清水充

常日頃言葉の重み思へども軽々しく使ふ私の恥ぢらる

九州大 法 二年 金子光彦

友どちと未だ心の通はぬとふ友の言葉の我にもしみぬ

友どちを求むる心我にあり友にもあるらむ同じき心は

九州大 工 二年 弓 立 忠 弘

偽らぬ自分の気持ちを書べし時友のこたへてくるるは嬉し

友どちのころをしかと知りたくてまなこ見つめて友の声聞く

西南学院大 文 四年 西 中 章

友どちと故郷くくにのことはを教へ合ひ語るひととき楽しかりけり

高崎経済大 経 二年 伊 藤 稔

忙しき日程を終へひとりして星見上ぐれば故郷ふるさと思ほゆ

京都産業大 外国語 一年 村 田 尚 文

この空に遠く続ける故郷の空をおもへば父母しのばゆ

中央大 経 二年 松 村 太 志

霧にけむる阿蘇の夕暮れながむれば我が故郷ふるさとの思ひださるる

鹿児島大 教 四年 黒 木 美 智 子

班別討論の折

班別の討論の折それぞれに素直な思ひを語り合ふなり

涙して語りかけくる友どちの切なる思ひ伝はりてくる

感動し涙とまらぬ友どちの語る姿のただに美し

山口大 文理 四年 脇村典子
友どちの声ふるはせて感動を語りかくる目に涙の光る

友もまた我と同じき思ひして聴きたまひしかと胸あつくなる

鹿兒島大 教 四年 篠田哲秀

母より祖母死すの電話ありて

友どちと共に過ごせし合宿も残りわづかとなりしものを

友どちとあはただしくもなごりをしみ帰りの汽車に今乗らむとは

九州大 工 三年 亀川龍彦

合宿の途中に友帰省す

父君の倒れられしとふ知らせ受け疾く帰らむと君は語りぬ

やうやくに心開きて語り合ふ時を得たるに君去りゆくか

今一度戻り来たしと語りつつ君は我が手を握りしむるも

△全体所感発表の折に▽

長崎大 教 二年 出口昭

つぎつぎと壇上に立ちてありのままの思ひのべゆく友の姿よ

その顔は恥づかしさうにしながらも勇氣をもて立つ心偲ばる
壇上ゆ友の語りし言の葉はまとまらずとも心打たるる

西南学院大 商 四年 宝 辺 成二郎

壇上に上りゆきませし友どちは胸につまりたる思ひを述べぬ
友どちは声低くして胸ぬちを語り給ひぬたどしくも

言ひ終へし君の顔をばながむれば笑みをたたへて清しかりけり

亜細亜大 経 三年 山 田 雅 司

最後の日我れの思ひを述べたしと恥づかしさ忘れ思はず手を挙ぐ

福岡大 商 一年 白 水 善 之

黒岩先輩の感想をききて

肩ふるへ涙あふれし先輩のその顔見れば胸あつくなりぬ

ひたすらに友思はるる先輩の心思へば言の葉もなし

真心をもちて友らに接せよと言ひし言の葉胸にしみいる

早稲田大 政経 二年 平 田 陽 一

黒岩さんの感想を聞きて

感涙に声にならずとも班長の胸の思ひはひたひたと伝はりぬ

五日間班員のためがんばりし班長の苦勞いかに多からむ
心こめ胸にあふるる思ひをば語らるる姿我は忘れじ

九州大 医 三年 長 澤 一 成

全体所感発表の折高岡さんの有馬君を語るをききて

のごはねばと思へどのごへず流るるままに涙流しつ亡き友思はれ
ありし日の友の姿のまなかひにみゆるがごとくひた泣きに泣く

今は亡き友の御魂も聞きつらむ心待ちにせし大人の御声を(編註・大人は小林秀雄先生のこと)

△別れ▽

夜のつどひの後班員皆で散歩をした折

熊 木 大 医 三年 福 田 誠

御友らと車途絶えてしづかなるすがしき夜の阿蘇路歩めり

翌日は皆別れゆく御友らと今は楽しき種々語りぬ

今ここで一つ心になりたるを別れし後も思ひ出さなむ

西南学院大 法 三年 酒 村 聡 一 郎

最後の班別討論の折

友どちの涙ながらに語りたまふ姿を見れば涙こみあぐ

五日間共に過ごせし仲なれば苦しき思ひのひたに伝はる

やうやくに友の素直な心にぞ触れ得たることのうれしかりけり

夜明けまで心開きてみ友らと語りしことをゆめ忘るまじ

中央大 商 三年 黒川 洋

空白みゆくまで語りし友達と別るる時の近づきにけり

一人去りまた一人去る友達の後ろ姿を目に焼きつけん

熊本大 法文 二年 緒方 啓一

語る夜も最後と思へば時忘れいつしか空は明るくなりぬ

西南学院大 経 二年 松岡 比呂史

討論もこれで最後と思ひつつまた会はむ日を思ひ遣るなり

早稲田大 教 四年 右山 忠史

集ひ来し友と別るるけふの日を忘れはせじと繰り返し思ふ

中央大 経 三年 岩崎 博

閉会式を終りて

共に学び共に悩みし友どちと別るべき日のすでに來たるも
この顔を忘れまいぞと友どちの若き面輪をじつと見つむる
種々の思ひは胸にうかべどもこのさみしさをうたふ術なしすべ

△大学教官有志協議会・国民文化研究会▽

高千穂商科大学教授 高 木 尚 一

をやみなき噴煙白く立ちのぼる阿蘇の火口に人らむらがる

觀光の人らの列は絶えまなく火口に向ふ岩肌の道を

山頂ゆ下見下せば切りたちし岩の縞肌みるもおそろし

噴煙はしづかなれども空高くふき上ぐる力たたたふるごとし

亜細亜大学教授・教養部長 夜 久 正 雄

みどり深き阿蘇の草原をち方は朝霧こめてはてしなく見ゆ

あざみ咲く露の草原ふみわけて朝のつどひにゆくがたのしさ

噴きあがるけぶりおそろしたて縞の層なす火口の壁の下より

さみどりの草原のはての丘のうへに湖とほく見えてなつかし

さみどりの垣山のうへの棚雲のうへに九重くじゅうのみね連れり

草千里展望台より雲仙の見ゆと聞けども霧とざしたる

いちめん霧たちこめて中空に白き小さき日見えがくれつつ

亜細亜大学教授・国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎

小林秀雄先生が御講義を終へて帰り路につかせられる折に

大人うしいまし帰らせ給ふかお元氣に講義終へまししみ顔清すがしく

二時間半の長きにわたりお話をなされしみ声に力こもりき

一時間か一時間半でお疲れになられるかとも氣遣ひをりしに

去年の暮れゆ千々に心を碎き来し、大人うしみ招まねき”のことは実りき

肩の荷の下りし心地にたたずみつ阿蘇の山辺にまなこやりぬる

下関・(株)宝辺商店社長

宝 辺 正 久

夜久先生の古事記朗誦を聞く折に

講義室に吹きいる風の方みれば阿蘇外輪の尾根晴れわたる

雲低く雨さへ降りてゐたりしに草原遠くいまはれにけり

わが先輩がふるごとぶみを誦みまつる声聞きてをり外見やりつつ

「何とかもなきいさちる」と問ひすすむことばのひびきわが心打つ

ひびき残し駆けゆくごときことのはに心はこもるわれらがみおやの

尾根に立つ雲かがやきて外輪の片山かげの緑ふかしも

八代市助役 加藤敏治

亡き友とともに登りし若き日の思ひ出浮びく今もさだかに

火をふきし昔偲ばす岩山の道なき道を友と登りぬ

亡き友のみ姿振舞あざやかに目には浮べど会ふ術もなし

先立ちし友らの残しし願ひはも我が胸に生く世にある限りは

亡き友の魂まつる時近づきてひぐらしの声しげくなりつつ

雨降らずあれよとただに祈りつつ魂まつるべき時を待つなり

福岡教育大学教授 山田輝彦

小林秀雄先生を迎ふ

阿蘇の地に迎へまつりてみことばを聞かむこの日を待ちに待ちたり

宣長に関する書はあますなく読みつくしきと言ひ放ちます

書くべきは書きつくしたり今更に何をか加ふと大人はのたまふ

孤独なる学びの中に万人に通ふみことばつづりませしけむ

師の面輪間近に見れば一すぢの道のきびしき胸にひびき来

うつそみのいのち傾け文書きし人のことばの何ぞさやけき

前行政管理庁事務次官 小田村 四郎

緑なす阿蘇の山辺に若きらの大き集ひに我もまる来ぬ

そのかみの信濃の集ひ偲ばれて日々に心のみつるうれしさ

今宵はもみたままつりと定まりておごそかならむ山あひの里

みそ年のつとめををへて再びの門出とならむこのみまつりは

(株)ファミリー常務取締役

松 吉 基 順

ひととせのはやめぐり来てこの夏は阿蘇に集ひぬ吾子と連れだち

いつの日か吾子ともなひて合宿に赴く日もがなと詠みしを忘れず

久しかる願ひかなひて阿蘇の地に吾子ともなひぬ今日のよろこび

佐世保市交通局企画係長

朝 永 清 之

しつらへしまつりの庭辺夕さりて夏虫の声しげく聞こゆる

年々のまつりのつとめ五度も重ねたるかな惑ひながらも

事々に手ならひしつとつとめたる初めのころのなつかしきかな

うけつきし手はずの中に新しきわざも加へてつとめ来にけり

歯科医師 吉 田 哲太郎

つたなかる身にはあれども合宿の蔭の力となるは嬉しも

研究発表を迎へて

鹿児島県小瀬田中学校講師 大久保 民 子

友みなの力を合はせ迎へたる発表なれば不安はあらず
友どちの身をのりだして聞き給ふ姿し見れば心安らぐ

あとがき

阿蘇の合宿教室を終へてすでに半歳を超え、全国の学生諸君が春の合宿をめざして研鑽をつみ重ねてゐる時、本書の校正も漸く終りをむかへた。一年に一度の合宿教室にすべての力を傾けてきた私たちのおもひをささやかな記録ながら本書の行間にくみとっていただければ幸である。

特に今度の阿蘇合宿には、小林秀雄先生が名著『本居宣長』を完成されたあとの御多忙の中を割いて、遠い九州の地まで五回目の御出講をいただいたことは何ものにもかへがたい感激であった。さらに本書の編集にあたっては、当日の御講義の速記原稿をもとに、編集委員で作製した四百字詰四十五枚の原稿の殆んどすべての頁にわたって、御心こもる御加筆をいただき、さらに先生御自ら校正の筆までおとりいただいたことは言葉に尽せないよろこびであった。このたゞならぬ先生の御厚志に御応へすべき道を求めて日々精進を重ねることが、私達に与へられた重大な課題であることをいましむと思はざるを得ない。

なほ、本書のタイトル頁を橋本瑞夫氏の撮影になる阿蘇の写真の数々で飾らせていただいたことも望外の幸せであった。橋本氏は公務員としての勤務のかたはら、阿蘇の山の無限の神祕に深くおもひを寄せられ、昨年、写真集「阿蘇」を九州公論社から出版、江湖の注目を浴びられた方であるが、その御本の中から特別

の御好意をいたゞいて十数葉の掲載を御許しいたゞいたものである。紙上をかりて心から御礼申し上げたい。

今年の合宿教室は八月五日より十一日まで霧島国立公園の硫黄谷にある「霧島ホテル」で開催する運びとなつてゐる。全国の友らの集ふその日を偲びつつ編集の筆を擱く。

昭和五十四年三月

編集委員

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円 三、〇〇〇円
憂国の光 と 影 ― 田所広泰遺稿集 ―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
古事記のいのち ― 改訂版 ―	夜久 正雄	四一・三・二五 (原 版) 四八・一一・一一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 一、二〇〇円
日本精神史鈔 ― 親鸞と実朝の系譜 ―	桑原 暁一	四一・一一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

Na.11 続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—	Na.10 欧米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—	Na.9 歴史と人生観 —マルクス主義の超克—	Na.8 日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)—	Na.7 日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)—	Na.6 日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)—	Na.5 日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)—	Na.4 日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)—	Na.3 弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井 修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三二七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	五〇〇円 一〇〇円	六〇〇円 一〇〇円	七二〇円 一〇〇円	七八〇円 一〇〇円	七八〇円 一〇〇円	六二〇円 一〇〇円	六〇〇円 一〇〇円	五〇〇円 一〇〇円

No.19	No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
いのちささげて ―戦中学徒・遺文遺詠抄―	明治天皇御集研究	日本における ―マルクス主義批判論集―	国史の地熱 ―聖徳太子と橘氏の精神―	白村江の戦 ―七世紀・東アジアの動乱―	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ ―続「短歌のすすめ」―	短歌のすすめ
国民文化研究会編	三井甲之著	戸田義雄編	桑原 暁 一	夜久 正 雄	桑原暁一編	山夜 田久 輝正 彦雄	山夜 田久 輝正 彦雄
五三・二・一五	五二・二・一〇	五一・三・一〇	四九・一〇・二五	四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・一二・一	四六・四・一
四四九頁	三五四頁	三二〇頁	二七九頁	二八九頁	三二八頁	三一六頁	三〇九頁
〒九〇〇円 一六〇円	〒七〇〇円 一六〇円	〒七〇〇円 一六〇円	〒七〇〇円 一三〇円	〒五〇〇円 一六〇円	〒五〇〇円 一六〇円	〒三五〇円 一六〇円	〒六〇〇円 一六〇円

C 「合宿教室」レポート

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
1	霧島 (九二名)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5判 八八頁	〒一五〇円 二〇〇円
2	福岡 (二七名)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5判 五三頁	〒一五〇円 二〇〇円
(2)	岡山	32	民族復興の根底を培うもの	木下尚一・彪・石村暢五郎 高木尚一	新書判 一三三頁	〒一〇〇円 二〇〇円
3	佐賀 (七二名)	33	民族の明日を求めて	勝部真長・木下彪 森三十郎	新書判 二五〇頁	〒二〇〇円 二〇〇円
4	阿蘇 (二六〇名)	34	国民同胞感の探求	花田大五郎・中山優 野口恒樹	B6判 三六五頁	〒五〇〇円 一〇〇〇円
5	雲仙 (二〇〇名)	35	続国民同胞感の探求	木内信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎	B6判 四三三頁	〒五六〇円 二〇〇〇円
6	雲仙 (二〇八名)	36	続々国民同胞感の探求	小林秀雄・木内信胤 津下正章	B6判 三二五頁	〒五〇〇円 一〇〇〇円

22	21	20	19	18	17	16
雲 (三三二名) 仙	佐世保 (三七二名)	阿蘇 (四三五名)	霧島 (五二八名)	雲仙 (四三三名)	阿蘇 (四〇二名)	霧島 (三〇二名)
52	51	50	49	48	47	46
日本への回帰 ―第十三集―	日本への回帰 ―第十二集―	日本への回帰 ―第十一集―	日本への回帰 ―第十集―	日本への回帰 ―第九集―	日本への回帰 ―第八集―	日本への回帰 ―第七集―
木内 信胤・衛藤 藩吉	木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・福田 恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛	山本 信胤・胡 蘭 成 勝市	木内 信胤・戸田 義雄 村松 剛
新書判 三三二頁	新書判 二八五頁	新書判 三二五頁	新書判 三〇六頁	新書判 二八九頁	新書判 三〇六頁	新書判 三二二頁
〒五〇〇円 一六円	〒五〇〇円 一六円	〒五〇〇円 一六円	〒五〇〇円 一六円	〒五〇〇円 一六円	〒三〇〇円 一六円	〒三〇〇円 一六円

(国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行)

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
第十回 「合宿教室」参加者感想文集 三一五名	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5判 八〇頁
第十一回 「合宿教室」参加者感想文集 二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5判 一四〇頁
第十二回 「合宿教室」参加者感想文集 三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5判 一二〇頁
第十三回 「合宿教室」参加者感想文集 三五三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5判 一一八頁
第十四回 「合宿教室」参加者感想文集 四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回 「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘— 四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁
第十六回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁

第十七回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁
第十九回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	五二八名	国民文化研究会編	四九・一〇・三〇	A5判 二〇〇頁
第二十回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三五名	国民文化研究会編	五〇・一〇・二〇	A5判 一六七頁
第二十一回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三七二名	国民文化研究会編	五一・一〇・二〇	A5判 一五一頁
第二十二回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三三二名	国民文化研究会編	五二・一〇・二五	A5判 一五六頁
第二十三回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四四〇名	国民文化研究会編	五三・一〇・二五	A5判 一八五頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流（日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	浜川 田修二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
（資料）九州地区国立大学紛争の体験記録 →教官側の発言→	（昭和四十六年十月） （国民文化研究会発行）	A5判 三三三二頁	非売品
歌よみに与ふる書・他四編	正岡子規 （国民文化研究会発行）	新書判 一二二頁	（品切）
天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 （斑鳩会発行）	新書判 一〇七頁	（品切）

今上天皇御歌解説 (附)万葉集論	三井甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁	(品切)
明治・大正・昭和 「護選 詔勅集」	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	千二二〇円
式典曲「神洲不滅」 行進曲「進めこのみち」	三井甲之作詞 信時潔作曲 —日本学生協会の歌—	A5判 各四頁	各一〇〇円 千一〇〇円

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新輯 日本思想の系譜(上・下) —文献資料集—	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A5判 (上)八五七頁 (下)九二二頁	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田村寅二郎 (日本教文社)	四六判 三〇五頁	八五〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書 No. 1 「古事記のこゝろ」の翻訳)	(訳者)G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]	B6判 二〇八頁	

歴代天皇の御歌 — 初代から今上陛下まで二千首 — 歌人・今上天皇 (増補改訂)	小田村 寅二郎 柳 陽太郎 (日本教文社)	四六判 四三八頁	一、七〇〇円
	夜久正雄 (日本教文社)	四六判 三四三頁	一、五〇〇円

H 月 刊 誌

誌 名	創刊・号数	版・頁 数	定 価
月刊「国民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十四年三月現在二〇九号	B 5 判 八頁	年間 1,000円 共
「国民同胞」合本 第一卷 第二卷 第三卷 第四卷	第一号〜第五〇号 第五一号〜第一〇〇号 第一〇一号〜第一五〇号 第一五一号〜第二〇〇号	各卷四〇〇頁	各卷 二〇〇〇円 (含送料) 残部僅少

1 (分科会)・教育内容は正促進委員会編著

書名	発行年	版・頁数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B5判・二五頁

— 日本への回帰 —

(第14集)

昭和五十四年三月二十三日発行

定価 五〇〇円

〒一六〇円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田 寅一郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします



